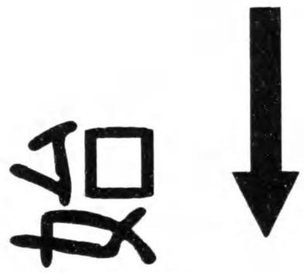

330
424

マルクス全集

資本論

高畠素之譯

第一卷

第三冊

株式會社大鐙閣藏版

資本論

經濟學の批評

第一卷　資本の生產行程

資本論 第一卷 第三册 目次

第七篇　資本の蓄積行程……一―四三六

第二十一章　單純なる再生産……四

(資本の附屬物としての勞働者階級。資本制生産行程によつて再生産さるゝ資本家と勞働者との關係)……四

第二十二章　餘剩價値の資本化……三三

(一) 擴大したる規模に於ける資本制生産行程。商品生産の所有權法則の資本制占有法則への轉化……三三

(二) 擴大したる規模に於ける再生産に關する經濟學の謬見……五一

(三) 餘剩價値の、資本及び收入への分割。節慾學說……五七

(四) 餘剩價値の、資本及び收入への比例的分割より獨立して、蓄積の範

圍を決定する諸事情——勞働力搾取の程度、勞働の生產力、充用資本と消費資本との差額の增大、前貸資本の大小……七三
(五) 謂ゆる勞働基金……九五
第二十三章　資本制蓄積の一般法則……一〇三
(一) 資本の組成に變化なき時に於ける、蓄積に伴ふ勞働力の需要增加……一〇三
(二) 蓄積及び其れに伴ふ集積の進行中に生ずる、可變資本部分の相對的減少……一一二
(三) 相對的過剩人口、換言すれば產業豫備軍の累進的生產……一三四
(四) 相對的過剩人口の種々なる存在形態。資本制蓄積の一般的法則……一五七
(五) 資本制蓄積の一般的法則の例解……一七三
a　一八四六年より一八六六年に至る英吉利……一七三
b　英國產業勞働者階級中の薄給部分(榮養狀態——住屋狀態——倫敦——ニューキャッスル・アポン・タイン——ブラッドフォード——ブリストル)……一八六
c　浮浪勞働者(住屋事情——鐵道勞働者——炭坑及び其の他の鑛山勞働者)……二〇六
d　勞働者階級中の最厚給部分に及ぼす恐慌の影響(倫敦東部に於ける造鐵船勞働者)……二一四
e　英吉利の農業プロレタリア(浮浪勞働者隊)……二二五
f　愛蘭……二七九
第二十四章　謂ゆる本來的蓄積……三一〇
(一) 本來的蓄積の祕密……三一〇
(二) 英吉利の農民に對する土地收奪(十五世紀の七十年代以後及び十六世紀初期の數十年代に於ける耕地の牧場化——宗教改革、及び寺領の奪取——封建的所有のブルヂョア的所有化——王政復古と『光輝ある革命』——國有地の奪取——共同地及び其盜掠——蘇格蘭高地

に於ける所有地の解放、耕地の羊牧場化、及び羊牧場の獵場化）……三一六
(三) 十五世紀末以降行はれたる、被收奪者に對する殘虐なる立法。勞
銀低減の法律……三五四
(四) 資本家的小作農業者の發生……三七〇
(五) 農業革命が工業に及ぼせる反作用。工業資本に對する國內市場
の造出……三七六
(六) 工業資本家の發生（植民制度——國債制度——近世租稅制度及び保護
制度——大工業の初期に於ける兒童掠奪）……三八五
(七) 資本制蓄積の史的傾向……四〇八
第二十五章　近世植民說……四一五
譯註……一—五八

資本論 第一卷 第三册 目次 終

第七篇　資本の蓄積行程

一貨幣額の生產機關及び勞働力への轉化は、資本として作用すべき價値量の爲す第一運動である。此運動は市場、卽ち流通界に於て行はれる。運動の第二階段たる生產行程は、自己の組成諸部分の價値を超過せる價値を有する、卽ち最初に前貸せる資本と一の餘剩價値との和を含む諸商品に、生產機關が轉化するや否や完了する。之等の商品は次いで又流通界に投げ込まれねばならぬ。其れは販賣され、其價値は貨幣に依つて實現され、此貨幣は新たに資本化され、斯くして絕えず之れが繰返されねばならぬ。此、常に同一の逐次的諸階段を通過する循環運動は、資本の流通を成すものである。

蓄積の第一條件は、資本家が其商品を販賣し、斯くして得たる貨幣の大部分をば資本に再轉化し了へるてふこと、是である。以下、資本は尋常に其流通行程を通過するものと假定する。此行程に關するより立入つた分解は之を本書第二部（第二卷）に於て試みる。

餘剩價値を生産する、換言すれば勞働者から直接、不拂勞働を汲み取つて之を商品に固定せしむる資本家は、此餘剩價値の最初の占有者たるには相違ないが、決して其最後の所有者ではない。彼れは續いて之れを、社會的生産の全體に於て他の諸職分を全うする資本家並びに地主との間に分配せねばならぬ。かくて餘剩價値は種々なる部分に分割される。其諸斷片は、種々なる範疇の人々の有に歸し、利潤、利子、商業利得、地代等の、相互獨立した種々なる形態を受ける。餘剩價値の之等轉化せる諸形態は、本書第三部（第三卷）に於て、始めて之れを取扱ひ得るのである。

故に我々は、一方に於て、商品を生産する資本家は夫れを其價値通りに販賣するものと假定し、それ以上、商品市場への彼れの復歸、換言すれば資本が流通界に於て取る新らしき諸形態に就ても、また之等の形態に包藏さるゝ再生産の具體的諸條件に就ても顧みないことにする。他方に於て我々は、資本制生産者をば、餘剩價値全部の所有者、或は寧ろ、彼れと共に獲物を分有する總ての人々の代表者として取扱ふ。故に我々は先づ、蓄積をば、抽象的に換言すれば直接の生産行程の單なる通過點として考察する。

尙また蓄積が行はるゝ限り、資本家は首尾よく生産商品を販賣し、其の賣上貨幣を資本に再轉化することが出來る。更に、餘剩價値が種々なる斷片に分割さるゝことは、餘剩價値の性質の上にも、また餘剩價値が依つて蓄積の要素となる必要諸條件の上にも何等の變更を與ふるものでない。資本制生産者が餘剩價値の幾部分を自己に保留し又は他人に割讓するにしても、彼は常に先づ之れを占有する。故に蓄積に就ての我々の說明に於て假定さるゝことは、事實上の蓄積進行に於て假定さるゝ所である。他方に於て、餘剩價値の分割並に流通の仲介的運動は、蓄積行程の單純なる基本形態を曖昧にする。されば蓄積行程を純粹に分解するには、其機構の內的作用を隱蔽する一切の現象を暫時度外視するを要するのである。

第二十一章　單純なる再生産

生産行程は、其社會的形態如何を問はず、連續的のものでなくてはならぬ、換言すれば周期的に絕えず新たに同一の諸段階を通過するものでなくてはならぬ。一の社會は消費するを止め得ざる如く、生産するを止め得ないのである。故に各社會的生産行程は、之を其不斷の聯絡並びに其更新の絕え間なき流動てふ點から觀察する時は、同時に再生産行程である。

生産の諸條件は、同時に再生産の諸條件である。如何なる社會も、其生産物の一部を絕えず生産機關、換言すれば新生産の要素に再轉化せずしては、絕えず生産することは出來ぬ。他の事情に變化なき限り、一の社會は、例へば一年中に、消費したる生産機關卽ち勞働要具、原料、助成材等に代ふるに、年生産物中から分離されて新たに生産行程に併合される同量の同種新物品を以てすることに依りてのみ、其富を同規模に再生産又は保存することが出來る。されば、年生産物中の一定量は、生産に屬する。此一定量は最初より生産的消費に定められてあるので、其の大部分は、おのづから個人的消費を除外する現物形態に於て存在してゐる。

生産が資本制的形態を有するとすれば、再生産も亦其の通りである。資本制生産方法に於て勞働行程は單に價値增殖行程に對する一手段たるに止まる如く、再生産も亦、前貸價値を資本換言すれば自己增殖價値として再生産する一手段たるに過ぎぬものである。「資本家てふ經濟的假裝が一の人間に固著するは、彼れの貨幣が絕えず資本として作用するからに過ぎぬのである。」例へば百磅てふ前貸貨幣額が今年資本に轉化して二十磅てふ一餘剩價値を生産したとすれば、其れは明年及び其後の年々に於ても此同じ作用を反覆せねばならぬ。餘剩價値は資本價値の周期的加量換言すれば作用資本の周期的果實として、資本より生ずる一收入〔1〕たる形態を受ける〔一〕。

（一）他人の勞働の諸生産物を消費する富者等は、たゞ交換行爲（商品購買）に依つてのみ之等の生産物を受ける。然し彼等にして若し、其むら氣が要求する所の新生産物を得べく其取得蓄積したる富を返還する時は、彼等は體て其基金を蕩盡せねばならぬかのやうに見える。我々は既に、彼等が勞働せず又全く勞働し得ざる者なるとを述べた。

故に我々は信ぜねばならぬ、彼等の蓄來の富は日を逐ふて減少すること、又彼等には何物も殘らない故に、專ら彼等の爲にのみ働く勞働者は交換に於て何物をも提供せられざるべきことを。……然しながら富は、社會的秩序の中に於て、其所有者がそれに共勞することなく他人の勞働に依つて自己を再生産する力を受けた。富は勞働と同じく、又勞働に依つて、富者をより貧しくすることなしに年々消耗され得る一の年果實を供給する。此果實は、資本より生ずる收入である』（シスモンヂ著『經濟新原論』第一卷、第八一頁及八二頁）[3]。

此收入が資本家に取つて、單に消費基金として役立つに止まる時は、卽ち其れが獲得さるゝ場合と同樣周期的に消費さるゝ時は、他の事情に變化なき限り、單純なる再生產が行はれる。所で、單純なる再生產は生產行程の單なる同規模反覆に過ぎぬものであるけれども、此單なる反覆又は繼續は、生產行程に一定の新たなる諸性質を印刻する。或は寧ろ、生產行程が單に孤立的なる行程として有したる若干の外見的諸性質を消滅せしめる。

生產行程は一定時間分の勞働力の購買を以て開始される。そして此の開始は勞働の販賣期間が滿期となり、それと共に一定の生產期間卽ち一週、一月等が經過するや否や、絕えず更新されるのである。然るに勞働者は、其勞働力が作用して其れ自身の價値並びに餘剩價値を商品に於て實現せる後に始めて支拂を受ける。故に彼は、餘剩價値——我々が暫時、資本家の消費基金と見るに止める所の——以外に、彼れ自身に對する支拂の基金たる可變資本をば、其れが勞銀の形に於て彼れの手に流れ戻る前に生產したとになる。そして、彼れは單に此基金を絕えず再生產する間だけ使用されるのである。第十章IIの下に述べた、勞銀を生產物自體に對する分け前として示す、經濟學者等の公式は此に由來するものである[4]。勞銀の形で絕えず勞働者の手に流れ歸るものは、勞働者自身が絕えず再生產する所の生產物の一部である。資本家は勞働者に商品價値を貨幣で以て支拂ふには違ひないが、然し此の貨幣は、勞働生產物の轉化せる形態に外ならぬものである。勞働者が生產機關の一部を生產物に轉化してゐる間に、彼れの以前の生產物の一部は貨幣に再轉化される。今日又は現半年に於ける彼れの勞働の代として支拂はるものは、前週又は前半年に於ける彼れの勞働である。貨幣形態に基く幻想は、個個の資本家及び個々の勞働者の代りに資本家階級及び勞働者階級を考察すると

きに、忽ち消滅する。資本家階級は貨幣形態に於て絕えず、勞働者階級に依つて生産せられ自階級に依つて占有さるゝ生産物の一部に對する指圖式小切手を勞働者階級に與へる。勞働者は又絕えず、此小切手を資本家階級に返還し、それに依つて自己の生産物中自己の有に歸する部分を資本家階級から引き取る。生産物の商品形態と商品の貨幣形態とは、此取引を隱蔽するものである。

(二)『貨銀も利潤も、共に事實上、完成生産物の一部と見做すべきである』(前揭ラムセー著『富の分配に關する一論文』エヂンバラ、一八三六年刊、第一四二頁)。貨銀の形で勞働者の手に歸する生産物の分け前』(ジェームス・ミル著『經濟學要論』パリソー佛譯本、巴里、一八二三年刊、第三四頁)。

されば可變資本は、勞働者が其自己保存及び再生產に要する、而して社會的生產の有らゆる制度に於て常にみづから生產し再生產せねばならぬ、生活資料の基金換言すれば勞働基金の、特殊の一歷史的現象形態に過ぎぬものである。勞働基金が絕えず自己勞働の支拂要具の形で勞働者の手に流れ込んで來るのは、彼自身の生產物が絕えず資本の形で彼れから遠ざかるからに外ならぬ。然し勞働基金の斯る現象形態は、資本家が勞働者に前貸するものは勞働者自身の對象化した勞働であるてふ事實を、毫も變更するものではない(二)。

(二)『資本は、勞働者に貨銀を前拂すべく使用される時、勞働維持基金に對しては何物も附加しないのである』(ジョン・カゼノーヴェ編マルサス著『經濟學諸定義』倫敦、一八五三年刊、第二二頁、編者註)。

一の徭役農夫を例に取らう。彼れは、自己の田畑に於て、自己の生產機關を用ゐ、一週中例へば三ヶ日勞働する。一週中他の三ヶ日、彼れは領主の土地に於て徭役勞働をする。彼れは絕えず自己の勞働基金を再生產する。そして此基金は彼れに對し決して、第三者が彼れの勞働の代として前貸する所の支拂要具たる形態を受けないのである。其代り又、彼れの不拂强制勞働は決して、自發的にして其代を支拂はるゝ勞働の形態を受くることはない。若し明日にも領主が、田畑や、輓獸や、種子や、約言すれば此徭役農夫の生產機關を、自から占有するとすれば、後者は其時以後自己の勞働力を徭役主に販賣せねばならぬ。他の事情に變化なき限り、彼れは依然として一週中六ヶ日、卽ち三ヶ日は自分自身の爲、三ヶ日は今や一箇の貨銀主と化せる前の徭役主の爲めに勞働するであらう。彼れは從前通り生產機關を

生産機關として消費し、其價値を生産物に移轉するであらう。從前通り、生産物の一定部分は再生産に入るであらう。けれども徭役勞働が賃銀勞働の形を取る如く、徭役農夫が從前通り生産し再生産する勞働基金は徭役主が彼れに前貸する一資本の形を取る。ブルヂョア經濟學者は頭腦狹隘にして、現象形態をば其れに依て顯現する事物から區分することが出來ず、そして今日に於てさへ尙勞働基金は只例外的にのみ資本の形を以て地球上に現はるゝに過ぎぬてふ事實の前に目を閉ぢてゐる(四)。

(四)『勞銀は、地球上の勞働者中四分の一以下の場合に於てのみ、資本家に依つて前貸されてゐるに過ぎぬ』(5)(リチァード・ジョーンズ著『諸國民の經濟に就ての講義教科書』ハートフォード・一八五二年刊、第一六頁)(6)。

勿論、可變資本は、我々が資本制生産行程を其更新の絶え間なき流動てふ點から觀察する時始めて、資本家自身の基金から前貸さるゝ一價値てふ意義を喪失するものである(四a)。が、それにしても、此行程は何處か又何時かに開始されねばならぬ。故に我々の之れ迄の立場からすれば、資本家が過去の何時かに、他人の不拂勞働より獨立せる何等かの、本來的蓄積に依つて貨幣所有者となり、斯くして勞働力の購買者として市場に入るを得たてふとは、さもあるべき事柄のやうに見える。其は兎もかく、資本制生産行程の單なる連續、換言すれば單純なる再生産は尙、單に可變の資本部分のみでなく總資本にも影響する所の他の特殊變化を招致する。

(四a)『工業者(換言すれば工業勞働者)は、雇主から其賃銀を前貸されるものであるが彼れは事實上雇主に對して何等の費用をも負擔せしめない。なぜならば、此賃銀の價値は一般に一の利潤と共に、彼れの勞働を附與すべき對象の、增大せる價値中に貯へられてゐるから』(前揭アダム・スミス著『諸國民の富』第二部、第三章、第三一一頁)。

一千磅てふ一資本を以て、周期的に、例へば年々、造り出される餘剩價値は二百磅に當るとし、そして此餘剩價値が年々消費さるゝものとすれば、此同じ行程を五ヶ年反覆したる後、消費せる餘剩價値は5×200磅、卽ち一千磅てふ最初前貸せる資本價値に等しい。年々の餘剩價値が只一部だけ、例へば半分だけ消費されるとすれば此生産行程を十ヶ年反覆したる後、右と同じ結果が生ずる。なぜならば10×100磅＝1000磅であるから。概括して言ふと、前貸資本價値を年々消費する餘剩價値で割ると、其經過後最初に前貸せる資本が資本家に依つて消費し盡され隨つて

消滅してしまふ年數、即ち再生產期間數が得られる。

資本家は、自己が他人の不拂勞働の產物即ち餘剩價値を消費して最初の資本價値を保存すると考へる。然し彼れの考ふる所は、寸毫も事實を變更し得るものでない。一定年數の經過後、彼れの占有してゐる資本價値は同年數の間等價なしに彼れの占有せる餘剩價値額に等しく、而して彼れの消費せる價値額は最初の資本價値に等しいのである。

勿論彼れは、其大小を變更せざりし、而して其一部なる建物、機械等は彼れが自己の業務を開始する際すでに存在せる、一資本を保持してゐることは事實である。けれども玆で問題なのは、資本の價値であつて、資本の物質的成分ではない。或人が其財產の價値に等しい債務を負ふことに依つて此全財產を消盡してしまふ時、此全財產は正に彼れの債務の總額を代表するものに外ならぬ。同樣に、資本家が其前貸資本の等價を消費し盡した時、此資本の價値は彼れが無償で占有した餘剩價値の總額を代表するものに外ならぬ。彼れの舊資本價値の一原子も存續しないのである。

されば蓄積は總て問はず、生產行程の單なる繼續、換言すれば單純なる再生產だけでも、或は短期間或は長期間後、各資本をば必然的に、蓄積せる資本又は資本化せる餘剩價値に轉化する。各資本は生產行程に入る際には其使用者のみづから勞働の體化——貨幣形態に於けると、其他の形態に於けるとを問はず——となる。

我々は第四章に於て、貨幣を資本化するには、商品生產及び商品流通のみでは充分でなく、先づ、一方には價値又は貨幣の所有者、他方には價値創造實體の所有者、換言すれば、一方には生產機關及び生活資料の所有者、他方には勞働力以外には何物も所有せざる者が、購買者及び販賣者として相互に對立し來たらねばならぬことを見た。かくて勞働生產物と勞働その者、換言すれば客觀的なる勞働條件と主觀的なる勞働力との分離は、資本制生產行程の事實上與へられたる基礎、即ち資本制生產行程の出發點であつた。

然るに最初は出發點に過ぎなかつたものが、後には、生產行程の單なる繼續、即ち單純なる再生產に依り、資本制生產の特殊の結果として絕えず新たに生產され、そ

して永久不滅のものとされる。一方に於て、生産行程は絶えず、物質的の富を資本家の爲の價値增殖要具並に勞働要具に轉化する。他方に於て、勞働者は絶えず、生産行程に入つた儘の姿で、卽ち富の人的源泉ではあるが然し此富を自己の爲に實現する一切の手段を剝奪された者として、生産行程から出て來る。彼れの勞働は、彼れが生産行程に入るに先だち、彼れ自身から引離して資本家に占有され、そして資本に併合されてある故に、此行程中にも絶えず他人の所有する生産物に於て對象化される。生産行程は同時に、資本家に依る勞働力の消費行程であるから、勞働者の生産物は絶えず商品に轉化するのみでなく、また資本に、卽ち價値創造力を吸ひ盡くす價値、人を購買する生活資料、生産者を使用する生産機關に轉化する(五)。されば勞働者自身は絶えず、客觀的富を資本卽ち彼れの外にあつて彼れを支配し搾取する力として生産し、資本家は又絶えず、勞働力を其の對象化並に實現の要具より引離された主觀的富源、勞働者の單なる現身中に存する抽象的富源として、約言すれば勞働者を賃銀勞働者として生産する(六)。斯くの如き、勞働者の絶え間なき再生產、卽ち勞働者の永久化は、資本制生產の存在條件である。

(五)『之れは生產的消費の顯著なる一特性である。生產的に消費される物は總て資本である。それは消費に依つて資本となるのである』(前揭ジェームス・ミル著『經濟學要綱』第二四二頁)。然しジェームス・ミルは此『顯著なる特性』を追究しなかつた。

(六)『實際、新たに開始された一工業が多くの貧民を使用するは確かな事實である。然し彼等は貧民たることを止めるものではない。そして此の工業の繼續は、更に多くの貧民を造るのである』(匿名者著『羊毛輸出制限の諸理由』倫敦、一六七七年刊、第一九頁)。『小作農業者は今や全く不條理に、自己が貧民を維持してやるのだと主張する。貧民は事實上窮乏狀態に維持されるのではない。そして此の工業の繼續は、更に多くの諸理由、又は勞働及び食糧品價格の比較觀察』倫敦、一七七七年刊、第三七頁)。

勞働者の消費は二樣のものである。生產機關を消費して、之を前貸資本の價値よりも高い價値の生產物に轉化する。之れは彼れの生產的消費である。此消費は同時に、彼れの勞働力を購買したる資本家に依る、其勞働力の消費である。他方に於て勞働者は、其勞働の代として支拂はれた貨幣を、生活資料の爲に使用する。之れは彼れの個人的消費である。故に、勞働者の生產的消費と個人的消費とは全く異なるものである。生產的消費に於ては、彼れは資本の動力として行動し資本に所屬する。個人的消費に在つては、彼

れは自分自身に所屬し、生産行程の外部に於ける生命機能を營む。前者の結果は資本家の生活であり、後者の結果は勞働者自身の生活である。

勞働日（第八章）、並に機械及び大工業（第十三章）を考察する際、我々は偶々、勞働者が其の個人的消費をば、生産行程の單なる一偶發事件たらしむるを餘儀なくされる場合が屢々あるを見た。此場合には彼れは其の勞働力を運轉狀態に維持すべく自己に生活資料を供給することになる。之れは丁度、蒸氣機關に石炭や水を供給し、車輪に油を供給するのと同じである。斯る場合には、彼れの消費資料は一生産機關の要する消費資料に外ならぬ。彼れの個人的消費は直接、生産的消費である。然し之は、資本制生産行程の本質的ならざる一濫用と見られる(七)。

(七) ロッシにして若し實際、『生産的消費』の祕密を看破したならば、彼れは爾かく力をこめて此點に反對しなかつたであらう。

「我々が、個々の資本家及び個々の勞働者ではなく資本家階級及び勞働者階級を觀察し、商品の個々生産行程でなく流動並に社會的規模に於ける資本制生産行程を觀察するや否や、問題は別箇の趣きを呈して來る。」

資本家は其資本の一部を勞働力に變へる時、それに依つて其總資本の價値を增殖する。彼れは一舉兩得する。彼れは單に、其勞働者より受くる物に依つて利するのみでなく、また其勞働者に與ふる物に依つても利するのである。

勞働力との交換に依つて讓渡された資本は、生活資料――其消費が、既存勞働者の筋肉、神經、骨、腦髓等を再生産し、又新たなる勞働者を造り出すに役立つ所の――に轉化される。故に勞働者階級の個人的消費てふことは、絕對的必要の限界内に於ては、勞働力の代價として資本の讓渡した生活資料が、資本に依つて新たに搾取され得る勞働力に轉化するとてある。資本家に取つて此上なく必要不可缺な生産機關である勞働力その者を、生産し再生産することである。「故に」勞働者の個人的消費は、それが作業場、工場等の内部に行はれると外部に行はれると、換言すれば勞働行程の内部に行はれると外部に行はれると、を問はず、資本の生産及び再生産の一要素たるを失はない。之れ恰も、機械の掃除が、勞働行程中になされると勞働行程の一定の休止中になされるとを問はず、資本の生産及び再生産の一要素たるを失はざるが如くてある。」

勞働者は其個人的消費を自分自身の爲に行ふのてはなくて資本家の爲に行ふのてあると云ふ事は、問題の上に何等影響する所がない。其れは、駄獸が其食ふ物をみづから享樂するからと云ふて駄獸の消費が生産行程の必要なる一要素たるを減ずるものてないのと同じてある。勞働者階級の不斷の維持及び再生産は、資本の再生産に對する不斷の條件たるを失はない。資本家は此條件の成就をば、安んじてゐることが出來る。彼れは只、勞働者の個人的消費を出來得る限り必要程度に制限するの勞を取るだけてある。彼れはかの、勞働者をして、より實質的ならざる食物の代りに、より實質的なる食物を攝取せしむる、南米的蠻行を距ること雲泥なのてある(八)。

(八)『南米諸鑛山の勞働者等——其日々の仕事（恐らく世界中最も苛重なる）は、目方百八十乃至二百斤に及ぶ一荷の生鑛をば、四百五十呎の地下から地上へ背負ひ揚ぐることに存してゐる——は、單にパンと長豆とのみを食べて生きてゐる。彼等はパンのみを食用したいのであらうが、パンを以てしては其う酷く勞働し得ないことを發見した彼等の雇主は、彼等を爲同樣に取扱ひ强いて長豆を食はせるのである。が、長豆はパンに比べて遙かに骨土に富んでゐるのだ』（前揭リービヒ著『農業及生理に應用したる化學』第七版、一八六二年刊、第一部、第一九四頁、註）。

故に又、資本家並に其思想的代辯者たる經濟學者は、勞働者の個人的消費中たゞ勞働者階級を不滅ならしむるに要する、隨つて資本が勞働力を消費するに就て事實上なされねばならぬ部分のみを生產的のものと見る。それ以上、勞働者が自己の樂しみの爲に消費するなるべき分は、不生產的のものと見る(九)。資本の蓄積が資本に依る勞働力消費の增加を伴はずして、勞銀の昂騰隨つて又勞働者の消費資料の增大を招致するとすれば、其の追加資本は不生產的に消費されることになるであらう(十)。實際の所、勞働者の個人的消費は窮乏せる個人を再生產するに外ならぬものであるから、勞働者自身に取つては不生產的てある。それは他人の富を造る力を生產するものてあるから、資本家及び國家に取つては生產的てある(十一)。

(九)前揭ジェームス・ミル著『經濟學要論』パリソー佛譯西譯、巴里一八二三年刊、第二三八頁以下。

(十)『勞働の價格が昂騰して、資本を增大するも最早より以上の勞働を使用し得ざるに至る時、予は斯る資本增大は不生產的に消費されるものと言ふてあらう』（前揭リカルド著『經濟學原論』第三版、倫敦、一八二一年刊、第一六三頁、註）。

(十一)『嚴密の意義に於ける唯一の生産的消費は、資本家が再生産の目的を以てする、富の消費又は破壞(彼れは生産機關の消費のことを云つてゐるのだ)これである。……勞働者は……自己の使用主並に國家に取つては一の生産的消費者であるが、嚴密に言つて、自分自身に取つては其うではない』(マルサス著『經濟學上の諸定義』倫敦、一八五三年刊、第三〇頁)。

故に社會的立場よりすれば、勞働者階級は、直接の勞働行程の外部に於ても亦、死んだ勞働器具と同樣資本の附屬物である。其の個人的消費でさへも、一定限界內に於ては資本の再生産行程の一要素たるにすぎぬ。が、此行程は、之等意識的生産器具をば其生産物を絶えず彼等の極から資本の對極に遠ざくることに依つて、逃げ去らぬやうに處理する。個人的消費は一方に於て彼等自身の保存及び再生産を處理し、他方に於ては生活資料を破壞することに依つて、勞働市場に於ける彼等の絶え間なき再出現を處理する。羅馬の奴隷は、鎖を以て其の所有者に繫れてゐた。賃銀勞働者は見えざる絲を以て其所有者に繫れてゐる。彼れの獨立の外觀は、個々雇主の不斷の變替と契約の擬制とに依つて保持されるのである。

資本は以前には、必要と見た場合、强制法律に依つて自由勞働者に對する其所有を主張した。斯くて例へば、英吉利に於ては、機械製造工の國外移住は一八一五年に至るまで重刑の下に禁止されてゐた。

勞働者階級の再生産は同時に又、一の代から他の代への熟練の傳承及蓄積を含む(十二)。資本家が斯る熟練勞働者階級の存在をば如何に自己所屬の生産條件中に算入し、如何に其れを事實上自己の可變資本の實存在と見るかは、恐慌が此階級の喪失を危惧せしむる時忽ち明かとなる。亞米利加南北戰爭及び其れに伴へる棉花窮乏の結果、ランカシーア州其他に於る木綿工の多數が解傭さるゝに至つたことは周知の事實である。他の社會部層と並んで勞働者階級自體の間からも、『過剩者』の英國諸植民地又は合衆國への移住を可能ならしむべく、國家的補助或は國民の任意寄附を求むる聲が揚つた。當時、『タイムス』紙(一八六三年三月二十四日)は、元マンチェスター商業會議所長エドマンド・ポッターの一書翰を公にした。此書翰は下院に於て、當然に『工場主等の宣言』と呼ばれた(十三)ものである。左に、勞働力に對する資本の所有權を卒直に表示せる若干の特徴的文言を摘錄する。

(十二)『貯藏され豫め生産されてゐると稱し得る唯一の物は、勞働者の熟練これである。

……かの熟練勞働の蓄積貯藏てふ、最重要作業は、勞働者の多數に就ては何等の資本なくして全うされるのである』（トマス・ホヂスキン著『勞働擁護』第一三頁）(9)。

（十三）『此書論は工場主等の宣言と見做し得るものである』（一八六三年四月二十七日の下院に於けるフェランドの『棉花窮乏に關する動議』）(10)。

『彼れ（失業者）は知らねばならぬ、木綿工の供給過大にして……恐らく三分の一は事實上滅ぜられねばならず、斯くして始めて殘餘の三分の二に對し健全なる需要生じ來るべきことを。……輿論は國外移住を主張してゐる。……雇主（卽ち木綿工場主）は、其勞働供給の除かるゝを默過するとは出來ぬ。彼れは考へるかも知れぬ、其れは不正にして不健全なことであると。そして斯く考へるは、恐らく當然なことであらう。……若し國外移住が公債に依つて支持せらるべきであるとすれば、雇主は傾聽を要求し又恐らく抗議するの權利を有してゐる。』此同じポッターは其れから更に『木綿工業は如何に有用なものであるか、如何に『此工業は疑ひもなく、愛蘭及農業諸地方から過剩人口を吸引したか』、其範圍は如何に巨大であるか、此工業は如何に一八六〇年英國輸出總額の十三分の五を供給したか、其れは數年後には如何に、市場殊に印度市場の擴張に依り、又一斤宛六片てふ相場で棉花を充分供給せしむることに依つて再擴大するに至るべきか等を說明してゐる。

彼れは更に續けて言ふ。――『若干期間――多分一、二又は三ヶ年――中に、必要なる分量は生產されるであらう。……其時、予の提出するなるべき問題は是れである。曰く、此工業は維持に値するか？　此機械（卽ち生きた勞働機械）を整頓し置くは、骨折甲斐あることであるか？　其放棄を考へるは最大迂愚にあらざるか？　予は左樣に信ずる。予は認める、勞働者は所有物――ランカシーア州や雇主等の所有物にあらざることを。彼れは其雙方の强みである。彼れは一代の間、代置し得ざる靈性的にして且つ訓練を受けた力である。反對に、彼れが依つて勞働する他の單なる機械は、大抵十二ヶ月に於て有利に代置、否、改善し得る所の者である（十四）。勞働力の國外移住を奬勵又は許容（！）するとせば、資本家は如何になるであらうか？……勞働者の精粹を取り去つてしまへば、固定資本は著しく其價値を減ずるであらう。そして流通資本は、劣等勞働の不充分なる供　との抗爭に從はないであらう。……我々は聞かされる、勞働者自身それ（國外移住）を希望してゐると。勞働者が斯くするは極て當然なことである。……勞働力を減除し、勞働者に對する賃銀支出をば

五分の一又は五百萬磅だけ減額することに依つて、木綿工業を縮小するとせば、勞働者の直ぐ上の階級なる小賣商人は如何になるであらうか？　地代、家賃等は如何になるであらうか？　微細なる小作農業者、優良なる獨立生計者、及び……地主まで も此影響の跡を辿りゆき、而して一國の最優良工場勞　者を輸出し、其最生產的資本と富との一部の價値を破壞して以て國民を虛弱ならしむる以上に、國家の有ゆる階級に取つて自殺的なる提案存し得るや否やを語れ。……予は、木綿諸地方の救貧管理局に附屬する特別委員の監督を受け、少なくとも被救恤者の道德的標準を維持する手段として、何等かの職業又は勞働を强制する特別法律規則の取締を受くる、二ヶ年若しくば三ヶ年に渡つた五百萬乃至六百萬磅の公債を推奬する。地主又は雇主に取つて、勞働者中の最優良部分を放棄し、而して大規模なる一掃的國外移住、並に一地方全體に於ける資本及び價値の一掃に依つて、自餘の勞働者を墮落失望せしむる以上に惡しきことがあり得るだらうか？』

（十四）我々は、此同じ資本が、普通事情のもとに、勞銀低減が問題である場合には、全く其言ふ所を異にするものなるを記憶してゐる。斯る場合には『主人』等は異口同音に盲明する（第四篇、第一八八頁註、邦譯本第二三〇頁）――『工場勞働者等は、彼等の勞働が眞に低級種類の熟練勞働であり、そして如何なる勞働も之れ以上容易に達成せられ、或は其質に鑑み之れ以上充分に報酬されるものでないと云ふ、又は如何なる勞働も、最少熟練者の短時間の訓練に依つて之れ以上敏速且つ豐富に達成され得るものでないと云ふ事實を善く記憶して置かねばならぬ。……主人の機械（それは十二ヶ月にして有利に、又改良的に、代置し得るとの事である）は、之を六ヶ月の敎育に依つて達成し得、又普通者の修得し得る、職工の勞働及び熟練（其れは今では、三十ヶ年を以てするも代置し得ないのである）に比する時は、生產事務に於て眞に遙か重要の役割を演ずるものである

木綿工場主等の選拔的代辯者なるポッターは、二種の機械を區別してゐる。それは何づれも資本家のものであつて、其一は彼れの工場內に存し、他は夜間及び日曜日には工場の外、小屋の中に住まつてゐる。死んだ機械は單に日々不良化して其價値を減ずるのみでなく、其現存體中少なからぬ部分は、絕え間なき生產技術上の進步に依つて斷えず廢朽し、有利に且つ數ヶ月間に、新たなる機械を以て之れに代置し得る程である。反對に、生きた機械は、其繼續長期にして累代の熟練を自己の中に蓄積すると大なるに從ひ、益々改良

されてゆくのである。『タイムス』紙は木綿王に答へて、就中左の如く言つた。

『エドマンド・ポッター氏は木綿工場主等の異常にして至高なる重要性に深く動かされ、此階級を保存し彼等の職業を永久不滅ならしむべく、五十萬の勞働者を其意に逆つて一の大なる道德的勞役場内に閉込め置くことを望んでゐる。ポッター氏は曰く「此職業は之を維持するに値するものなるか?」と。「然り、總ての正當なる方法に依つて」と、我々は答へる。ポッター氏は再び問ふて曰く「機械を整頓し置くは骨折り甲斐あるとか?」と。此場合には我々は躊躇する。ポッター氏の謂ふ「機械」とは、人間機械のことである。なぜならば、彼れは之れを一の絕對的所有物として使用せんとするものにあらざる旨を、續いて主張してゐるからである。我我は自白せねばならぬ、我々は人間機械を整頓し置くこと、換言すれば、所要の時迄其れを閉込め塗油し置くことを、「骨折甲斐あること」、又は可能なることゝさへも考へないと。人間機械は如何に油を塗つたり磨いたりしても、活動せざる時は錆るであらう。加之、我々の今知つた如く、人間機械は勝手に蒸氣を放ち、我々の大きな町々に於て破裂し又は狂亂するであらう。ポッター氏の言ふ如く、勞働者を再生產するには若干時間を要するかも知れない。然し、機械師と資本家とが手近かにあるので、我々は常に我々の要し得るよりも多數の工場主等に卽時供給すべき、節儉、熱心、勤勉なる人々を見出し得るであらう。(一)……ポッター氏は木綿業が「一、二、又は三ケ年間に」復活すべきことを喋々し、「勞働者の國外移住を奬勵又は許容(一)」しないやうにと我々に要求してゐる。彼れは、勞働者が國外移住を望むは極めて當然のことだと言ふ。然し國民は之等五十萬の勞働者をば、其要求に逆つて其七十萬の眷屬もろとも木綿地方に閉込め置かねばならぬと、彼れは主張する。そして其必然の結果として、彼れは言ふ迄もなく斯う考へるに違ひない。——國民は暴力に依つて彼等の不滿を抑へ、施捨に依つて彼等を扶持し、以て本綿工場主等が他日彼等を要する機會を待たねばならぬと。……我國の大なる輿論が、此「勞働力」をば、恰も鐵や、石炭や、木綿などを扱ふやうにして之れを扱ふ人々の手から、救出すべく作用せねばならぬ時は、既に來てゐるのである』(十五)。

(十五)『タイムス』紙、一八六三年三月二十四日。

右の『タイムス』紙の文章は、一の頓智語に過ぎなかつた。『大なる輿論』は事實

上、工場勞働者等は工場の動產的附屬品であると云ふ、ボッター君の意見と一致するものであつた。彼等の國外移住は防止された(十六)。彼等は木綿諸地方の『道德的勞役場』に閉込められた。そして、彼等は、依然としてランカシーア州に於ける木綿工場主の『強み』を成してゐるのである。

(十六)議會は國外移住の爲に鰥一文も可決せず、たゞ勞働者を生死の境に繫ぎ置くの、換言すれば標準賃銀を支拂はずして之を搾取するの權能を、自治町村に賦與せる法律を通過したに止るのである。反對に、それから三年後牛疫が流行し始めた時、議會は亂暴にも其慣例を破つて、瞬くひまに百萬長者なる地主等——其の小作農業者等は、さらでだに肉價の昂騰に依つて損害を免れたのであつた——の損害を賠償すべく數百萬金を可決した。一八六六年の議會開始當時に於ける地主等の牛吼は、我々はサバラ牛神たるべく印度敎徒たるを要せず、また一の牛に化すべくジュピター神たるを要せざるものなることを證明した。

資本制生產行程は斯くの如く、それ自身の進行に依つて、勞働力と勞働條件との分離を再生產する。それに依つて資本制生產行程は、勞働者の搾取條件を再生產し不滅のものたらしめる。それは絕えず、勞働者をして生活すべく强いて其の勞働力を販賣せしめ、資本家をして絕えず、自己を富ますべく此勞働力を購買するを得せしめる(十七)。資本家と勞働者とが購買者及び販賣者として商品市場に相互對立するは、もはや偶然事ではない。一方を其勞働力の販賣者として絕えず商品市場に投げ返し、そして彼れの生產物を絕えず他方の使用する購買要具に轉化するものは、生產行程その者の上下戲板である。事實上、勞働者は自己を資本家に販賣する前に、資本のものとなつてゐるのである。彼れの經濟的役奴性(十八)は、其自己販賣の周期的更新、其個々賃銀主の變替、並に勞働の市場價格の動搖等に依つて媒介され又同時に隱蔽される(十九)。

(十七)『勞働者は生活し得る爲に生活資料を要求し、企業者は利潤を造り得る爲に勞働を要求した』(前揭シスモンヂ著『經濟學新原理』第一卷、第九一頁)。

(十八)此役奴性の農民的に不細工なる一形態は、デゥラーム州に存してゐる。此州は、四圍の事情上、小作農業者が日傭農業勞働者等に對する明確なる所有權を確保し得ざる僅少州の一である。鑛山地方は之等の勞働者に、一の選擇を許すからである。されば小作農業者は、此州に在つては慣例に反して、勞働者用の小屋の存する所に於てのみ借地する。小屋の賃借料は勞働の一部たるのである。之等の小屋は『僕舍』(13)と呼ばれる。其れは、一定の封建的義務の下に、『奴役』(14)と稱し、例へば勞働者が恣に使用されてゐ

る期間、代つて其娘などに勞役せしむる義務を負はせる所の、一契約を以て、勞働者等に貸貸されるのである。勞働者自身は『役奴』(一)と呼ばれる。此關係は又左の如き全く新たなる一方面から、勞働者の個人的消費が如何に資本の爲の消費、換言すれば生産的消費となるかを示す。――『農僕や役奴の糞尿でさへも、彼等の主人なる打算的な小作農業者の餘祿であるてふ事實を觀察するは、珍奇なことである。……そして彼れ小作農業者は附近を通じて自用のもの以外には毫も便所を設くるを許さず、其領主權の一部を失はんよりは、寧ろ庭園の彼處此處に一塊の肥料を施すことを欲するであらう』(『公衆健康』第七報告、一八六四年、第一八八頁)。

(十九)兒童その他の勞働に於ては、自己販賣の形式でさへも消滅するものなることを我我は記憶してゐる。

されば資本制生産行程は、之れを聯絡的に、換言すれば再生産行程として觀察する時は、單に商品を生産し餘剩價値を生産するのみでなく、又資本關係その者、卽ち一方には資本家、他方には賃銀勞働者を生産並に再生産するものである(二十)。

(二十)資本は賃銀勞働者を、賃銀勞働者は資本を前提する。此兩者は交互に條件となり交互に出現せしめ合ふものである。木綿工場に於ける一勞働者、彼れはたゞ木綿品のみを生産するに止まるか？　否、彼れは資本を生産する。彼れは、其勞働を支配し而して之に依つて、新價値を創造することに新たに役立つ所の價値を生産する』(拙著『賃銀勞働と資本』新ライン新聞、第二六六號、一八四九年四月七日)(二一)。右の表題の下に『新ライン新聞』紙上に公にされた一文は、予が同じ題目に就き一八四七年ブリュッセル市の獨逸勞働者協會に於て試みたる講演――其刊行は二月革命の爲に中絶した所の――の斷片である。

第二十二章　餘剩價値の資本化

（一）擴大したる規模に於ける資本制生産行程。商品生産の所有權法則の、資本制占有法則への轉化。

曩には、餘剩價値が如何にして資本より生ずるかを考察せねばならなかつた。今や我々は、資本が如何にして餘剩價値より生ずるかを考察せねばならぬ。餘剩價値を資本として使用すること、換言すれば餘剩價値の、資本への再轉化は、資本の蓄積(1)と呼ばれる(二十一)。

(二十一)『資本の蓄積、卽ち收入の一部を資本として使用すること』（マルサス著『經濟學上の諸定義』ジョン・カ　ノーヴェ版、第一一頁）。『收入の資本化』（マルサス著『經濟學原論』第二版、倫敦一八三六年刊、第三一九頁）(2)。

先づ此行程を、個々資本家の立場から觀察しやう。例へば一紡績業者が、一萬磅てふ一資本を前貸し、其中五分の四を棉花、機械等に、殘りの五分の一を勞銀に放下したとせよ。彼れは年々一萬二千磅の價値ある二十四萬斤の綿絲を生產すると せよ。餘剩價値率を一〇〇パーセントとすれば、餘剩價値は綿絲四萬斤てふ餘剩

生產物換言すれば純生產物、卽ち總生產物の六分の一——其價値は二千磅であつて、之れは販賣に依り實現される——中に存してゐる。二千磅てふ價値額は二千磅てふ價値額である。此貨幣を嗅いでも眺めても、それが餘剩價値であることは分らぬ。一の價値の餘剩價値としての性質は、その價値が如何にして其所有者の手中に來たりしかを示す。けれども其れは、價値又は貨幣の性質の上には、何等の變化を與ふるものではないのである。

故に新たに追加された此二千磅てふ金額を資本に轉化するには、紡績業者は、他の一切事情に變化なき限り、其五分の四を棉花などの購入に、五分の一を新たなる紡績工等——紡績業者から其價値を前貸された生活資料を、市場に於て見出す所の——の購入に前貸するであらう。斯くて、二千磅てふ此の新資本は紡績所に於て作用し、之れも亦四百磅てふ一の餘剩價値を齎らす。

資本價値は本來、貨幣形態に於て前貸されたものである。反對に、餘剩價値は最初より、總生產物の一定部分の價値として存在してゐる。此の總生產物が販賣され、卽ち貨幣に轉化されると、資本價値はまた其本來の形態を獲得する。が、餘剩價

値は、其本來の存在樣式を變更する。されど此瞬間以後に於ては、資本價値も餘剩價値も共に貨幣額であつて、其資本への再轉化は、全く同じ樣式で行はれる。資本家は何づれをも、新たに其物品の製造を、而も今度は擴大したる規模に於て、開始するを得せしむる商品の購買に支出する。然し商品を購買するには、彼れは其れを市場に於て見出さねばならぬ。

彼れ自身の綿絲が流通するは、他の總ての資本家が其商品に就て同樣に爲す如く、彼れが其年生產物を市場に齎らすからに外ならぬ。然し之等の商品は市場に來たる以前すでに、年々の生產基金、換言すれば個々資本の總額卽ち社會的總資本が一年中に轉化して行く、そして各個の資本家は其可除部分だけを保有するに過ぎぬ所の、有らゆる種類の對象物の總量中に存してゐたのである。市場の諸行程は單に年生產の個々成分の轉換を全うするに、卽ち其れを甲の手から乙の手に移し換へるに過ぎぬものであつて、年生產の總額を增大することも、又生產された對象物の性質を變更することも出來ぬのである。故に年々の總生產物に就て如何なる使用がなされ得るかは、此總生產物自身の組成に懸るのであつて、決して流通に

懸るものではない。

先づ年生產は、一年中に使用し盡された資本の物的成分が依つて其中から代置せらるべき、一切の對象物（使用價値）を供給せねばならぬ。餘剩價値は其中に存するものである。また後に、純生產物卽ち餘剩生產物が殘る。此物的成分を控除した後に、純生產物は、何から成るか？思ふに、資本家階級の欲望並に願望の充足用所で此餘剩生產物は、何から成るか？若し其に定められた、隨つて資本家階級の消費基金に入る諸物からであらうか？れが一切であるとすれば、餘剩價値は飮み乾され、單純なる再生產が行はれるだけであらう。

蓄積をなすには、餘剩生產物の一部を資本に轉化せねばならぬ。然し奇蹟に依らぬ限り、我々は單に、勞働行程に於て使用し得る如き物、換言すれば生產機關と、更に勞働者等が依つて生存し得る物、換言すれば生活資料とのみを資本に轉化し得るに過ぎぬ。隨つて年餘剩勞働の一部は、前貸資本を償ふに要した分量を超過せる、追加生產機關並に生活資料の生產に使用されてあらねばならぬ。一言以て之を蔽へば、餘剩價値は、其れを體現せる餘剩生產物が旣に新たなる一資本の物的成

分を含むが故にのみ、資本に轉化し得るのである(二十一a)。

(二十一a)拔では輸出貿易——一國民が依つて贅澤品を生產機關なり生活資料なりに、又生產機關なり生活資料なりを贅澤品に轉換することが出來る所の——からは抽象する。研究の對象を純粹に卽ち諸々の攪亂的附帶事情から獨立して解する爲に、我々は拔では貿易界總體をば一個の國民と見做し、而して資本制生產が到る處確立して有らゆる產業を征服せるものと前提せねばならぬ。

所で此成分をば事實上資本として作用せしむる爲には、資本家階級は一の勞働追加を要する。既に使用せる勞働者の搾取が時間的にも能率的にも增進せざる場合には、追加勞働力を雇入れねばならぬ。之れに就いても、資本制生產の機構は同樣に、勞働者階級をば勞銀に依屬せる階級——其通常の貨銀は、單に自己の保存のみではなく又自己の增殖をも確保するに充分である所の——として再生產することに依つて、豫め備へてゐるのである。勞働者階級に依り種々なる年齡の形で年々供給される此追加勞働力をば、資本はたゞ年生產中に既に含まれてゐる追加生產機關に合體せしめさへすれば宜い。それで餘剩價値の資本化は全うされるのである。具體的に觀察すれば、蓄積とは畢竟、累進的規模に於ける資本の再生產てふことに歸著する。單純なる再生產の循環運動は一變して、——シスモンヂの言葉に從へば——一の螺旋形運動と化するのである(二十一b)。

(二十一b)シスモンヂの試みたる蓄積の分解は、彼れが『收入の資本化』てふ言葉に滿足し過ぎて、此作用の物質的條件を究明しなかつたと云ふ大過誤を含んでゐる。

扨て上例に立ち戻らう。それは舊物語である。曰く、アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生んだ、云々。一萬磅てふ原資本は、二千磅てふ一の餘剩價値を齎らし、之れは資本に轉化される。此の二千磅てふ新資本は、四百磅てふ一の餘剩價値を齎らす。そして之はまた資本化し、卽ち第二の追加資本に轉化されて、八十磅てふ一の新餘剩價値を齎らす。以下之れに準ず。

我々は茲では、餘剩價値のうち資本家の消費する部分は之れを問題外に置く。同樣に、追加資本が原資本に結合されるか、それとも原資本から分離されて獨立に作用するか、追加資本を蓄積した其同じ資本家が之を利用するか、それとも他に移轉するか、それも今の處我々に關係のない問題である。たゞ我々は、新たに形成された資本と並んで、原資本は尙引つゞき自己を再生產し餘剩價値を生產するもの

なること、及び此事は總ての蓄積せられたる資本並に其れより生ずる追加資本に就いても當嵌るものなることだけは忘れてはならぬ。

原資本は、一萬磅を前貸することに依つて形成された。其所有者は如何にして其れを得たか？彼れ自身の勞働並に其先祖の勞働に依つて、と經濟學の代辯者等は異口同音に答へる（二十一c）。そして彼等の假定は實際上、商品生產の法則に一致する唯一の假定であるやうに見える。

（二十一c）『彼れの資本が發生するを得たのは、最初の勞働のお陰である』（前揭シスモンヂ著『經濟學新原理』巴里版、第一卷、第一〇九頁）。

二千磅てふ追加資本に在つては、全く趣きを異にしてゐる。我々は其發生行程を全く正確に知つてゐる。此資本は資本化したる餘剩價値である。其れは最初より、他人の不拂勞働に基因せざる一點の價値原子をも含まぬ。追加勞働力が合體させられる生產機關、並に此勞働力が依つて自己を保存する生活資料は、餘剩生產物即ち資本家階級が年々勞働者階級から强取する貢稅の、組成部分に外ならぬものである。資本家階級は此貢稅の一部を以て、勞働者階級から追加勞働力を、而も等價が等價と交換されるやうに充分な價格で、購買するとは云へ、それは依然として被征服者から奪ひ取つた貨幣を以て其同じ被征服者から商品を買取る征服者の、昔ながらの遣り口である。

追加資本が其れ自身の生產者を使用する場合には、此生產者は先づ引續き原資本の價値を增殖し、加ふるに自己の過去勞働の產物をば、其れに要したるよりも多大の勞働を以て買ひ戻さねばならぬ。資本家階級と勞働者階級との間の取引として見れば、前に使用された勞働者の不拂勞働を以て追加勞働者が使用される場合と雖も、問題の上に何等の變化を與ふるものでない。資本家は又追加資本をば、此の追加資本の生產者を驅逐し若干の兒童を以て之れに代ふる一機械に轉化することも出來る。何づれの場合に於ても、勞働者階級は其今年の餘剩勞働を以て、明年追加勞働を使用するなるべき資本を創造したのである（二十二）。之れ資本に依つて資本を造り出すと稱せらるゝ所のものである。

（二十二）『資本が勞働を使用する以前に、勞働は資本を創造する』（エドワード・ギボン・ウェーキフィールド著『英吉利及亞米利加』倫敦、一八三三年刊、第二卷、第一一〇頁）。

二千磅てふ第一の追加資本の蓄積の前提を成すものは、資本家の前貸せる、資本家の『本來的勞働』に依つて其所有となれる、一萬磅てふ價値額であつた。反對に、四百磅てふ第二の追加資本の前提は、自己の資本化したる餘剩價値が卽ち此四百磅である所の二千磅てふ第一追加資本の先行蓄積に外ならぬものである。過去の不拂勞働の所有は今や、絕えず擴大する範圍に於ける、生きた不拂勞働の現在占有に對する唯一の條件として現はれる。資本家は過去に於ける蓄積大なるに從つて、益々多く蓄積し得るのである。

第一追加資本の依つて成る餘剩價値が、原資本の一部を以てする勞働力購入の結果である限り、卽ち商品交換の法則に一致せる購買、——之を法律的に觀る時は、勞働者側に於ては自己の能力に對する自由處分、貨幣又は商品所有者側に於ては其所有價値に對する自由處分以上には何物をも前提せざる——の結果である限り、第二追加資本以下は、第一追加資本の結果、隨つて右の第一關係の歸結に過ぎぬものである限り、各個の取引は絕えず商品交換の法則に一致するものであつて資本家は常に勞働力を購買し、勞働者は常に勞働力を販賣する——而も此賣買は勞働力の價値通りに行はれると假定して——限り、商品生產並に商品流通に基く占有又は私有の法則は明かに、其れ自身の內的にして不可避的なる辯證法に依つて、其正反對のものに轉換するのである。本來の作用として現はれた等價と等價との交換は轉換して、今やたゞ外觀上の交換存するのみである。蓋し第一に、勞働力と交換された資本部分その者は等價なしに占有された他人の勞働生產物の一部に過ぎず、第二に、此資本部分は、其の生產者なる勞働者に依つて單に償はれねばならぬのみでなく、新たなる餘剩を以て償はれねばならぬからである。斯くて、資本家と勞働者との間の交換の關係は、流通行程所屬の一外觀、卽ち內容その者には無關係であり內容を曖昧ならしむに止まる所の、單なる形式に過ぎぬものとなる。勞働力の不斷の賣買は形式である。資本家が、其の等價を與へずして絕えず占有する所の既に對象化した他人勞働の一部をば、常に再びより多量なる生きた他人勞働と交換すると云ふことが、內容なのである。元來、所有權は自己勞働に基くものとして我々の目に映じた。少なくとも、斯る假定は許されねばならなかつた。なぜならば、單に同權の商品所有者が對立するに過ぎず、他人の商品を占有する手

段は自己商品の讓渡に盡き、而して此の自己商品はたゞ勞働に依つて產出し得るに止まるからである。所有は今や、資本家側に於ては、他人の不拂勞働又は其生產物を占有する權利として、勞働者側に於ては、自己の生產物を占有することの不可能として現はれる。所有と勞働との分離は、外見上その雙方の一致に由來せる一法則の必然的歸結となる(二十三)。

(二十三)他人の勞働生產物に對する資本家の所有は、『占有法則の嚴密なる歸結である。所が此法則の根本原理は、反對に、自己勞働の生產物に對する各勞働者の絕對的所有權てふこと、是れであつた』(アントアヌ・エリゼエ・シェルビュリエ著『富か貧か』巴里、一八四一年刊、第五八頁)。但し此所では、右の辯證法的轉換は正確には說明されて居らぬ。

斯くの如く、資本制占有方法は如何に商品生產の本來の法則を否定するやうに見えても、其れは決して此法則の蹂躙から生ずるものではなく、反對に此法則の適用から生ずるものである。我々は、資本制蓄積を其終點とする運動諸段階の連系を簡單に溯ることに依つて、今一度この點を明瞭ならしめやう。

先づ我々は、一價値額の本來の資本化が、全く交換の法則に從つて行はれたるものなることを見た。契約當事者の一方は其勞働力を販賣し、他方は其れを購買する。前者は其商品の價値を受領し、此商品の使用價値即ち勞働は是れと共に後者に讓渡される。然る後に後者は、既に其所有に屬する勞働の助力を以て、新たなる一生產物に轉化する。此生產物は、同樣に其所有に屬するものである。

此生產物の價値は先づ、消費せられたる生產機關の價値を含む。有用勞働は此生產機關をば、其價値を新生產物に移轉せずしては消費することは出來ぬ。然しながら勞働力は販賣可能なる爲には其使用せらるべき產業に於て、有用勞働を供給し得るものでなくてはならぬ。

新たなる生產物の價値は更に、勞働力價値の等價と一の餘剩價値とを含む。其れは實に、一定の時間、卽ち一日一週などの間販賣せられたる勞働力の有する價値が、此期間に於ける其使用に依つて創造される價値よりも小さいと云ふ理由に依るのである。然し勞働者は總ての賣買に於て行はるゝ如く、其勞働力の交換價値の支拂を受け、それと共に其使用價値を讓渡したのである。

此の特殊の商品勞働力が、勞働を供給し隨つて價値を創造するてふ特殊の使用

價値を有すると云ふ事情は、商品生産の普遍的法則に牴觸し得るものではない。故に、勞銀に於て前貸された價値額が、生産物中に單に再現するのみではなく、一の餘剩價値を增殖して現はれると云ふことは、販賣者に對する欺瞞に基くものではなくて——販賣者は確かに其商品の價値を受けるのである——、たゞ購買者に依る此商品の消費にのみ基くのである。

交換の法則は、互ひに交付され合ふ諸商品の交換價値に對してのみ平等を要求するに止まる。加之、其れは初めより、之等諸商品の使用價値の差異を要求し、而して其消費とは絕對に沒交涉のものである。蓋し此消費は、取引の締結及び終了後初めて開始されるものである。

されば貨幣の本來の資本化は、商品生産の經濟的法則並に其れより派生する所有權と極めて嚴密に一致して行はれる。それにも拘らず、其れは左の諸結果を有つのである。

（一）生産物は資本家の所有に屬するものであつて、勞働者の所有に屬するものではない。

（二）此生産物の價値は、前貸資本の價値の外に尙一の餘剩價値を含む。此餘剩價値は、勞働者には勞働を要せしめたるも、資本家には何物をも要せしめなかつた。而も其れは資本家の合法的所有となるのである。

（三）勞働者は其勞働力を引續き保持した。そして彼れは購買者を見出す時、新たに其れを販賣し得るのである。

單純なる再生産は、此の第一作用の周期的反覆に過ぎぬもので、其反覆の都度、いつも新たに貨幣は資本に轉化される。斯くて法則は破壞されず、寧ろ永久に發動するの機會を受くるに過ぎぬのである。『數個の交換行爲が順々に行はれる時はそれに依つてたゞ最後のものが最初のものゝ代表となるに過ぎぬ』（前揭シスモンヂ著『經濟學新原理』第一卷第七〇頁）。

それでも單純なる再生産は、此第一作用（貨幣の資本化）に——其れが孤立的行程と解せられる限り——全く變化したる一性質を押捺するに充分のものである。『個人的收入の分配に與かる人々の中、一方の者（勞働者）は、新たなる勞働に依つて年々それに對する一の新權利を取得し、他方の

者（資本家）は、既に本來の勞働に依つて豫め其れに對する一の永久的權利を取得してゐるのである』（シスモンヂ前揭書、第一一一頁）。されど、勞働の領域は長子權が奇蹟を行ふ唯一の領域に非ざることは周知の事實である。

單純なる再生產が、擴大したる規模に於ける再生產、卽ち蓄積に取つて代はられても、其れは何等影響する所あるものではない。前者に於ては、資本家は餘剩價値の全部を消費する。後者に於ては、彼れは餘剩價値の一部のみを消費し其の殘部を資本化することに依つて、その公德を證示する。

餘剩價値は彼れの所有物である。それは決して、他の何人の所有に屬するものでもない。彼れは其れを生產に前貸する時、最初彼れが市場に至りたる日に於けると全く同じく、自己の基金の中から前貸するのである。此基金が今度は彼れの勞働者の不拂勞働に基くと云ふことは、問題の上に何等の變化を與ふるものでない。Bなる勞働者が、Aなる勞働者の生產したる餘剩價値に依つて使用される時、第一に、Aは其商品の正當なる價格を鐚一文も減損されずして此餘剩價値を供給したものであり、第二に、此取引は總じてBとは全然沒交涉のものである。Bが要求し、又要求する權利を有する所のものは、資本家が彼れに其勞働力の價値を支拂ふと云ふことである。『それでも雙方が利得した。——勞働者は、自己が何等かの勞働をしてしまふ前に（自己の勞働が果實を結ぶ前に、と云ふべきである）、其勞働の（他の勞働者の不拂勞働の、と云ふべきである）果實を前貸されたるが故に。また雇主は、此勞働者の勞働が彼れの賃銀以上に價値せる（彼れの賃銀の價値以上の價値を生產せる、と云ふべきである）が故に』（シスモンヂ前揭書、第一三五頁）。

我々が資本制生產を其の更新の絕え間なき流動に於て觀察し、個々資本家並に個々勞働者の代りに、總體卽ち資本家階級並に其れと對立して勞働者階級に著目する時、問題が全く異つた趣きを呈することは確かである。けれども幾くすることによつて、我々は商品生產に取つて全く無關係なる一尺度を適用することになるであらう。

商品生產に於ては、單に販賣者と購買者とのみが相互獨立して對立し合ふだけである。彼等の相互關係は、彼等の間に締結された契約の滿期日を以て終了する。此取引が反覆されるとしても、其れは、前の契約とは全く沒交涉のことであり且つ

同じ購買者が同じ販賣者と再び組合ふは單に偶然の作用に過ぎぬ所の、新たなる一契約の結果である。

故に、商品生産又は其所屬の一行程を、それ自身の經濟的法則に從つて判斷せんとすれば、我々は各交換行爲を其れ自體として、卽ち其れに前後せる交換行爲との一切の聯絡を離れて、考察せねばならぬ。而して、賣買は單に個々人の間に締結されるものであるから、賣買の中に全社會階級間の關係を求むるは許し難きことである。

今日作用せる資本の經過し來たれる諸々の周期的再生產並に先行蓄積の連系は、如何に長き者であるにしても、其資本は常に其本來の處女性を保持してゐる。交換の法則を各交換行爲——個別的に觀たる——に於て觀察する限り、占有方法は、商品生產に照應せる所有權には毫も牴觸せずして、一の總革命を經驗し得る。此所有權は、生產物が生產者の所有に屬し、而して生產者が等價に對して等價を交換しつゝ、唯自己の勞働に依つてのみ自から富を積み得るに過ぎぬ初期時代に於けると同じく、又社會的富が絕えず增大する程度に於て、常に新たに他人の不拂勞働を占有し得る地位にある人々の所有となる資本制時代に於ても有效である。

此結果は、勞働力が勞働者自身に依り商品として自由に販賣さるゝに至るや否や不可避となる。然し又、其時以後始めて、商品生產は普遍化して標本的生產形態となる。其時以後始めて、各生產物は最初より販賣の爲に生產せられ、生產せられたる一切の富は流通を經過する。賃銀勞働が其基礎となる時始めて、商品生產は全社會に自己を强要する。そして又、其時始めて商品生產は其一切の潛勢力を發揮するのである。賃銀勞働の介在の來れるため商品生產は僞造されると言ふは、畢竟商品生產は僞造されずに居らうとすれば發展してはならぬと言ふことになる。商品生產が自己の內在的法則に從つて資本制生產に發達して行くのと同比例を以て、商品生產の所有法則は資本制占有の法則に轉化する。(二十四)

(二十四) 故に、資本制所有をば、其れに對し商品生產の永久的所有法則を主張することに依つて撤廢しやうとするプルドーンの狡猾を嘆賞せよ！

單純なる再生產に於てさへも、一切の前貸資本は、それが本來如何にして獲得されたものであらうとも、蓄積された資本、卽ち資本化せる餘剩價値に轉化するものである。

なることは、我々の既に見た所である。然しながら生產の潮流に於ては、最初に前貸された一切の資本は之れを、直接蓄積せられたる資本、換言すれば資本に再轉化せる餘剩價値又は餘剩生產物――それを蓄積せる人の手中に於て作用してゐると、他人の手中に於て作用してゐるとを問はず――と比較する時は、總じて一の極微小なる大さ（數學上の意味に於ける零に近き數量）となる。故に經濟學は一般に資本を『新たに餘剩價値の生產に使用される』（二十五）『蓄積された富』、或はまた資本家を『餘剩生產物の所有者』（二十六）と稱してゐる。一切の現存資本は蓄積せられ又は資本化したる利子であると云ふ言ひ方は、右の見解を異れる形態で示したものに外ならぬ。なぜならば、利子は餘剩價値の單なる一斷片に過ぎぬものであるから（二十七）。

（二十五）『資本、換言すれば利潤を目的として使用される蓄積された富』（前掲マルサス著『經濟學原理』第二六二頁）。『資本は……收入の中より節用され利潤を目的として使用さるゝ富より成る』リチァード・ジョーンズ著『經濟學序講』倫敦、一八三三年刊、第一六頁（6）。

（二十六）『餘剩生產物換言すれは資本の、所有者』（匿名者著『國民的困厄の原因並に救治。ジョン・ラッセル卿への一書翰』倫敦、一八二一年刊）（6）。

（二十七）『資本は節用せられたる資本の各部分に對する複利を以て、靈くべき增大を遂げつゝあるもので、世界に於ける收入を生ずる一切の富は、既に久しき以前より資本の利子となつた程である』（『倫敦エコノミスト』誌、一八五九年七月十九日）（7）。

（二）擴大したる規模に於ける再生產に關する經濟學の謬見

我々は之より蓄積、即ち餘剩價値の資本への再轉化に關して一層立入つた若干の決定をなすに先だち、正統派經濟學に依つて案出された一の曖昧事を除去せねばならぬ。

資本家が餘剩價値の一部を以て自己の消費の爲に購買する商品は、彼れに取つて生產並に價値增殖要具として役立つものに非らざる如く、彼れが自己の自然的並に社會的欲望を滿足せしむる爲に購買する勞働は生產的勞働ではない。彼れは、之等の商品及び勞働を購買することに依つて、餘剩價値を資本化するのではなく、反對に餘剩價値を收入として消費即ち支出するのである。ヘーゲルの適言せる如く『現存物の消費てふ點に存し』そして又特に我身に對する奉仕の豪奢に得々たる舊貴族的念慮とは反對に、資本の蓄積をば第一市民權なりと宣言し、又自

己に要するよりも一層多くを齎らす所の追加的生産勞働者の徵募の爲に收入の可なりの部分を支出することなく其全部を消費し盡す時は蓄積する能はずと倦むところなく說法するは、ブルヂョア的經濟學に取つて極めて重要なる事であつた。レ他方に於てブルヂョア的經濟學は、資本制生産を貨幣退藏と混同し(二十八)、隨つて蓄積せられたる富は、其の現存自然形態の破壞、卽ち消費を免れ、或はまた流通を脫したる富なりと想像する、俗見と闘はねばならなかつた。曰く、貨幣を流通より除外するは、其資本としての價値增殖とは正反對であり、貨幣退藏的意味に於ける商品蓄積は全くの迂愚であると(二十八a)。大嵩の商品蓄積は、流通停滯又は生産過剩の結果である(二十九)。俗見が、一方に於ては富者の消費基金中に蓄積せられ而して徐々に消費さるゝ財貨の光景、他方に於ては貯藏形成——之れは有らゆる生産方法に共通の一現象であつて、我々は流通行程の分解の際暫時それに就て述べるであらう——に依つて影響されてゐることは確かである。

(二十八)『現在に於ける如何なる經濟學者も、節用を以て單なる退藏のことゝはなし得ない。そして斯くの如き狹隘にして不充分なる手續以外には、此節用てふ言葉は國民的富に就いて單に一の用途を有するのみである。而して此用途は、節用物に依つて維持さるゝ樣々な勞働間の事實上の差異に基く、其節用物の使用上の差異より生ずるものでなくてはならぬ』(前揭マルサス著『經濟學原理』第三八及三九頁)。

(二十八a)例へばバルザックに於て其うである。彼れは貪慾心の有らゆる色合ひを根本的に研究せる者であつた。そして老高利貸ゴブセックが蓄積商品を退藏し始めた時早くも之れを兒戲視してゐる。

(二十九)『資本の蓄積……交換の停滯……生産過剩』(前揭トマス・コルベット著『個人の富の原因及樣態に關する研究』倫敦、一八四一年刊、第一四頁)。

されば之れだけの所では、正統派經濟學は不生産的勞働者でなく生産的勞働者に依る餘剩生産物の消費を蓄積行程の特徵的要件として强調する點に於て、當を得てゐる。然し又此點に、正統派經濟學の錯誤は始まるのである。アダム・スミスは、蓄積を單に生産的勞働者に依る餘剩生産物の消費として、又は餘剩價値の資本化を其の勞働力への單なる轉化として示すことを流行せしめた。レ

例へばリカルドの言ふ所を聽かう。曰く『一國の生産物が悉く消費さるゝは勿論である。然しながら之等の生産物が他の價値を再生産する人々に依つて消費されるか、又は其れを再生産せざる人々に依つて消費されるかは、大變な相違で

ある。我々が、收入は節用されて資本に附加されると云はれる收入部分が、不生產的勞働者ではなく生產的勞働者に依つて消費されることを指すのである。資本は非消費に依つて增大すると假定する以上に、大なる錯誤はない』(三十)。

リカルド及び其後に於ける總ての經濟學者がアダム・スミスに倣つて反覆する『斯く資本に附加されると云はれる收入部分は生產的勞働者に依て消費される』と云ふ錯誤よりも大なる錯誤は無いのである。此見地に從へば、資本に轉化される一切の餘剩價値は可變資本となるであらう。所が此餘剩價値は寧ろ、最初前貸された價値と同じく、不變資本と可變資本、卽ち生產機關と勞働力とに分割されるのである。勞働力は、可變資本が依つて生產行程中存する所の形態である。此行程に於て、勞働力その者は資本家に依つて消費される。勞働力は其作用——勞働——に依つて生產機關を消費する。同時に、勞働力の購入に於て支拂はれた貨幣は、『生產的勞働』ではなく『生產的勞働者』に依つて消費される所の生活資料に轉化する。アダム・スミスは根本的に誤れる一分解に依つて、次の如き不條理な

る結論に到達してゐる。曰く、各個の資本は不變的並に可變的兩成分に分れるとは云へ、社會的資本は結局可變資本にのみ歸し、換言すれば勞銀支拂の爲にのみ支出されるに過ぎぬと。例へば、一の羅紗製造業者が、二千磅を資本に轉化するとせよ。彼れは此貨幣の一部を織工の購入に、他の部分を毛織絲、毛織機械等に支出する。所が彼れに毛織絲、機械等を賣る人々は又、其賣上の一部を以て勞働の代を支拂ひ、斯くて二千磅全部が勞銀の支拂に支出され、換言すれば二千磅を代表する全生產物が生產的勞働者に依つて消費さるゝに至るまで、之れが繰返されるのである。我々は、此論法の全要點が『繰返される』てふ言葉——我々を彼方此方へ移動せしめる所の——の中に存するを見る。實際の所、アダム・スミスは其研究を丁度その困難の始まる點で中止してゐるのである(三十一)。

(三十)前揭リカルド著『經濟學原理』第三版、倫敦、一八二一年刊、第一六八頁註。

(三十一)ジョン・スチュアート・ミルは、『論理學者』の癖に、ブルヂョア的眼界内に於てさへ純專門的立場から明かに訂正を要する、其先進者等の斯くの如き誤謬をも決して看破して居らぬのである。彼は總ての場合、門弟的信仰を以て其師匠等の思想混亂を登錄してゐる。此場合にも亦『資本その者は結局全然貨銀となるものである。そして其れ

は、生産物の販賣に依つて償はれる時再び貨幣となる。』

年生産の總額にのみ著目する限り、年々の再生産行程は容易に理解し得るものである。けれども、年生産の總ての成分は之を世界市場に持ち行かねばならぬ。而して困難は其處に始まるのである。個々資本並に個人的收入の諸運動は、我々の目を晦まし、我々の研究に解決すべき極めて込み入た問題を提供する所の一般的位置轉換――社會的富の流通――に於て、互に交叉し混淆し消滅し合ふ者である。予は本書第二部（第二卷）第三篇に於て、眞の事實關係の分解を試みるであらう。重農論者等が、其『經濟學目錄』(8)中で始めて、年生産をば其流通を通過し來れる儘の姿に於て描寫しやうと試みたことは、彼等の偉大なる功績である(三十二)。

(三十二) アダム・スミスは再生産行程に關する說明に於て、其の先進學者殊に重農派に比し色々な點で、何等の進歩を遂げなかつたのみならず寧ろ明確なる退歩をなした。本文中に揭げた彼の幻想と關聯して、同じく彼が經濟學の上に遺した眞に馬鹿々々しい獨斷說がある。曰く、商品の價格は、勞銀、利潤（利子）及地代、換言すれば單に勞銀と餘剩價値とより成る者である。此基礎から出發して、少くともストルヒは、素朴に自白してゐる。――『必要價格を其最單純要素に約元するは不可能である』と。（前揭ストルヒ著『經濟學教課』ペテルスブルグ版、一八一五年刊、第一卷、第一四〇頁註）(9)。

商品の價格をば其最單純要素に約元するを不可能なりと宣言する、此美しい經濟科學よ！　此點に就ての詳細は、之を本書第三部（第三卷）第二及第七篇第三節中に究明する。尙經濟學が、純生産物中資本化する全部は勞働者階級に依て消費されると說くアダム・スミスの主張を、資本家階級の利益の爲に利用するを逸しなかつたことは自明である。

（三）餘剩價値の、資本及收入への分割。節慾學說

前章に於ては、我々は餘剩價値又は餘剩生産物を單に資本家の個人的消費基金として、又本章上段までは單に之れを蓄積基金として取扱つたに過ぎぬ。然しながら餘剩價値は單に前者のみでも後者のみでもなく、同時に其雙方である。餘剩價値の一部は資本家に依り收入として消費され(三十三)、他の一部は資本として使用又は蓄積される。

(三十三) 『收入』てふ言葉が二重の意義に、即ち第一、周期的に資本より生ずる果實としての餘剩價値を示す爲、第二、此果實の中、資本家に依つて周期的に消費され又は資本家の消費基金中に編入される部分を示す爲に使用されるものなることを、讀者は認めるであらう。予は此二重意義を確守する。其れは、英國並に佛國經濟學者の用語と一致するからである。

餘剩價値量一定せる時は、此兩部分の一方小なるに從ひ、他方は益々大である。他の一切事情に變化なき限り、此分割の行はるゝ比例は蓄積の大小を決定する。然しながら此分割を行ふ者は、餘剩價値の所有者、卽ち資本家である。故に此分割は、資本家の意志行爲である。資本家が徵收する貢稅中彼れに蓄積される部分は彼れが其れを消費し盡さゞるが故に、換言すれば其資本家としての職分、卽ちみづから富を積むてふ職分を盡すが故に貯蓄されるのだと云はれてゐる。

資本家は人格化した資本である限りに於てのみ、一箇の歷史的價値と、かの、頓智家なるリヒノヴスキーの謂ふ如く何等の年月日なき、歷史的存在權とを有するものである。唯その限りに於てのみ、彼れ自身の過渡的必然は資本制生產方法の過渡的必然中に含まれてゐる。然しまた其限りに於て、使用價値及び享樂でなく、交換價値及び其增殖が、資本家の作働的動機なのである。資本家は價値增殖の熱狂者として、顧慮する所なく人類に迫つて、生產の爲の生產、隨つて社會的生產力の發展、並に、單りそれのみがより高級なる社會形態——各個人の充分にして自由なる發展を根本原則とする所の——の眞基礎を成し得る物質的生產條件の創造を爲さしめる。資本家は單に資本の人格化せるものとしてのみ尊重すべきである。斯くの如き者として、彼れは貨幣退藏者と絕對の致富欲を分有するものである。然し貨幣退藏者に於て個人的想像として現はれる者は、資本家に於ては彼れが單に其の一の齒車たるに過ぎぬ社會的機構の作用である。尙又、資本制生產の發達は一の產業的企業に放下せる資本の不斷の增進を必要ならしめる。そして競爭は、資本制生產方法の內在的法則を外部的强制律として、各個の資本家に强要する。競爭は資本家をして、其資本を保存せんが爲に絕えず其れを擴大するを餘儀なからしめる。そして彼は只不斷の蓄積に依つてのみ、其れを擴大し得るのである。

故に資本家の一切行動が、彼れに於て意志と意識とを賦與された資本の機能に過ぎぬ限り、彼れ自身の私消費は、恰も複式簿記に於て資本家の私支出が其資本に對して借方に記入される如く、彼れに取つて其資本の蓄積に對する盜掠に當るのである。蓄積とは社會的富の世界を征服することである。其れは被搾取人間材料を增大すると同時に、資本家の直接間接の支配權を擴大する(三十四)。

(三十四) 蓄式とは云へ不斷に更新される資本家形態である高利貸業者に於てルーテル

は頗る適切に、權勢追求は致富衝動の要素なることを示してゐる。曰く『異教徒は其理性に依つて、高利貸業者が四重の盜賊及び殺人者なることを結論し得た。然るに我等基督信徒は彼等を尊敬し、其の貨幣の爲めに全く彼等を崇拜してゐる程である。……他人の榮養物を吸ひ盡し、强奪し、竊盜する者は、他人を餓死せしめ、又は全く破滅せしめると同じ大罪（其力の及ぶ限りの）を犯すことになるのである。高利貸業者は斯る大罪を犯してゐるのだ。彼等は自から絞首臺上の人となり、其盜竊せる金貨の數ほどの獄に依つて——斯る多數の獄が其嘴を挿込んで喰ひ得るだけの肉が彼れの身に存する限り——喰はれねばならぬ時に、安全に其床机に坐してゐる。斯る間に小盜は枷められてゐるのに、大盜は黃金と紺とを誇示してゆく。……されば此世には守錢奴高利貸業者に優る人類の大敵（惡魔に次いでの）はないのである。なぜならば、彼れは一切の人類に對して神たらんとするものであるから。土耳其人や、武士や、暴君なども亦惡人である。されど彼等は人民に生活せしめ、自己の惡人たり人類の敵たる所以を自認せねばならぬ。そして時折りは若干の人々に對して同情を示し得る、否示さねばならぬのである。然るに高利貸業者貪慾者は自己の力の及ぶ限り、全世界を飢餓窮乏の裡に滅亡せしめ、斯くて一切を自己のものとなし、總ての人々をして宛ら神より受くるが如くにして自己より受けしめ、彼等を永へに自己の奴隷たらしめやうとするのである。彼等は美しき外套や、黃金の鎖や、指環を身に著け、其口を拭ひ、貴重なる敬虔者のやうに見えしめやうとする。……高利貸業者は人狼のやうな恐ろしい大怪物であつて、一切を荒掠することカクスや、ゲリオンや、アンテウス以上である。而も彼れは身を裝ひ、篤信家のやうに見られやうとする。斯くて彼れが其洞に引き戻す牡牛の何處にゆけるやを人々に知れ得ないやうにするのである。けれども勇者ヘルクレスは牡牛並に其囚人の叫びを聽きつけ、斷崖や岩石の間にもカクスを捜し出し、牡牛を惡漢の手から解放するであらう。カクスは、敬虔なる高利貸にして一切を盜み喰ふ惡漢を意味するものであるからである。彼れは、斯くの如き事を爲せるものが自己であるを白狀しやうとはせず、何人も自己を捜し出さゞるべしと信じてゐる。なぜならば洞に引き戻された牡牛は、其足跡に依つて、自己が既に解放されたものであるかのやうに見えしめるからである。同樣に高利貸業者は、宛ら彼れが有用なるものであつて世に牡牛を與へたかの如く——實は一切の牡牛を他に與へず自分だけに奪つて喰ふ癖に——世を欺かんとする。……而して我々は道劉や、殺人者や、强盜などを車刑にしたり刎首したりする以上、尙更ら一切の高利貸業者を車刑にし、殺し……逋捕し、呪咀し、刎首せねばならぬのである』（前揭マルチン・ルーテル著『僧侶等へ。高利貸業者に反對して說敎すべく』ウキッテンベルヒ、一五四〇年刊）。

然しながら、原罪は到る處に作用してゐる。資本制生產と、蓄積と、富との發展するにつれて、資本家は單なる資本體化ではなくなる。彼れは自己のアダムに對して『人情のどよめき』を感ずる。そして禁慾に對する熱中を、舊式な貨幣退藏者の

先入的觀念として嘲笑するやうに教養されて來る。古典的資本家は、個人的消費を自己の職分に對する罪惡として又蓄積に對する『節制』として擯斥するが、近代的資本家は、蓄積を自己の享樂衝動に對する『克己』と見做し得るのである。『あゝ彼れの胸には互ひに背かんとする二箇の靈が宿つてゐる！』

資本制生產方法の歷史的初期――而して總ての資本家的成上者は夫々個別的に此史的段階を通過するのである――に於ては、致富衝動と貪婪とは絶對的情熱として覇權を握つてゐる。然るに資本制生產の進步は、單に諸々の享樂の一世界を造り出すのみではない。それは投機及び信用組織を展開することに依つて、急激なる致富に對する幾多の源泉を開始するのである。加之、一定の發達程度に達すると、傳來程度の驕奢――同時に又、富の展覽であり、隨つて信用要具である所の――は、『不運なる』資本家の業務上の必要事となる。贅澤は資本の代表費中に加つて來る。さらてだに資本家は、貨幣退藏者の如く其個人的勞働と個人的非消費との大小に比例してゞはなく、彼れが他人の勞働力を吸ひ盡し、一切の生活享樂に對する克己を勞働者に强要する程度に比例して、自から富を積むのである。故に資本家の驕奢は決して、かの快活なる封建君主の驕奢に見らるゝ如き天眞爛漫な性質を有するものではなく、却つて其背後には常に、不潔極まる貪慾と氣支はしげな打算とが潛んでゐるとは云へ、而も資本家の驕奢は其蓄積の增大すると共に――其一方が他方を制限するを要せずして――增大するのである。其れと同時に、個々資本家の突ッ張つた胸の中には、蓄積衝動と享樂衝動との間のファウスト的衝突が展開して來る。

ドクトル・ジョン・エーキンは一七九五年に公刊せる一書中に曰く、『マンチェスターの工業は、之れを四期に區分することが出來る。第一期に於ては、工場主等は其生活の爲に痛く働くを餘儀なくされた。』彼等は特に、自己の子女を徒弟として彼等に委ねたる父母等に對する盜掠に依つて、みづから富を積んだ。蓋し之等の父母は、斯く其子女を徒弟として彼等に委ねたるに對して、――其子女は餓死せしめられてゐるのに――高價なる支拂をなさねばならなかつたのである。他方に於て、平均利潤は低く、蓄積をなすには大なる節儉が必要であつた。彼等は貨幣退藏者のやうに生活した。そして中々其資本の利子を消費する所ではなかつたので

ある。『第二期に於ては、彼等は小財産を所有し始めたが、矢張り從前通り酷く働いた。』なぜならば、總ての奴隷監視人の知る如く、勞働の直接搾取には勞働を要するからである。『そして、彼等は從前通り質素に生活してゐた。……第三期に於ては、贅澤が始まつた。そして王國内の各市場地に乘馬注文取を派遣することに依つて業務は擴大された。恐らく一六九〇年以前に於ては、工業に依つて取得せられる三千乃至四千磅は、殆んど全く、又は全然、此の地には存在して居らなかつたであらう。所が、丁度其の頃、又は其れよりも少し後れて、工業家等は既に貨幣を蓄積してゐた。そして彼れ等は木造及び漆喰建の家の代りに石造の家を設け始めた。……十八世紀初葉に於ても尙、一バイントの外國製葡萄酒を來客に進めるマンチェスターの工場主は、其のすべての隣人の非難と警戒との的になつた程である。』機械の出現以前に於ては、工場主等の寄り集ふ酒場に於ける其夜會費は、一杯のポンス水に對する六片と、一ねぢりの煙草に對する一片とを超過することは決してなかつた。一七五八年――此年は一新時代を劃するものである――に於て始めて『實際、工業に携はれる一人で、自分の馬車を有する者』が見られた。『第四期（十八世紀の最後の三十年間）は、出費と贅澤とが著しく增進せる時代であつて、此時代は歐洲各地に亙る乘馬註文取と代理店とに依つて擴大せる業務に支持されたのである』(三十五)。若し此善良なるドクトル・エーキンが、今日マンチェスターに甦へるとしたならば、彼れは果して何と言ふであらう！

(三十五) ドクトル・ジョン・エーキン著『マンチェスター周圍三十乃至四十哩間地方に就ての叙述』倫敦、一七九五年刊、第一八二頁以下(10)。

蓄積せよ、蓄積せよ！之れモーゼであり、諸々の豫言者である！『産業は節約が蓄積する所の材料を供給する』(三十六)。故に貯蓄せよ、貯蓄せよ！換言すれば、餘剰價値又は餘剰勞働の出來得る限り大部分を、資本に再轉化せよ！蓄積の爲めの蓄積、生産の爲めの生産。此公式に依つて正統派經濟學はブルヂョア的時代の歷史的使命を言ひ現はした。正統派經濟學は富の生みの苦しみに就て瞬時も誤つた事はない(三十七)。されど歷史的必然の面前に於て、哀傷に何の益があらうぞ！

(三十六) 前掲アダム・スミス著『諸國民の富』第三部、第三章。

(三十七) ジァン・バチスト・セーでさへも言ふ。――『富者の貯蓄は、貧者を犧牲にしてなされる』と。『羅馬のプロレタリアは、殆んど全く社會を犧牲にして生活してゐた。……近世の

社會はプロレタリアを犧牲にして、卽ち其プロレタリアの勞働收益中から奪取つた部分に依つて生活してゐる、と殆んど言ひ得るであらう』（シスモンヂ著『經濟學研究』第一卷、第二四頁）。

正統派經濟學に取つて、プロレタリアは餘剩價値生產用の機械に過ぎぬものであるが、資本家も亦正統派經濟學から見れば、此の餘剩價値を餘剩資本に轉化する機械に外ならぬものである。

正統派經濟學は、資本家の歷史的職分を眞劍に取扱ふ。資本家の胸中から享樂衝動と致富衝動との間の忌はしき衝突を祓ふ爲に、十九世紀二十年代の初葉マルサスは、實際生產に從事してゐる資本家に蓄積の任務を、他の餘剩價値分有者たる地主、國家並に教會の受祿者等に費消の任務を割當てる分業を主張した。彼れは言ふ。――『支出に對する情熱と、蓄積に對する情熱とを分離して置くは』最も重要な事であると（三十八）。既に久しく享樂兒化し俗人化せる資本家諸君は絶叫した。彼等の代辯者の一人なる或リカルド論者は叫んで言つた。――マルサス君は、不生產的消費者に依つて不斷の刺戟を產業者に强要せんが爲に、高き地代、高き租稅等を說法するのだ！と。勿論、生產、絶えず擴大する規模に於ての生產てふことが、其標榜となつてゐることは事實である。然しながら『生產は右の如き行程に依つて奬勵される所か、寧ろ遙かにより多く阻害されるであらう。又其性格から判斷するに若し活動を强制し得るとせば必ずや見事に活動するなるべき多數の人々をば、斯樣に唯他人を掠奪せしむる爲にのみ遊惰に暮らさせて置くは、眞に公平な事とは云へないのである』（三十九）。斯樣に彼れは、產業資本家の手からソップの脂肪を掬ひ去ることに依つて、之れに蓄積を奬勵するを不公平と見てゐるが、然し勞働者を『勤勉にして置く爲に』、其賃銀を出來得る限り最低限に縮少するは、彼れに取て必要事のやうに見えるのである。また彼れは、不拂勞働の占有が餘剩價値獲得の祕訣なることを、瞬時も隱蔽しない。『勞働者等の側に於ける需要增加とは、畢竟彼等が自己の生產物中より、より少量を自らの爲に取り、其より、より大なる部分を自己の雇主に委ぬるを甘諾することを指すに外ならぬ。而して人若し斯くの如きは、消費（勞働者等の側に於ける）を減退するに依つて過充（市場過充、過剩生產）を招來するものなりと言はんか。予は只、過充は利潤の增大と同意義なりと答へ得

るのみてある』(四十)。

(三十九) 匿名者著『最近マルサス氏の唱道せる、需要の性質に關する諸原理に就ての研究』第七六頁(11)。

(四十) 前揭書第五〇頁。

勞働者から汲み取つた獲物は、之れを如何やうに產業資本家と遊惰なる地主等との間に分割するが蓄積に取つて最有利なりやてふ學問上の論爭は、七月革命の面前に鳴りを鎭めてしまつた。其後間もなく、都市プロレタリアはリオンに於て警鐘を鳴らし、地方プロレタリアは英吉利に於て赤旗を飜した。海峽の此岸に於てはオーウエン主義、彼岸に於いてはサン・シモン主義とフリエー主義とが蔓延したのてある。ナソー・ウォリアム・シーニョアは、マンチェスターに於て資本の利潤（利子を含む）は『十二時間勞働日の最終一時間』に於ける不拂勞働の產物なる旨を發見せる丁度一年前に、今一の發見を世に發表したのであつた。彼れは儼かに言つた。――『予は、生產器具として見たる資本てふ言葉に換ふるに節慾(12)てふ言葉を以てする』と(四十一)。之れ俗學的經濟學の『發見』の無類の標本てある！之れ經濟學上の範疇に換ふるに、阿諛者の文句を以てするものてある。それだけの事だ。

(四十一) シーニョア著『經濟學原理』アリヴァブアー佛蘭西譯、巴里、一八三六年刊、第三〇八頁(13)。之れは蓋正統派の學徒に取つては、餘りに馬鹿々々しい事てあつた。『シーニョア君は勞働及び資本てふ言葉に換ふるに、勞働及び節慾てふ言葉を以てした。……節慾は單なる否定に過ぎぬ。利潤の源泉を成すものは、節慾てなくて、資本の生產的使用である』(前揭ジョン・カゼノーヴェ編マサルス著『經濟學上の諸定義』倫敦一八五三年刊、第一三〇頁編者註)。之れに反して、ジョン・スチユアート・ミルは一方にリカルドの利潤說を採用し、他方にシーニョアの『節慾報酬』說を併合してゐる。彼れは一切辯證法の源泉なるヘーゲル流の『矛盾』に就ては全く不案內てあるが、平凡なる諸矛盾に就ては極めて精通してゐるのてある。

第二版追加。俗學的經濟學者は、總ての人間行爲は其反對のものに就ては『節慾』と見られ得ると云ふ、單純なる反者を決してしなかつた。食事は斷食の節慾、步行は佇立の節慾、勞働は怠情の節慾、怠情は勞働の節慾てあり、以下之れに準ず。之等の諸君は、いちどスピノザの『斷定は否定なり』に就て靜思してみたら宜からう。

シーニョアは敎へて言ふ。――『蒙昧人は弓を造る時、一の產業を爲るが節慾は爲ない』と。之れは、初期の社會狀態に於て如何にして、また何故、資本家の『節慾なしに』勞働要具が製出されたかを說明するものてある。『社會は進步するに從つ

て、益々多くの節慾を要求する』(四十二)――卽ち他人の産業と其生産物とを占有する産業を爲す人々に對して。勞働行程の有らゆる條件は其時以後、資本家側に於ける同樣に多數の節慾行爲と化する。穀物を食ふのみでなく、また時くといふこと、それと、それは資本家の節慾だ！葡萄酒に充分醱酵する時間を與へると云ふこと、それは資本家の節慾だ！(四十三)。資本家が『其生産機關を勞働者に貸與する(!)時換言すれば、蒸氣機關、棉花、鐵道、肥料、輓馬等を食盡し、又は俗學的經濟學者があどけなく考へてゐる如く、『それらの物の價値』を贅澤品及び其他の消費資料の形で蕩盡する代りに、勞働力を併合するとに依つて之等生産機關を資本として價値增殖せしむる時、彼れは自己の欲望を奪ひ去つてゐるのである(四十四)。資本家階級が如何にして其れを爲すかは、俗學的經濟學が今日に至るまで頑固に警戒してゐた一祕密である。世界は只、斯るヴイシュヌー神の近世懺悔者なる資本家の苦業に依つてのみ生きてゐる、それで充分なのだ。單に蓄積のみでなく、單純なる『資本保存の爲にも、資本を消費し樣とする誘惑に逆ふべく不斷の努力を要する』(四十五)。斯くて單純なる人道は、恰も最近デォルヂア州の奴隷所有者が奴隷制度の廢止に依つて、黑人奴隷より搾取せる餘剩生産物を悉くシァンパン酒に與消すべきか、それとも其一部をより多くの黑人と土地とに再轉化すべきかの苦しき板挾みの中から救出されたと同じ風に、資本家を右の如き殉道と誘惑との間から救出すべく明らさまに命ずるのである。

(四十二)シーニョア前揭書、第三四二頁。

(四十三)『追加價値の取得を豫期せずしては、何人も、例へば其小麥を蓄いて其れを十二ケ月間地中に存留せしめたり、又は其葡萄酒を數年間酒窖内に放置したり――それらの物又は其等價を直ちに消費する代りに――しないであらう』(ヌクローブ著『經濟學』ボッター編、紐育、一八四一年刊、第一三三及一三四頁)(1)。

(四十四)『資本家が其生産機關を必要品又は贅澤品に轉化することに依つて其の價値を自己の消費の爲に使用する代りに、其生産機關を勞働者に貸與することに依つて(此婉曲なる言廻しは、俗學的經濟學公認の遣口に從ひ、産業資本家によつて搾取されてゐる賃銀勞働者をば、金貸資本家から借款してゐる産業資本家その者と等位に置く爲めに用ゐられるのである)、自己の上に課する缺乏』(前揭ギュスタウ・ド・モリナリ著『經濟學研究』巴里、一八四六年刊、第四九頁)。

(四十五)前揭クールセル・スヌウーイユ著『産業的企業の理論及實地論』第二版、巴里、一八四六年刊、第四九頁。

單純なる再生產のみでなく、又――程度は様々なれど――擴大したる規模に於ける再生產が種々様々なる經濟的社會形態内に行はれる。累進的により多く生產され、より多く消費され、隨つて又より多くの生產物が生產機關に轉化されても、此行程は、生產機關、隨つて又其生產物並に生活資料が、尙いまだ資本の形を以て勞働者に對立せざる限り、資本の蓄積、隨つて又資本家の職分としては現はれないのである(四十六)。バイレーブーリ市の東印度大學に於てマルサスの後を追ふて經濟學の講座を擔任せる、數年前物故したリチァード・ジョーンズは、二個の大事實に就て此點を善く攻究してゐる。印度人民の大部分は自作農夫であるから、其の生產物其の勞働要具並に生活資料は、決して『收入の中から貯蓄され　つて蓄積の先行過程を通過せる基金の形では』存在して居らぬ(四十七)。他方に於て英吉利の支配が舊制度を攪亂せること最も少なき諸地方に於ける非農業勞働者等は、農業上の餘剰生產物の一部を貢納又は地代として受くる領主等に依つて直接使用される。此の生產物の一部は現物のまゝ領主等に依つて消費され、他の一部は彼等の爲に勞働者に依つて贅澤品及びその他の消費資料に轉化される。殘餘の部分は、自己が使用する勞働器具の所有者なる勞働者等の貨銀たるのである。此場合には、生產並に擴大したる規模に於ける再生產は、かの奇異なる聖者、かの悼ましき委の騎士たる『克己的』資本家の干渉なしに、進行するのである。

(四十六)『如何なる種類の收入が國民的資本の發達に貢獻すること最も多きかは、各種收入の進歩の段階異なるに從つて異なる。隨つて此發達に就て異れる地位を占むる諸國民に於ては、全く異なるものである。……利潤は……社會の初期段階に於ては、貨銀や地代に比較して重要ならざる蓄積源泉である。……國民的產業能力が事實上著しく進歩せる時、利潤は蓄積の一源泉として比較的重要の者となる』(リチァード・ジョーンズ著『諸國民の經濟に關する講義敎科書』ハートフォード、一八五二年刊、第一六及二一頁)(15)。

(四十七)前揭書第三六頁以下。〔第四版追加――之れは過誤に違ひない。此個所は見出されないのである。――D・H〕

（四）餘剰價値の、資本及收入への比例的分割より獨立して蓄積の範圍を決定する諸事情――勞働力搾取の程度、勞働の生產力、充用資本と消費資本との差額の增大、前貸資本の大小。

餘剰價値の資本及び收入に分割される比例が一定せるものと假定すれば、蓄積

資本の大小は餘剩價値の絶對的大小に依つて定まることは明かである。八〇パーセントが資本化され、二〇パーセントが食盡されると假定する時は、總餘剩價値が三千磅なりしか一千五百磅なりしかに從つて、蓄積資本は二千四百磅か一千二百磅かの何づれかに當るであらう。されば蓄積の大小決定に於ては、餘剩價値の分量を決定する一切の諸事情が共同作用することになる。我々は以下今一度、之等の諸事情を――但しそれが蓄積に就て新見地を提供する限りに於てのみ――概括する。

我々は、餘剩價値率が先づ勞働力搾取の程度に依つて定まる者なる事を記憶してゐる。經濟學は此役割を極めて重要視し、爲に往々勞働生産力の增進に基く蓄積の促進をば、勞働者搾收の增進と同一視する程である(四十八)。餘剩價値生産に就ての諸篇に於て、我々は常に、勞銀が少なくとも勞働力の價値に等しきことを假定した。所が勞銀の、此價値以下への强制的低減は、實地の運動に於ては極めて重要なる役割を演ずるものであるから、我々は暫時之れに就て述べねばならぬ。斯る勞銀低減は、事實上、一定限界內に於て、勞働者の必要消費基金を

資本の蓄積基金に轉化するものである。

(四十八)『リカルドは曰く、「社會の發達段階異なるに從つて、資本又は勞働使用(換言すれば搾取)要具の蓄積は、或は大或は小である。で、此蓄積は總ての場合、勞働の生産力に依つて定まるべきものである。勞働の生産力は一般に、沃土の豐富なる所に於て最大である」と。若し右の第一命題に於て、勞働の生産力てふことが、生産物中自己の筋肉勞働に依つて之れを生産せる人々の手に渡る部分の小なることを指すものとすれば、此命題は重語に近いものである。なぜならば、生産物中殘餘の部分は、其所有者これを欲せば資本が依つて其れから蓄積され得る所の基金であるから。されど斯く解する時は此事は土地の最肥沃なる所に於ては多くの場合行はれぬことになるのである』(前掲匿名者著『經濟學上言葉の上の諸論爭に就ての觀察』第七四及七五頁)。

ジョン・スチュアート・ミルは言ふ。――『勞銀は何等の生産力を有せず、其れは生産力の價格である。勞銀は勞働その者と共に商品の生産に貢獻するものではない。それは丁度、道具の價格が道具その者と共に商品の生産に貢獻するものでないのと同じである。若し勞働が購ふことなしに得られるとすれば、勞銀は無用に歸するであらう』(四十九)と。だが、若し勞働者等にして空氣を食つて生活し得るとせば、彼等は如何なる値段でも購はれ得ないであらう。故に彼等に就ての無費用

てふことは、數學上の意義に於ける一限界であつて、常に接近し得るものではあるが、常に到達し得ざるものである、勞働者を此虚無的立場へ壓し下げんとするは、資本の不斷の傾向である。

（四十九）ジョン・スチュアート・ミル著『經濟學上若干の未解決問題に就ての論文集』倫敦、一八四四年刊、第九〇頁(16)。

予が屢々引用せる十八世紀の一著述家なる、『貿易及び商業』の著者は、英吉利に於ける勞銀をば佛蘭西及び和蘭に於ける勞銀水準に引下ぐるを英吉利の史的使命なりと宣言してゐるが、斯くすることに依つて彼は英國資本の魂の奥底に存する祕密を暴露せるものに外ならぬ（五十）。彼れは就中、素朴に斯う言つてゐる。

――『されど、我が貧民（勞働者に對する術語）にして贅澤に生活せんと欲する時は、……勞働は勿論高價であらねばならぬ。……試みに思へ、我が工業勞働者は如何に多量の、ブランデーや、ヂン酒や、茶や、砂糖や、外國果物や、强ビールや、捺染リンネルや、嗅煙草や、喫煙草などの如き贅澤品を消費しつゝあるかを』（五十一）。

（五十）匿名者著『貿易及び商業論』倫敦、一七七〇年、第四四頁(17)。同樣に、一八六六年十二月及び一八六七年一月の『タイムス』紙は、自己の雇主の爲に生活するに就て嚴密に必要なる以上を、要求もせず受領もせざる白耳義の鑛山勞働者の幸福なる狀態を摘出せる英國鑛山主等の心情の迸りを掲載した。白耳義勞働者等は非常に苦しみを受けてゐる。が『タイムス』紙に於て模範的勞働者と稱せらるゝには！。一八六七年二月初旬、白耳義鑛山勞働者（マルシーンネに於ける）は其火藥と彈丸とを以て鎭壓せられたるに就て嚴密に必要なる以上を、要求もせず受領もせざる白耳義の鑛山勞働者の幸福なる狀態を摘出せる英國鑛山主等の心情の迸りを掲載した。白耳義勞働者等は非常に苦しみを受けてゐる。が『タイムス』紙に於て模範的勞働者と稱せらるゝには！。一八六七年二月初旬、白耳義鑛山勞働者（マルシーンネに於ける）は其火藥と彈丸とを以て鎭壓せられたるに就て嚴密に必要工を以て應報したのである。

（五十一）前掲第四四及四六頁。

彼れはノーサンプトンシーア州に於ける或工場主の著書を引抄してゐる。此工場主は天の彼方を偸み見する眼ざしを以て愁訴して曰く、『勞働は英吉利に比べると、佛蘭西に於ては、三分の一方安價であり、粗衣粗食に甘んじてゐる。彼等は滅多に肉を食はぬ。小麥の價高き時は彼等は幾許のパンも食はぬのである』（五十二）。此論文家は更らに續けて言ふ。――『加ふるに、彼等の飲物は水又は其他の少量の飲料であつて、彼等が之れに支出する金額は至つて微少である。……斯る狀態に至らしむるは極めて難事ではあるが、然し實行不可能なることではない。それは既に、佛蘭西に於ても和蘭に於ても實行され

てゐるのだ』(五十三)と。

(五十二)此ノーサンプトンシーア州の工場主は、斯く胸が一杯になつた場合の事ゆえ怨し得べき、敬虔なる一の過誤を犯してゐる。彼れは英吉利に於ける鑛山勞働者と佛蘭西に於ける鑛山勞働者との生活を比較すると稱しながら、實は後に至り彼れみづから其混亂せる叙述中に白狀せる如く、本文引抄の言葉を以て佛蘭西に於ける農業勞働者を描いてゐるのである!

(五十三)前揭書第七〇及七一頁。第三版註——爾來成立せる世界市場競爭のお陰で、我々は今日では更らに一歩を進めてゐる。國會議員スタプレトンは其選擧人等に向つて曰く、『若し支那にして一大工業國たるに至るとせば、予は歐羅巴の工業勞働者等が其競爭者の水準に低下することなしに如何にして其競爭に堪え得べきかを知らず』と(『タイムス』紙、九月三日、一八七三年)。——今日、英國資本の熱望標的たるものは、もはや歐洲大陸の勞銀ではなく支那の勞銀である。

右に引用せる一七七〇年の論文を距る二十年後に、亞米利加の一山師にして男爵となれるベンジァミン・タムソン(別名ルムフォード伯爵)は神と人とに對する大滿足を以て右と同じ仁愛を追求した。彼れの『論文集』は、勞働者の高價なる普通食物に換ふるに代用品を以てする、有らゆる種類の料理法を含む一の料理書である。——『割大麥五斤分七片半、玉蜀黍五斤分六片四分の一、赤鯡三斤、鹽一斤、醋一斤、胡椒及野菜二片、卽ち合計二十片四分の三を以て、六十四人分のソップを造ることが出來る。而して割大麥及び玉蜀黍の平均價格を以てする時は……此ソップは一人分(二十オンス)四分の一片を以て供給し得るのである』(五十四)。資本制生産の進歩につれて、商品贋造は此タムソンの理想を無用のものたらしめた(五十五)。

(五十四)ベンジァミン・タムソン著『政治、經濟、並に哲學論文集』全三卷、倫敦、一七九六——一八〇二年刊、第一卷、第二八八頁(15)。サー・フレデリック・モルトン・イーデンは、其著『英蘭の貧民狀態又は勞働階級史』(16)中に於て、全力以つてルムフォード流の乞食ソップを勞役場の監督者等に推奬し、『殊に蘇格蘭に在つては、多くの貧民は小麥や、稞麥や、肉などの代りに、たゞ水と鹽とを混ぜた丈けの割燕麥や割大麥を食べて、數ケ月間、而かも頗る愉快に暮らしてゐる』と言つて英蘭の勞働者等を嫉めてゐる(前揭書、第一卷、第二部、第二章、第五〇三頁)。十九世紀に於ける之れに似寄つた『指示』がある。例へば斯う言はれてゐる——『英蘭の農業勞働者は健康上最も有益なる混合麥粉を食するを拒んでゐる。教育のより良好なる蘇格蘭に於ては、此先入的偏見は恐らく知られて居らぬであらう』(チァーレス・ヘンリー・パーリ著『現行穀物條例の必要に關する問題の考察』倫敦、一八一五年、第七篇第二十二章　餘剩價値の資本化

六年刊、第六九頁)(20)。而も此同じパーリは嘆じて曰く、イーデン時代(一七九七年)に比すれば英國勞働者は目下(一八一五年)頗る不良狀態に在ると。

(五十五)生活品の贋造に關する最近に於ける議會委員の報告に依つて我々は、藥料の贋造でさへも英吉利に於ては例外にあらず常則と成つて居ることを知るのである。例へば倫敦に於ける三十四箇の藥劑所より購へる同數の阿片見本を試驗した所、其中三十一は、罌粟葫、小麥粉、護謨、粘土、砂等を惡混せるものなることが明かとなつた。多くは、モルフィンの一原子をも含まぬものであつた。

十八世紀末並に十九世紀の初期數十年間に、英吉利の小作農業者及び地主は、日傭農業勞働者等に最低限額以下を勞銀の形で支拂ひ、殘餘の部分を區救貧局よりの救恤の形で支拂ふとに依て、絶對的最低賃銀を勵行した。英吉利の田舍紳士等が其、賃銀率を『合法的』に確定するに就て振舞つた道化の一例――『バークス州の大地主等は、一七九五年スピーナムランドに於ける勞銀を確定せる當時晝食を認めてゐた。而も彼等は、勞働者は晝食するに及ばぬと、明に考へたのである。……彼れ等は斯う決定した。――八斤十一オンスのガロン容積パン塊の價が一志なる時は、週賃銀は一人宛三志なるべく、パンの價が一志五片に達する迄の間賃銀は其れに準じて增額せらるべきである。而してパンの價が一志五片を超過する時は二志に達する迄の間、賃銀は其れに比例して減額せらるべきである。斯くて、パンの價が二志に達する時は、彼れの榮養量は以前に比べて五分の一だけ減少すべきであると』(五十六)。

(五十六)ヂー・ビー・ニューナム(辯護士)著『兩院に於ける穀物條例委員に對する證述の批評』倫敦、一八一五年刊、第二八頁、註(21)。

一八一四年の上院調査委員は、大なる小作農業者にして判事たり、勞役場の管理人たり、賃銀調節官たるエー・ベンネットなる人を訊問した。曰く『勞働者は其の日勞働の價値の幾部分かを、救貧税中より補充せられたるか?』答へて曰く『然り、各家族の週收入は、一人に付きガロン容積パン(八斤十一オンス)並に三片の額迄補充せられたり!……予等は信ず、一週一ガロンのパンは、一家內の各人を一週間支持するに充分なりと。三片は衣類用なり。而して、教區にして若し衣類を現品にて供給するを適當とせば三片は控除せらるべし。斯る慣例は、ウヰルトシーア州の西部一帶、及予の信ずる所に依れば全國を通じて行れ居るものなり』(五十七)。

當時の或ブルヂョア著述家は叫んで言ふ。――『斯様にして數年間、彼等（小作農業者）は、自國民中の尊敬すべき一階級をば勞役場にたよらしむるとに依つて墮落させてゐたのである。……小作農業者はみづから其勞働者側に於ける必要不可缺なる消費基金の蓄積を妨ぐることに依つて、自己の利得を增大してゐた』と（五十八）。

（五十七）前揭書第一九及二〇頁。

（五十八）前揭チァーレス・ヘンリー・バーリ著『現行穀物條例の必要に關する問題の考察』第七七及六九頁。地主諸公は又、彼等が英吉利の名を以つて遂行せる反ジァコビン戰に對して『賠償』せしめたのみでなく、みづから莫大の富を積んだのである。『彼等の地代は十八年間に二倍し、三倍し、四倍し、そして或場合の如きは優に六倍した』（前揭書第一〇〇及一〇一頁）。

今日、勞働者の必要なる消費基金に對する直接の盜掠が、餘剩價値の形成隨つて又資本の蓄積基金の形成上、如何なる役割を演じつゝあるかは、例へば謂ゆる家內勞働（第一五章、第八節、(C)）に依つて判明せる所である。其れ以上の諸事實は、本篇進行中に之れを述べる。

有らゆる產業部門に於て、不變資本中勞働要具より成る部分は、事業の大小に依つて定まる一定の勞働者數に對して充分でなければならぬが、然し此不變資本部分は必しも常に使用勞働量の增加と同比例で增大するを要しないのである。或工場に於て、百人の勞働者が、八時間勞働を以て、日に八百勞働時間を供給するものとせよ。資本家にして若し此額を半分だけ增大しやうとすれば、彼れは新たに五十人の勞働者を雇入れ得る。されど斯る場合には、彼れは又、單に賃銀に就いてのみでなく勞働要具に就いても、新たなる一資本を前貸せねばならぬ。所が彼れは又、元の百人の勞働者を、八時間の代りに十二時間働かせることも出來る。然る場合には、既存の勞働要具で充分である。それは此場合たゞ、より急速に磨滅するだけのことである。斯くて勞働力のより大なる餘剩生產物併びに餘剩價値をば、不變資本を其れに比例して增大することなしに增大し得るのである。

抽出的產業(注)　例へば鑛業に於ては、原料は前貸資本の何等の部分をも成さぬ。勞働對象は此の場合には過去勞働の產物ではなく、自然が無料で贈與したものである。金屬粗鑛、礦石、石炭、石材等は卽ち其れである。此場合には、不變資本は殆ど

全く、勞働量の增大（例へば勞働者の晝夜交代）に善く堪へ得る勞働要具のみから成る。然るに生產物の分量並に價値は、他の事情に變化なき限り、使用勞働に正比例して增大する。生產の第一日に於る如く、此場合にも、本來の生產物形成者、隨て又資本の素材的要素の形成者たる、人間と自然とは互に協力する。勞働力の彈力性のお蔭で、蓄積の領域は不變資本を豫め增大するとなしに擴大したのである。

農業に於ては追加種子並に肥料を前貸せずしては耕地を增大し得ない。然しながら一度び此前貸をして了ふと、土地に對する純機械的加工でさへも生產物の分量に一の奇蹟的影響を及ぼすのである。斯くて從來と同數の勞働者が給付するより大なる勞働量は、勞働要具の上に新たなる前貸を爲すを要せずして、土地の豐富を增進する。此場合にも亦、新たなる資本の干涉なしにより大なる蓄積の直接源泉となるものは、自然に及ぼす人間の直接作用である。

最後に嚴密なる工業に於いては、勞働の各追加支出は、其れに相應せる、原料の追加支出を前提するものであるが、必ずしも勞働要具の追加支出を前提するものではない。而して原料生產工業及び農業は製造工業に對して其原料並に其勞働要具の原料を供給するものであるから、原料生產工業及び農業が、追加資本を供給せずして造出せる追加生產物は、又製造工業に取つても有利となるのである。

一般的結論。——資本は富の二箇の本來的形成者たる勞働力並に土地を自己に併合することに依り、自己の蓄積要素をば外見その資本自身の大小、換言すれば其資本の存在形態たる既に生產された生產機關の價値並に範圍によつて定められた限界を超えて擴大するを得せしむる一の擴張力を獲得する。

勞働の生產力增進するにつれて、一定の價値、隨つて又一定大小の餘剩價値が依つて表現される生產物量は增大する。餘剩價値率に變化なき時は勿論、それが低落する——其低落が勞働生產力の增進よりも徐々たるに過ぎぬ限り——場合と雖も、餘剩生產物の分量は增大する。故に餘剩生產物の、收入並に追加資本への分割に變化なき限り、資本家の消費は蓄積基金を減少せしめずして增大し得るのである。蓄積基金の比例的數量は、消費基金を犧牲としても增大し得る。なぜなれば、諸商品の價が低落する結果、資本家は消費基金が減じても從前と同量又はより

多量の享樂資料を受け得るからである。〃が、我々の既に見た如く、實質賃銀の增進する場合と雖も、勞働生產力の增進と並んで勞働者の價は低落し、隨て餘剩價値率は增進する。實質賃銀は決して、勞働生產力と同比例で增進するものではない。〃故に同一の可變資本價値は、より多量の勞働力、隨つて又、より多量の勞働を運轉する。〃同一の不變資本は、より多量の勞働要具、勞働材料、助成材等に依つて表現され、隨つて、より多量の生產物形成要素並に價値形成要素、卽ち勞働吸收物を供給する。〃故に追加資本價値に變化なき時は勿論、それが低落する場合と雖も、蓄積の促進は行はれる。曾に生產の規模が物質的に擴大するのみではなく、餘剩價値の生產は追加資本の價値に比べて一層迅速に增大するのである。

勞働生產力の發達はまた原資本卽ち既に生產行程內に存する資本に反作用する。作用中なる不變資本の一部は、機械などの如く、單に長期間內にのみ消費され、隨つて再生產され、換言すれば新たなる同種見本に依つて代置される所の勞働要具より成る。けれども此勞働要具の一部は年々死滅する、別言すれば其生產的機能の終極點に達する。卽ち其れは、年々その周期的再生產、換言すれば新たなる同種見本を以てする其代置の進行中に在る。所で、此勞働要具の生產方面に於て勞働生產力が擴大せる時は——而して勞働生產力は、科學及び生產技術の不斷の流動と共に絕え間なく發展するものである——、より有效にして其功程の割合により安價なる機械、道具、裝置等が舊來のものに代つて現はれる。舊來の資本は——現在使用中の勞働要具に於ける不斷の局部的變化は暫らく措き——より生產的なる形で再生產される。

他の不變資本部分たる原料並に助成材は、一年內に絕え間なく、そして農業より來たるものは多くは年々、再生產される。故に此場合、改良せられたる方法等の新たに應用される都度、それは追加資本と既に作用中の資本とに對して殆ど同時に影響する。化學の進歩する都度、それは單に有用物質の數を倍加し既知物質の利用法を多樣ならしめ、隨つて資本の增大と共に其放下範圍を擴大するのみではない。それは同時に、生產並に消費行程の排泄物を再生產行程の循環中へ投げ戻すことを敎へ、斯くして何等の豫備的投資なしに新たなる資本材を造り出す。勞働

力の緊張が增進するとだけに基く自然富利用の增大と同じく、科學及生產技術は、作用資本の一定大小より獨立せる、其資本の一擴張力を成すものである。其れは同時に、原資本中既に更新段階に入れる部分に反作用する。此の原資本部分は、其の舊形態の背後に行はれた社會的進步を、其の新形態に於て無料で併合する。勿論、生產力の斯る發達は同時に、作用中の資本の部分的價值低落を伴ふ者である。此價值低落が競爭の爲め痛烈に感ぜらるゝ限りは、主なる負擔は勞働者に懸つて來る。蓋し資本家は、勞働者搾取の增進の中に其損害賠償を求むるからである。

勞働は其消費せる生產機械の價值を、生產物に移轉する。他方に於て、一定の勞働量に依り運轉せらるゝ生產機關の價值及び分量は、勞働がより生產的となるに比例して增大する。故に同一量の勞働は其生產物に、常に同額の新價值を附加へるに過ぎぬが、それでも勞働が其れと同時に其生產物に移轉する舊資本價值は、勞働生產力が增進するにつれて增大するものである。

例へば一人の英國紡績工と支那紡績工とが、同じ能率を以て同時間數勞働するとすれば、雙方は一週間に同一の價值を造り出すであらう。雙方の造り出す價值は斯く同一なるに拘らず、一箇の素晴らしい自動機械を以て勞働する英人の週生產物價值との間には、非常なる差異が存してゐる。支那人が一斤の棉花を紡ぐ其同じ時間に於て、英人は優に數百斤の棉花を紡ぐ。支那人のに比べて數百倍に當る、諸々の舊價值の總額は、之等の舊價值が依つて新らしき有用形態に於て保存され、かくて新たに資本として作用し得る所の、英人の生產物の、價值を增大する。

フリードリヒ・エンゲルスは我々に敎へて曰く、『一七八二年、同年に先だつ三年間の羊毛の全收獲（英吉利に於ける）は、勞働者不足の爲、加工されずに藏置されてあつた。そして其れは、新たに發見された機械が助けに來て紡いで呉れなかつたなら、其まゝ藏置されてあらねばならなかつたであらう』（五十九）。機械の形で對象化した勞働は、固より直接には、一人の人間をも現出せしめなかつたことは事實である。然しながら其れは、より少數の勞働者をして比較的僅少の生きた勞働を追加することに依つて、羊毛を生產的に消費し其れに新價值を附加するを得せしめたのみでなく、又毛織絲等の形で其舊價值を保存するを得せしめたのである。其れはまた同時に、擴大したる羊毛再生產に對する手段と刺戟とを供給した。新價

値を創造しつゝ舊價値を保存するは、生きた勞働の天稟である。故に勞働は、其生産機關の作程範圍並に價値が增大し、隨つて其生産力の發達に伴ふ蓄積が行はれると共に、常に更新された形で、絶えず增大する資本價値を保存し不滅ならしめる（六十）。けれども勞働の斯る自然力は、其勞働の併合されてゐる資本の自己保存力なるかの觀を呈する。之れ恰も勞働の社會的生産力が資本の資格なるかの觀を呈し、資本家に依る餘剩價値の不斷の占有が資本の不斷の自己增殖なるかの觀を呈するのと同じである。商品の有らゆる價値形態が貨幣の形態として現はるゝ如く、勞働の有らゆる力は資本の力として現はるゝものである。」

（五十九）フリードリヒ・エンゲルス著『英吉利に於ける勞働階級の位置』第二〇頁。

（六十）正統派經濟學は、勞働行程並に價値增殖行程に就ての其分解の不充分なりし爲、再生産の斯る重大要素をば適當に捕捉せることはなかつた。之れは例へば、リカルドに於いて見得る所である。一例を擧ぐればリカルドは斯う言つてゐる。――生產力の變化は如何樣であらうとも、『一百萬人の勞働者は、工場に於いて常に同一の價値を生産する』と。之れは、右勞働者等の勞働の時間と能率程度とが一定せる場合には當を得てゐる。けれども其の事は、一百萬人の勞働者が其の勞働生産力の異なる爲、種々異なれる分量の生産機關を生産物に轉化し、斯くて其の生産物に於て種々異なれる價値量を保存し、隨つて彼等の供給する生産物價値が種々異なることを妨ぐるものではない（リカルドは其若干推論に於て、此事を看過してゐる）。序に一言する。リカルドは上例に依つて、使用價値（彼れは此場合、之を富又は物質的富と呼んでゐる）と交換價値との區別をジァン・バチスト・セーに聞明しやうとしたが無效であつた。セーは答へて曰く、『リカルドが、同じ一百萬人の勞働者は、より完全なる方法を應用する時はより多くの價値を造り出すことなしに二倍又は三倍大の富を造り出し得ると言つて、指示せる經濟學上の難關に就ては、我々が――當然なさねばならぬ如く――生産をば、自己の勞働、土地及び資本の生産的諸奉仕を與へて生産物を得る所の、一の交換として見る時に、斯る難關は最早存在しないのである。我々は此等の奉仕の媒介に依つて、世界に存する一切の生産物を受ける。所で……我々の生産的奉仕が生産と稱する交換に於て獲得する有用物の分量大なるに從ひ、我々は益々富裕であり、我々の生産的奉仕は益々大なる價値を有つのである』（ジァン・バチスト・セー著『マルサス君に與ふる書』巴里一八二〇年、一六八及一六九頁）。セーが說明しやうとした『難關』――セーに取つて存するのであつて、リカルドに取つて存するのではない所の――は斯うである。勞働生産力の增進せる結果、一定量の勞働に依つて造り出される使用價値の分量增大する場合、何故その使用價値の價値は增殖せざるか？答へて曰く、願くば使用價値を交換價値と呼べ、然らば右の難關は解決されると。交換價値とは、何等かの樣式で交換と結合してゐる一物である。故に生産を生産物に對する勞働及び生産機關の交換と名づくる時は、生産の供給する使用價値

大なるに從つて我々は益々多くの交換價値を受くるものなるとは、水の如く鮮明な事實である。別言すれば、一例として一日の勞働が靴下製造業者に供給する使用價値卽ち靴下が多ければ多き程、彼れは益々靴下に就て富裕である。然るにセーは突如として思へらく、靴下の『分量大なると共に』、其價格（之れは勿論、交換價値とは沒交渉の者である）は低落する。『なぜならば競爭は、彼等（生產者）をして生產物を其費用通りの價で提供するを餘儀なからしむるからである。』けれども資本家が商品を其費用通りの價格で販賣する時、利潤は果して何處より生じ來たるか？だが心配するな。セーは生產力の增進する結果各人は同一等價に對して以前の靴下一足の代りに、今では二足を受けると言明してゐる。斯くて、彼れが到達する所の結果は、彼れが反駁しやうとしたリカルドの命題と丁度同じである。斯樣に思ひ切つて思想上の努力をした後に、彼れは意氣揚々と次の言葉を以て、マルサスに呼び掛けてゐる。――『君よ、之れは、其れに依らずしては經濟學上の最大諸難題、及び殊に富は價値より成るに拘らず、一國民の生產物の價値減ずる場合如何にして其國民はより富裕たり得るかてふ問題を解決すると不可能なりと、予の斷言する所の適說である』（前揭書第一七〇頁）。英吉利の一經濟學者は、セーの『マルサス君に與ふる書』の中で、之と類似の詭計に就て述べて曰く、『斯る虛飾の言振りは、總じて、セー君が好んで自己の學說と呼び、既に其れが「歐羅巴の種々なる部分に於て」敎授せられたる如く、ハートフォードに於ても之れを敎授せよと熱心にマルサスに慫慂する所のものである。セーは曰く「貴下にして若し之等すべての命題に於て矛盾ある所を發見せば、之等の命題に依つて表章せらるゝ事物を考察せよ。然らば予は、之等の命題が貴下の目に頗る單純且つ合理的のものとして映ずるなるべきを信じ得る」と。確かに其通りである。而して件の行程の結果、之等諸命題は、獨創的なるものとしての外、他の有らゆるものとして現はれるであらう』（匿名者著『最近マルサス君の唱道せる需要の性質に關する諸原理に就ての研究』第一一六及一一〇頁）(24)。

資本が增殖すると共に、充用資本と消費資本との差額は增大する。言を換へて云へば、建物、機械、排水管、勞役獸、各種の裝置等の如き、不斷反覆される生產行程に於て或は長期或は短期間に、其全範圍に亙つて作用する所の、別言すれば只漸次にのみ磨滅し、卽ち其價値を只斷片的にのみ喪失し、隨つて又それを只斷片的にのみ生產物に移轉しつゝ一定の利用效果の獲得に役立つ所の、勞働要具の、價値量並に物質量は增大するのである。此勞働要具が生產物に價値を附加することなしに生產物形成要素として役立つ程度、換言すれば全體として充用され而かも只部分的にのみ消費される程度に比例して、其れは曩に述べた如く、諸種の自然力、卽ち水や蒸氣や、空氣や、電氣などの場合と同樣の無料奉仕を爲る。過去勞働の斯る無料奉仕は、それが生きた勞働に依つて捕捉され氣化される時、資本蓄積の規模增大する

につれて蓄積されてゆくのである。

過去勞働は常に資本に假裝され、換言すれば、ＡＢＣ等の勞働の被働態は非勞働者Ｘの能働態に假裝さるゝが故に、ブルヂョア並に經濟學者等は過去勞働の奉仕に對して充分の賞讃を與へてゐる。蘇格蘭の天才マカロックに依れば、斯る奉仕は特殊の報酬（利子、利潤）をさへ受くべきものである（六十一）。斯くて、生きた勞働行程に於て生產機關てふ形態の下に共同作用する過去勞働の、不斷に增大する重要性は、勞働者自體――右の勞働が其過去に於ける不拂勞働である所の――から切離された右の勞働の姿容、卽ち其資本姿容に歸せられる。資本制生產の實地の代表者及び其思想上の代辯者等は、奴隷所有者が勞働者その者を其奴隷たる性質から分離して考へる力を有たぬ如く、生產機關をば、今日それに附著してゐる、矛盾せる社會的粉裝から分離して考へる力を有たないのである。

（六十一）シーニョアが特許を『節慾の賃銀』に歸した遙か以前に、マカロックは之を『過去勞働の賃銀』に歸してゐた。

勞働力搾取の程度が一定せる時は、餘剩價値の分量は、同時に搾取される勞働者の數に依つて定まる。そして此の勞働者數は――種々なる比例に於てなりとは云へ――資本の大小に照應するものである。故に累次的蓄積に依つて資本の增殖すること大なるに從ひ、消費基金と蓄積基金とに分割される價値總額も亦益々增大する。されば資本家は益々安樂に生活して、而も同時に益々『克己』することが出來る。而して最後に、生產の一切發條は、前貸資本額の增大するにつれて生產の規模擴大するに從ひ、益々强烈に作用する。

（五）謂ゆる勞働基金

資本は何等の固定數量にあらずして、收入及び追加資本への餘剩價値分割の變化と共に絕えず動搖しつゝある、社會的富の伸縮自在な一部であるとは、本書の研究中に判明した所である。我々は更らに、作用資本の大小が一定せる場合にも、其れに併合される勞働力、科學、及土地（經濟學上、土地とは人間の助力なくして天然自然に存する一切の勞働對象を指す）は、一定限界內に於て資本に自己の大小より獨立せる一の作用範圍を許す所の、資本の伸縮自在な諸力たるものなるを見た。右の研究に於て我々は、同一資本量の作程を種々樣々ならしむる、流通行程上の一

切事情を問題外に置いた。而して我々は資本制生産の設くる制限、卽ち社會的生産行程の純原生的なる一姿容を前提するものなるが故に、現存の生産機關及び勞働力を以て直接且つ組織的に實現し得る一切のより合理的なる結合を問題外に置いた。

正統派經濟學は本來、社會的資本をば固定の作程を有する一の固定大小と解するを好んでゐた。が、此先入的觀念は、かの、十九世紀に於けるプルヂョア的常識の無味乾燥的に衒學多辯の神託者なる、俗物の元祖ジェレミー・ベンタムに依つて始めて信條に固められた(六十二)。ベンタムの哲學者間に於けるは、尙マーチン・タッパーの詩人間に於けるが如くである。雙方とも只英吉利に於てのみ造られ得たのである(六十三)。ベンタムの信條に依つて、例へば生産行程の突發的伸縮の如き其行程の最平凡なる現象は勿論、甚だしきは蓄積でさへも、全く會得し能はざるものとなる(六十四)。

(六十二)殊にジェレミー・ベンタム著『犯罪及刑罰論』エティエンヌ・デュモン佛蘭西譯、第三版、巴里、一八二六年刊、第二卷、第四篇、第二章(沿)參照。

(六十三)ジェレミー・ベンタムは純英國的な一現象である。我が哲學者クリスチァン・ウオルフをも除かずに考へて、如何なる時代、如何なる國に於ても、此上なき粗末な平凡事が爾かく自己滿足的に巾を利かしたことはないのである。有用性原理は毫もベンタムの發見にかゝるものではなかつた。彼れは只、エルヴェシス其他十八世紀に於ける佛蘭西の學者等が俊敏に語つた所を、痴鈍に再生產したに過ぎぬ。例へば、或犬に取つて何が有用であるかを知らんとすれば、我々は犬の性質を究めねばならぬ。此性質自體は『有用性原理』から推究し得るものではない。此問題を人間に應用して、人間の有らゆる行爲、運動、關係等を有用性原理に從つて判斷しやうとすれば、先づ人間性一般を研究し、次に各時代に於て歷史的に變更された人間性を研究せねばならぬ。ベンタムは毫も躊躇するところない。彼れは此上なく素朴な無味乾燥を以て、近代の素町人殊に英吉利の素町人をば標準的人間と假定してゐる。此奇異なる標準的人間並に其世界に取つて有用なる物は、それ自體に於て有用なるものである。彼れは次に此尺度に依つて、過去、現在及將來を判斷してゐる。一例を擧ぐれば、基督教は、刑法典が法律的に制裁する罪行を宗教的に禁ずるが故に、『有用』である。藝術批評は、尊敬すべき人々がマーチン・タッパーに就て樂しむを妨ぐるが故に、『有害』である云々。『筆とらぬ日ある勿れ』てふとを座右の銘とする此勇ましき男は、右の如きガラクタを以て山なす典籍を充たしたのである。予に若し友人ハインリヒ・ハイネの勇あらば、予はジェレミー君をプルヂョア的愚鈍の天才と名づける所だが。

(六十四)『經濟學者は、一定量の資本及び一定數の勞働者をば、劃一の力あり又は劃一の能率を以て作用する』生産機關と云ふ風に考へ勝ちである。……商品は生産の唯一の働因なりと主張する人々は、生産は決して擴大し得るものにあらざる旨を證明する。なぜならば、斯る擴大に取つて不可缺なる條件として、食物、原料及び道具が豫め增大され居るを要するからである。此事は事實上、如何なる生産增大も其豫備增大なしには行はれ得ないと云ふと、換言すれば一切の生産增大は不可能だと云ふとに歸著する』(サムエル・ベーリー著『貨幣及び其轉變』第二六及七〇頁)。ベーリーは問題の信條を、主として流通行程の立場から批判してゐる。

此信條は、ベンタム自身並にマルサス、ジェームス・ミル、マカロック等に依つて、辯護上の目的の爲、殊に資本の一部たる可變資本即ち勞働力に轉化し得る資本を一の固定大小として示す爲に利用された。可變資本の物質的存在、換言すれば、可變資本が勞働者に取つて代表する生活資料の分量、卽ち謂ゆる勞働基金は、社會的富の、自然鎖に依つて限界された超ゆべからざる特別部分に假作された。社會的富の中、不變資本、又は之を物質的に言現はすならば生産機關として作用すべき部分を運轉するには、一定量の生きた勞働が必要である。此勞働量は工藝上一定してゐる。然し此勞働量を流動せしむるに要する勞働者數は一定して居らず、(其れは個々勞働力の搾取程度に準じて變化するものであるから)、また此勞働力の價格も一定して居らず、僅に此價格の而も極めて伸縮自在なる最低限界が一定して居るに過ぎぬ。右の信條の根柢に横はる事實は左の通りである。――一方に於て勞働者は、非勞働者の享樂資料と生産機關とへの、社會的富の分割に就て容喙してはならぬ。他方に於て彼れは、僅に幸運なる例外的場合に於てのみ、富者の『收入』を犧牲として得られる所謂『勞働基金』を期待し得るに過ぎぬのである(六十五)。

(六十五)ジョン・スチュアート・ミルは其著『經濟原論』中に言ふ。――『眞に疲勞的にして眞に厭はしき勞働は、他の勞働以上に著く支拂はれずして、却つて殆ど常に、總ての勞働中最惡の支拂を受けてゐる。……仕事が厭はしければ厭はしき程、最低の報酬を受くることは益々確かである。……辛苦と報酬とは、公正に按排された總ての社會に於て見られるであらう如く、相互正比例しないで、却つて一般に逆比例してゐる。』誤解を避くる爲に一言して置く。――ジョン・スチュアート・ミル等の如き人々は、其著き經濟學上の信條と其近世的傾向との矛盾を有するが故に非難せらるべきであるとしても、彼等を俗學的經濟學的な辯護者どもと同じ部類に混入するは全く不當であらう。

勞働基金の資本制的制限を其社會的自然制限に假作するとが、何んと云ふ馬鹿馬鹿しい重語を生ずるかは、殊にフォーセット教授に於て見得る所である。彼は

曰く『一國の流通資本(六十六)は、其國の勞働基金である。故に、各勞働者の受くる平均貨幣貸銀を算出し様とすれば、我々は只、此資本の額を勞働人口の數で割りさへすれば宜い』(六十七)。卽ち言を換へて云へば、先づ實際に支拂はれた個々の勞銀を合算し、然る後に、合計額は神と自然とに依つて確定された『勞働基金』の價値總額を成す者だと主張するのである。最後に、斯くして得た總額を勞働者の頭數で割ると、今度は各勞働者が夫々平均幾許を受け得るかを發見することが出來る。之れは非常に狡猾な遣口である。此遣口は、フォーセット君をして、同時に次の如く言はしむるを妨げないのである。——『英吉利に於て年々貯蓄される富の總額は、二箇の部分に分割される。一は本邦産業を維持すべき資本として使用され、他は諸外國に輸出される。……我國に於て年々貯蓄される富の一部、而も多分大ならざる一部のみが、本邦産業に放下されるに過ぎぬ』(六十八)。斯くて、英國勞働者から等價なしに竊取せる逐年增殖しつゝある餘剩生産物の、大部分は、英吉利に於てなく諸外國に於て資本化されるが、斯く輸出される追加資本と共に又神とベンタムとに依つて發明された『勞働基金』の一部も輸出されるのである(六十九)。

(六十六)銀橋大學經濟學教授ヘンリー・フォーセット著『英國勞働者の經濟的位置』倫敦、一八六五年刊、第一二〇頁(25)。

(六十七)予は玆で、可變資本、不變資本なる範疇は予に依つて始めて使用されたものであることを、讀者に注意して置きたい。アダム・スミス以來の經濟學は之等の範疇に含まる本質的差別を、流通行程より生ずる固定資本及び流通資本てふ單なる形式上の差別とゴチヤ混ぜにしてゐる。之に就ての詳細は、本書第二部(第二卷)第二篇に掲げる。

(六十八)フォーセット前掲書、第一二三及一二二頁。

(六十九)單に資本のみでなく、勞働者も亦國外移住の形で、年々英國から輸出されると言ひ得るであらう。されど本文に於ては、國外移住者等が携帶してゆく彼等の財産は問題となつて居らぬ。之等の移住者は大抵、勞働者ではない。小作農業者の倅が其少なからざる一部を成してゐるのである。年々營利の爲め外國に輸出される追加英國資本の年々行はるゝ蓄積に對する比例は、年々行はるゝ國外移住の、年々生ずる人口增殖に對する比例に較べて遙かに大きい。

第二十三章　資本制蓄積の一般法則

（一）資本の組成に變化なき時に於ける蓄積に伴ふ勞働力の需要增加

本章に於ては、資本の增殖が勞働者階級の運命に及ぼす影響を研究する。此研究に於ける最重要因子は、資本の組成(1)並に此組成が蓄積行程中に受くる變化これである。

資本の組成は、二重の意義に解すべきである。價値の方面からすれば、其れは、資本が不變資本即ち生產機關の價値と、可變資本即ち勞働力の價値換言すれば勞銀總額とに分割される比例に依つて定まる。生產行程に於て作用する儘の素材の方面よりすれば、總ての資本は生產機關と、生きた勞働力とに分割される。此組成は、一方に於て使用生產機關と、他方に於て其使用に要する勞働量との間の、比例に依つて定まる。予は前者を資本の價値組成(2)と名づけ、後者を資本の技術的組成(3)と名づける。此雙方の間には密接なる交互關係が存してゐる。予は之れを表

彰する爲に、資本の價値組成をば、それが資本の技術的組成に依つて決定され其諸變化を反映する限り、資本の有機的組成(4)と名づける。予が簡單に資本の組成と云ふ時には、いつも此の有機的組成を指すのである。

一定の生產部門に放下される幾多の個々資本は、夫々多かれ少なかれ異つた組成を有してゐる。之等諸資本の個々の組成の平均に依つて、我々は該生產部門に於ける總資本の組成を得る。最後に我々は、有らゆる生產部門に於ける諸々の平均組成の總計平均に依つて、一國に於ける社會的資本の組成を得る。而して、以下問題となるものは、終局に於て、この社會的資本の組成のみである。

資本の增殖は、其の可變的部分即ち勞働力に轉化される部分の增殖を含む。追加資本に轉化する餘剩價値の一部は、常に、可變資本即ち追加勞働基金に再轉化されねばならぬ。他の事情に變化なき場合、資本の組成が不變であり、換言すれば、一定量の生產機關即ち不變資本を運轉するに常に同一量の勞働力を要すると假定すれば、勞働の需要並に勞働者の生存基金は資本の增殖と同比例を以て增大し、資本の增殖急速なるに從つて、益々急速に增大するとは明かである。資本は年々一の

餘剩價値を生產し、此餘剩價値の一部は年々原資本に追加される故に、而して此追加量その者は既に作用してゐる資本が擴大すると共に年々增大するものなるが故に、最後に、例へば新たに展開せる社會的需要に基く新市場卽ち新たなる放資部面の開始等の如き致富衝動に對する特別刺戟のもとに、資本と收入とへの、餘剩價値又は餘剩生產物の分割が單に變化するだけで蓄積の規模は突然擴大し得るものなるが故に、資本の蓄積要求は勞働力又は勞働者數の增大を、卽ち勞働者に對する需要は其供給を凌駕するを得隨つて勞銀は昂騰するを得るのである。

而して之れは又、上記の假定が變化なく繼續する時は、結局事實となつて現はれ來らねばならぬものである。年々その前年に於けるよりも多數の勞働者が使用されるゆゑに、蓄積の要求が通例の勞働供給を超過し始め、隨つて勞銀昂騰の生じ來たる、限點に早かれ晩かれ到達せねばならぬ。之れに就ての怨嗟は、全十五世紀及び十八世紀の前半中英吉利に於て揚つた。さりながら、賃銀勞働者が依つて自己を維持し增殖する、多かれ少なかれ有利なる狀態は、資本制生產の根本性質を毫も變更するものではない。單純なる再生產が絕えず資本關係その者、卽ち一方に

は資本家、他方には賃銀勞働者を再生產する如く、擴大したる規模に於ける再生產は、擴大したる規模に於ける資本關係、卽ち一方の極には、より多くの資本家又は、より大なる資本家、他方の極にはより多くの賃銀勞働者を再生產する。勞働力は絕えず價値增殖要具として資本に併合されねばならず、資本より解放され得ないものであつて、資本に對する其隷屬は只、それが自己を販賣する相手の個々資本家の變化に依つてのみ隱蔽されるに過ぎぬものであるが、此勞働力の再生產は事實上資本自體の再生產の一要素を成すものである。故に資本の蓄積は、プロレタリアの增殖である(七十)。

(七十)拙著『賃銀勞働と資本』伯林版、一九〇七年刊、第二八頁。『民衆の壓迫が同一なる時は、一國の有するプロレタリアの數大なるに從つて其國は益々富裕である』(コラン著『經濟學、革命と所謂社會主義者の理想鄕との源泉』巴里、一八五七年刊、第三卷、第三三一頁)(6)。經濟上、『プロレタリア』とは、『資本』を生產し增殖し、そしてペクールの所謂『資本君』の價値增殖に對して不用となるや否や放逐される所の賃銀勞働者を指すに外ならぬ。『原始森林の病弱なるプロレタリア』はロッシアー式な美しい空想である。原始森林に棲息せる者は、原始森林の所有者であつて、猛々がすると同樣、自由に原始森林を

自己の所有として取扱ふ。故に彼はプロレタリアではない。彼れが原始森林を利用するのでなく、原始森林が却つて彼れを利用する時にのみ、彼れはプロレタリアたるであらう。其健康狀態に就ては、彼れは單に近世プロレタリアのみでなく、又歴史的及び標準的上流階級との比較にも善く耐へるのである。だが、ウォルヘルム・ロッシアー君の謂ゆる原始森林とは、多分其同線なるリューネブルヒの叢林のことであらう。

正統派經濟學は此事實を充分に捕捉し、曩に述ぶる如くアダム・スミス、リカルド等の如きは蓄積をば、誤つて生產的勞働者に依る、資本化した全餘剩生產物部分の消費、換言すれば追加勞働者への其轉化と同一視した程である。

既に一六九六年、ジョン・ベラーズは言つてゐる。——『若し或人が十萬エーカーの土地と、十萬磅の貨幣と、十萬頭の家畜とを有し、而も一人の勞働者をも有せずとすれば、此富者はみづから勞働者たるの外果して何たるであらうか？而して勞働者は人々を富裕にするが故に、勞働者多ければ多き程、富者は益々多いであらう。……貧者の勞働は富者の鑛山である』(七十一)と。

(七十一)前揭ジョン・ベラーズ著『產業大學設立案』倫敦、一六九六年刊、第二頁。

バーナード・ド・マンデウィルも亦十八世紀の初め次の如く言つた。——『財產が充分確保されてゐる所にあつては、金錢なしに生活するは、貧民なしに生活するよりも容易であらう。なぜと云つて、貧民なき時果して何人が勞働するであらうか？……貧民は饑餓より保護せらるべきであるが故に、彼等は貯蓄に値する何物をも受けてはならぬ。若し此處彼處に於て、最下級民の一人が非常なる勤勉をなし、食ふ物も食はないやうにして、其育つた地位以上に身を高める時、何人も彼れを妨げてはならぬ。否、儉約を守るは、社會に於ける總ての個人、總ての私家族に取つて、最も利口な仕方であることは、拒み難き所である。されど貧民中の大部分が殆んど決して怠惰なることなく、而も常に其得る所を支出せんことは、總ての富裕國民に取つて有利なる事である。日々の勞働に依つて其生計を營む人々は、……其欲望以外に自己の勤勞を刺戟する何物をも有たない。而して此欲望は、之を緩和するは得策であるが救治するは愚策である。勞働者を勤勉ならしめ得る唯一の物は適度なる金錢額である。蓋し餘りに少額な金錢は彼れの氣質に從つて、或は彼れを意氣沮喪せしめ或は自暴自棄に陷らしむる如く、餘りに多額な金錢は彼れを傲慢懶惰ならしむるからである。……以上說く所に依り、奴隸の存在を許さゞる自由

國に於いて、最確實なる富は勞働貧民の多人數てふ點に存してゐる。蓋し彼等貧民は陸海軍に對する竭くる所なき供給源泉である上に、彼等なくんば何等の享樂も存し得ざるべく、一國の如何なる生產物も之れを利用するを得ないであらう。社會（言ふ迄もなく非勞働者より成る所の）を幸福にし人民を其最貧弱なる境遇の下により安易ならしむるには、人民の多數が貧乏なる如く又無知でなければならぬ。知識は我々の願望を擴大し倍加する。而して人の願望する所の物少數なるに從ひ、其必要品の供給は益々容易となり得るのである』（七十二）。

（七十二）バーナード・ド・マンデウヰル著『蜜蜂物語』第五版、倫敦、一七二八年刊、評註、第二一二、二一三及三二八頁（6）。『節度ある生活と不斷の勞働とは、貧者に取つては、合理的幸福（著者は出來得る限り長時間の勞働日と、出來得る限り僅少なる生活資料との事を斯く言つてゐるのだ）、國家（卽ち地主、資本家、並に其政治上の高官及び代理人）に取つては、富と强力とへの直接の通路である』（匿名者著『貿易及び商業論』倫敦、一七七〇年刊、第五四頁）。

正直にして頭腦明晰なるマンデウヰルの尙理解せざる所は、蓄積行程その者の機構が資本を增殖すると共に『勞働貧民』、換言すれば自己の勞働力を、增大しつゝある資本の、增大しつゝある價値增殖力に轉化し、正にそれに依つて資本家に於て人格化せる自己の生產物に對する隷屬關係を永久不滅のものとせねばならぬ所の賃銀勞働者の數を增殖するてふこと、是れである。此隷屬關係に就て、サー・フレデリック・モルトン・イーデンは其著『貧民の狀態、又は英國勞働階級史』中に曰く『我國に於ける土地の自然的產物は、我々の生活に充分でないことは確かである。我我は過去に於ける何等かの勞働の結果としてゞなければ、衣食住することは出來ぬ。少なくとも社會の一部は、撓まず勞働せねばならぬ。……他に尙、「紡がず働かざれ」ども產業の生產物を支配し得る人々がある。されど彼等が斯く勞働より免脫さるゝは、一に文明及秩序のお陰である。……彼等は特に、個人は自己勞働以外の種々なる方法に依つても財產を獲得し得るてふことを公認した社會制度（7）の產物である（七十三）。獨立の財產を有する人々は……決して自己の卓絕せる能力に依つてゞはなく、殆ど全く……他人の勤勞に依つて……其卓絕せる利便を得たのである。社會の富裕部分を勞働部分から區別する者は、土地又は貨幣の所有でなくて勞働に對する支配である。……此（イーデンの贊成せる）計劃は、自己の爲に働く

人々に對する充分な（然し決して過分ではない）影響並に權威を有產者に與へ、斯る勞働者等をば、劣等又は奴隸的な狀態にてなく、人間性及其性質を知る總ての人人が勞働者自身の愉快の爲に必要であると認めるやうな、安易にして且つ自由な る隷屬狀態に置くであらう』（七十四）。序に言つて置くが、サー・フレデリック・モルトン・イーデンはアダム・スミスの門弟中、十八世紀に於て顯著なる功績を擧げた唯一者である（七十五）。

（七十三）イーデンは、全體『社會制度』（？）なるものは何の產物であるかと、問ふべき所であつた。彼は法律的幻想の立場から、法律を物質的生產事情の產物と見ないで、反對に生產事情を法律の產物と見てゐる。リンゲはモンテスキューの幻想的な『法の精神』をば『法の精神は所有なり』てふ一語を以て顚覆した。

（七十四）前揭イーデン著『貧民の狀態、又は英國勞働階級史』第一卷、第一篇、第一章、第一及二頁、並に序第二〇頁。

（七十五）讀者が若し予にマルサス——其『人口論』は一七九八年に公刊された——を想起せしむるならば、予は讀者に、此書は其最初の形に於てはデ・フォー、サー・ジェームス・スチュアート、タウンセンド、フランクリン、ヲレース等からの、學生的に淺薄にして且つ僧侶流に書き換へられた剽竊に外ならぬものであつて、僅か一箇の獨創的命題をも含むものでないことを想起せしめる。此の書が集めた大なる人氣は、全く黨派的利害から生じたものである。佛國西革命は英國に於いて、熱心なる辯護者を見出したのであつた。『人口の原理』は十八世紀中に徐々と作り上げられ、次いで大なる一社會範圍の眞中に於て鐵鼓と喇叭とを以てコンドルセー等の所說に對する無缺の反對毒として宣言されたものであるが、此原理は英吉利の寡頭政治に依り、人間進步に對する一切願望の大なる破壞者として歡呼を以て迎へられた。自己の成功に驚愕したマルサスは、次いで皮相的に蒐集せる材料を古き型に詰込み、更らに新たなる、だが、マルサスが發見したのでなく只併合したに過ぎぬ所の、材料を追加することに著手した。序に一言して置く——マルサスは英吉利國教會の僧侶であつたけれども、獨身に就ての修道院的な誓ひを立てゝゐた。盖し此宣誓は新教的鄙橋大學校友員たるを許さず。結婚する者は校友員たるを已むべし』（『鄙橋大學委員會々報』第一七二頁）。此事情は、僧侶の獨身に就ての加特立教的命令をかなぐり捨て、勞働者に向つて『人口の原理』を說法しながら到る處眞に不體裁極まる程度にまで人口增殖に貢獻せるほど『生めよ殖えよ』を其格別の聖書的使命として主張した他の新教僧侶等から、マルサスを有利に區別するものである。經濟的な假裝された原罪、アダムの林檎、『差迫つた慾情』、僧侶タウンセンドが活潑に言つてゐる『キュピッド神の箭を鎗らせやうとする故障』——斯る微妙な問題が、新教神學或は寧ろ新教々會の人人に依つて獨占されたこと、又獨占されてゐるとは、特徵的な現象である。獨創的にし

て利發なる加特立僧オルテスを除けば、人口問題論者は大抵みな新教の僧侶である。例へば、此問題に關する小ツぽけなヘボ僧侶學者は暫く措き、近世人口論の全部を說き竭してゐる『動物組織論、ライデン、一七六七年刊』(此書は人口問題に關するケネーと其門弟老ミラボーとの間の一時的論爭から其觀念を受けたものである)の著者ブルックナー(8)、それから僧侶ヲレース、僧侶タウンセンド、僧侶マルサス及び其門弟なる大主教トマス・チャルマース等が其れである。

經濟學は最初ホッブス、ロック、ヒューム等の如き哲學者、トマス・モルス(モーア)、テンプル、サリー、ド・ウキット、ノース、ロー、ヴァンダリント、カンチロン、フランクリン等の如き實業家並に政治家、及理論方面に於ては特に又最好結果を以て、ベテー、バーボン、マンデヴィル、ケネー等に依つて研究された。十八世紀中半に於ても尙、當時に於ける顯著なる一經濟學者であつたタッカーは、其金錢上の研究に携はれることを辯解してゐた。其の後——而して又實に『人口の原理』と共に——新教僧侶の時が鳴つた。人口を富の基礎として取扱ひ、アダム・スミスと同じく大びらに僧侶の敵たることを標榜したベテーは、宛ら此の拙作的お節介を豫感せるものゝ如く言つてゐる。——『法律家の爲す所最小なる時、法律は最も繁榮する如く、僧侶の苦行する所最大なる時、宗教は最も繁榮する』と。そこで彼は新教僧侶等に向つて、若し諸君が使徒保羅に從はず、獨身に依り『苦行』するを欲しないならば、『現存寺祿が吸收し得る以上の教職者を造り出す勿れ。換言すれば、英國及び蘇格蘭に於て一萬二千の教職口ある時、二萬四千名の教職者を造り出すは得策でない。蓋し斯る場合には、教職を得ざる一萬二千人は、他に活計の道を求むるなるべく、其れに就ては、人々に向つて、教職にある一萬二千人は諸君の靈を毒し又は飢えしむるものである、天國への途上に於て諸君を迷はすものであると說きつけるより容易なる方法はないからである』と忠告してゐる(ベテー著『租稅論』倫敦、一六六七年刊、第五七頁)。當時の新教僧徒に對するアダム・スミスの立場の特徴は、左の事實が示す通りである。『法學博士アダム・スミスに與ふる書。其友デヴイッド・ヒューム』(9)の生死及哲學に就て。基督教徒と稱する人民の一人著。第四版、牛津、一七八四年刊』

に於てノアキック市の監督僧ドクトル・ホーンは、アダム・スミスがストレーハンに與へた公開狀の中で『其友デヴイッド(卽ちヒューム)を永久に記念した』ことや、『ヒュームが臨終の際にルシアンやホイストを樂んだ』旨を世に知らせたことや、甚だしきはヒュームに就て『予は彼れを、其存命中にも又死後に於ても常に、人間の脆弱性が許す範圍内に於て、完全に賢明にして有德なる人物の理想に近いものと見做してゐた』と書いたことなどの理由に依つて、アダム・スミスを難じてゐる。彼れは憤然として叫んで言ふ。——『宗教と稱する一切のものに對して救治すべからざる反感を抱いてゐたやうに見える人、而して其全力を盡して人々の間から宗教の精神を破壞し、抑壓し、剔抉し、能ふべくんばもはや其名稱さへも記憶に存せしめざらんと努めた人の品性及行動をば「完全に賢明にして有德」なるものとして我々に示さるゝは當を得たことであらうか』と(前揭書第八頁)。『されど眞理の愛好者よ、落膽する勿れ。無神論は永く存續し得る者ではない』

（前揭書第一七頁）。アダム・スミスは『無神論を國中に傳播する（卽ち「其道德感情論」に依つて）と云ふ恐ろしい惡意を抱いてゐる。……我々は君のたくらみを知つてゐる。大體に於て、其れは巧い考ではあるが、今度は成功覺束ないと予は信ずる。君はデヴイッド・ヒューム君の實例に依り我々を說服して、無神論は元氣なき者に對する唯一の亢奮劑であり、死の恐怖に對する適當なる解毒劑である旨を信ぜしめやうとしてゐる。君よ、廢墟中のバビロンを笑ひ、紅海に於ける滅亡の爲め心かたくなとなれるパロ王を祝せよ！』（前揭書第二一及二二頁）。アダム・スミスの同窓中の或正統基督教徒は、スミスの死後書いて曰く『ヒュームに對する彼れの友情は：彼れをして基督教徒たらしむるを妨げた。……彼れは自分の好いた正直な人々に會ふと……其語る殆ど總てを信じてしまふのが常であつた。若し彼れが偉大なる創意的天文學者ホロックスの友であつたなら、彼れは澄み渡る上天に懸つた月が、雲の作用に依らずして往々見えなくなるを信じたであらう。……彼は其政治上の主義に於ては、共和論に接近してゐた』（ジェームス・アンダーソン著『蜜蜂』エヂンバラ、一七九一年——九三年刊、第三卷、第一六四及一六五頁）[10]。

僧侶トマス・チャルマースは、アダム・スミスに對して、彼れは全くの惡意から、『不生產的勞働者』てふ範疇を專ら新敎僧侶等の爲に——彼等は主の葡萄園に於て祝福されたる勞働に從事し居るにも拘らず——發明したものであらうと疑を懸けてゐる。

上段假定した勞働者に有利なる蓄積條件のもとに、資本に對する勞働者の隷屬關係は、堪え得べき、又はイーデンの所謂『安易にして自由なる』、諸形態を取る。此關係は資本が增大するに從つて、益々緊密となるのではなく、益々擴大し來たるに過ぎぬのである。換言すれば、資本の搾取並に支配部面は、資本みづからの範圍及其隷屬者等の數の增大すると共に擴大し來たるものに過ぎぬ。益々增大し絕えず追加資本に轉化される彼等自身の餘剩生產物中、從來に比べてより大なる一部は、支拂要具の形で彼等の手元へ戻つて來るので、彼等は其享樂の範圍を擴大し、衣類、家具等に對する消費基金をより充分に具へ、又少額の準備金を貯へることが出來る。衣食及待遇の改善並に所有品(1)の增大は、奴隷の隷屬關係及搾取を撤回せざる如く、又賃銀勞働者の隷屬關係及搾取を撤回する者ではないのである。資本の蓄積に基く勞働價格の增騰は、事實上たゞ、勞働者自身の鍛へ造つた黃金の鎖が、其長さと重みとの爲め自己の緊張に弛みを許すてふことを語るものに外ならぬ。此の問題に就ての論爭に於て、論者は多くの場合根本要件たる資本制生產の特徵を看過した。資本制生產に於て勞働力の購買せらるゝは、其奉仕又は生產物に依つて購買者の個人的欲望を滿足せんが爲ではない。彼れの目的は、其資本の價值を增殖するに在る、卽ち彼れが其代價を支拂ふ分以上の勞働を含み、隨つて彼れに

は何等の費用かゝらず而も其販賣に依つて實現される一の價値部分を含む商品を生產するに在る。餘剩價値の生產卽ち貨殖は、資本制生產方法の絕對的法則である。勞働力は、生產機關を資本として保存し、自己の價値を資本として再生產し不拂勞働に於て追加資本の一源泉を供給する限りに於てのみ、販賣可能のものである（七十六）。

（七十六）第二版註――『されど工場勞働者と農業勞働者との使用限界は同一である。卽ちそれは、彼等の勞働生產物に依り雇主が利潤を實現するに就ての可能てふとである。貸銀率が高く雇主の利得が資本の平均利潤以下となる時は、彼れは勞働者の使用を止めるか、又は勞働者が貸銀低減を承諾するてふ條件のもとにのみ之を使用するであらう』（前揭ジョン・ウエード著『中流階級及び勞働階級史』第二版、倫敦、一八三五年刊、第二四一頁）。

故に勞働力販賣の條件は、勞働者に對する其有利の程度如何を論ぜず、勞働力を不斷に再販賣するの必要と、富を絕えず擴大せる規模に於て資本として再生產する事とを含む。我々の既に見た如く、勞銀は其性質上常に、勞働者側に於ける一定量の不拂勞働の供給を含む。勞働の價格低落して勞銀昂騰する場合等は暫く措き、勞銀の增大は高々、勞働者の給付せねばならぬ不拂勞働の分量減少を意味するに止まる。此分量減少は決して、資本制そのものを危險ならしむる限點に達し得るものではない。勞銀率に就て激烈なる衝突――斯くの如き衝突の場合、大體に於て主人は常に主人たるを失ふものに非ざるは、アダム・スミスの既に示した所である――行はるゝ場合は別として、資本の蓄積に基く勞働價格の昂騰は、左の二場合中のいづれかを前提するものである。

(一) 勞働價格の騰貴が蓄積の進行を妨げざる故に、勞働價格の引續き昂騰する場合。之には何等怪しむべき點はない。蓋しアダム・スミスの言ふ如く、『利潤の低減する場合にも尙、資本は單に引續き增殖し得るのみでなく、從前よりも一層急速に增殖し得るのである。……大資本は利潤小なる場合と雖も、一般に、利潤大なる小資本に比し一層急速に增殖する』（『諸國民の富』第二部、第一八九頁）。斯る場合、不拂勞働の減少は決して資本の支配力の擴大を侵害するものにあらざるは明瞭である。

二、利得の刺戟鈍るを以て、勞働價格の昂騰する結果、蓄積衰へる場合。蓄積は

減少する。然しながら蓄積の減少と共に、其減少の原因、卽ち資本と搾取すべき勞働力との間の不均衡は消滅する。詰り資本制生産行程の機構は、其れが一時的に造り出した障碍をみづから除去するのである。勞働價格は再び、資本の價値增殖要求に相應せる水準——其れが、貨銀昂騰の行はるゝ以前に標準的であつた水準に比べて高いか、低いか、それとも同じであるかを問はず——に低下する。

斯くて我々は見る——右の第一の場合に於て、資本を過剰ならしむるものは、勞働力又は勞働者人口の絶對的又は相對的增殖の減少ではなく、反對に、搾取すべき勞働力を不充分ならしむるものは、資本の增大であり、第二の場合に於て資本を不充分ならしむるものは、勞働力又は勞働者人口の絶對的又は相對的增殖の增大ではなく、反對に、搾取すべき勞働力、或は寧ろ其價格を過剰ならしむるものは、資本の減少であることを。搾取すべき勞働力分量の相對的運動として反映し、隨つて此の勞働力分量自體の運動に基くかのやうに見ゆるものは、資本蓄積の斯る絶對的運動である。數學上の言葉を用ゐて云へば、蓄積の大さは自變數であつて他變數ではなく、貨銀の大さは他變數であつて自變數ではない。斯くて產業循環の恐慌期に於ては、物價の一般的低落は相對的貨幣價値の昂騰として表章され、好景氣期に於ては物價の一般的昂騰は相對的貨幣價値の低落として表章される。此事から所謂通貨學派の人々は、物價昂騰の際には貨幣の流通過大なりと結論する。事實に對する彼等の無知と、全くの誤解とは(七十七)、正に、上記の蓄積諸現象を說明して、一方の場合には貨銀勞働者多きに過ぐとなす經濟學者等の愚に比すべきものである。

(七十七) 拙著『經濟學批判』第一六六頁以下參照。

所謂『自然的人口律』なるものゝ根柢に存する、資本制生産の法則は、簡單に云ふと次の點に歸著する。——資本と蓄積と貨銀率との間の關係は、資本化せる不拂勞働と追加資本の運動に要する追加勞働との間の關係に外ならぬ。故に其れは決して、互に獨立せる二箇の大さ、卽ち一方には資本の大さと、他方には勞働者の人口數との間の關係ではなく、寧ろ結局たゞ、同じ勞働者人口の不拂勞働と支拂勞働との間の關係に過ぎぬものである。勞働者階級に依つて供給され資本家階級に依つて自變數ではない。

つて蓄積される不拂勞働の分量が、單に支拂勞働の異常なる追加に依つてのみ資本化し得るに過ぎぬ程充分急速に增大する時は、賃銀は昂騰し、他の事情に變化なき限り不拂勞働は其れに比例して減少する。然しながら此減少が、資本を養ふ餘剩勞働が最早標準的分量に於て供給されざる限點に觸れるや否や、一の反作用が生ずる。卽ち收入中資本化する部分は減少し蓄積は弛滯して、賃銀の昂騰運動は阻止さるゝに至るのである。かくて勞働價格の昂騰は、單に資本制度の根本に牴觸せざるのみか、其擴大した規模に於ける再生產をも確保する所の限界內に閉塞されてゐる。されば一の自然律に神祕化された資本制蓄積の法則は實際、資本制生產及び其絕えず擴大する規模に於ける再生產を眞に危險ならしめ得る如き、勞働搾取程度の一切減少又は勞働價格の一切昂騰を除外するてふことを示すに止まる。之は、對象化した富が勞働者の發達要求の爲に存するのではなく、反對に、勞働者が既存價値の增殖要求の爲に存する生產方法の下に在つては、如何ともすることは出來ぬ。人は宗教に於ては自己の頭腦の產物に支配される如く、資本制生產に於ては自己の手の產物に支配されるのである(七十七a)。

(七十七a) されど、資本その者は人間勞働の產物に過ぎぬものなることを示した、我々の最初の研究に立ち歸る時に……人間が自己の生產物——資本——の支配下に陷り其れに隷屬し得るてふことは、全く理解し能はざる所のやうに見える。而も其れは事實上明かに行はれてゐる事であるから、扨の づから次の問が起らざるを得なくなる——『勞働者は如何にして資本の支配者——其創造者として——から資本の奴隷となり得たか?』(ファオン・チューネン著『孤立國家』第二部、第二篇、ロストック、一八六三年刊、第五及六頁)(12)。此問を發したことは、チューネンの功績である。之れに對する彼れの答は單純にあどけないものである。

(二)　蓄積及び其れに伴ふ集積(13)の進行中に生ずる、可變資本部分の相對的減少

經濟學者自身に依れば、賃銀昂騰を齎らすものは、社會的富の既存範圍でもなく既得資本の大小でもなくて、全く蓄積の不斷增大及び其增大の迅速程度である。(アダム・スミス著『諸國民の富』第一部、第八章)。我々は之れ迄たゞ、此行程の特殊の一段階たる、資本の技術的組成に變化なくして資本增殖の行はるゝ段階のみを

攻究した。されど此行程は、斯る段階を越えて進むものである。

一度び資本制度の一般的基礎を假定する以上は、蓄積の進行中必ず、社會的勞働の生産力が蓄積の最有力槓杆たるに至る一點に到著する。アダム・スミスは曰く『勞銀を昂騰せしむる其同じ原因、卽ち資本の增大は、勞働の生産力を增進し、より少量の勞働を以てより多量の生産物を產出せしむる傾向を有してゐる』と。

土地豐度等の如き諸種の自然條件、並に相互獨立し孤立的に勞働する生產者の熟練——量的に生產物の分量に於てよりも、寧ろ質的に生產物の品質に於て其實を示す所の——は暫く措き、勞働の社會的生產力は一勞働者が一定時間內に、同一の勞働力緊張を以て生產物に轉化する生產機關の相對的大小に依つて表章される。彼が依て勞働する生產機關の分量は、彼の勞働の生產力增進すると共に增大する。此生產機關は斯る場合、二重の役割を演ずる。甲生產機關の增大は勞働生產力增進の結果であり、乙生產機關の增大は勞働生產力增進の條件である。例へばマニュファクチューア的分業と機械の使用とに依り、同一時間により多量の原料が加工され、隨てより多量の原料並に助成材が勞働行程に入る。之は勞働生產力增進の結果である。他方に於て、使用機械、勞役獸、鑛物性肥料、排水管等は、勞働力增進の條件である。建物、鎔鑛爐、運搬要具等に集中せる生產機關の分量も亦同樣である。されど條件たると結果たるとを問はず、自己に併合される勞働力に比較しての、生產機關の分量增大は、勞働生產力の增進を表章する者である。故に勞働生產力の增進は、自己の運轉する生產機關の分量に比較しての勞働量の減少、又は勞働行程の客觀的因子に比較しての其主觀的因子の分量減少に於て現はれる。

資本の技術的組成の斯くの如き變化、卽ち生產機關が、自己に生氣を與へる勞働力の分量に比較して增量するとは、又資本の價値組成に、卽ち資本價値の可變部分を犧牲としての其不變部分の增大に於て反映される。例へば百分率を以て計算せんに、最初は一資本の五〇パーセントは生產機關、五〇パーセントは勞働力に放下され、後、勞働生產力の增進すると共に八〇パーセントは生產機關、二〇パーセントは勞働力に放下され、以下之れに準ず。可變資本部分に比較しての不變資本部分の斯る累進的增大は、其の都度、商品價格の比較分解——同國民の種々異なれる經濟的時代を比較すると、同時代に於ける種々異なれる國民を比較するとを問はず

ず――に依つて（既に述べた如く）確證される。單に消費さるゝ生産機關の價値換言すれば不變資本部分のみを代表する價格要素の相對的大小は、一般に蓄積の進行に正比例し、勞働の代價を支拂ふ所の、換言すれば可變資本部分を代表する所の他の價格要素の相對的大小は、一般に蓄積の進行に逆比例するであらう。

されど不變資本部分に比べて可變資本部分の減少すること、換言すれば資本價値の組成變化は、資本の素材的成分の組成變化を只概示するだけである。例へば十八世紀の初期紡績業に放下された資本價値は不變部分が二分の一、可變部分が二分の一と云ふ比例であつたのに、今日では不變部分が八分の七、可變部分が八分の一と云ふ比例であるとしても、一方、一定量の紡績勞働が今日生産的に消費する原料、勞働要具等の分量は、十八世紀初期に比べると優に何百倍も增大してゐる。其理由は簡單に斯うである。曰く、勞働生産力增進する時は、單に勞働の消費する生産機關の範圍が擴大するのみでなく、其範圍に比べて其價値が低落する。即ち生産機關の價値は絶對的には增進するが、其の範圍に比べては增進しないのである。故に不變資本と可變資本との差異の增大は、不變資本が轉化されてゆく生産機關量と、可變資本が轉化されてゆく勞働力量との間の差異の增大よりも遙かに小てある。前の差異は後の差異と共に增大するが、然し其增大の程度はより低いのてある。

だが、蓄積の增進は可變資本部分の相對量を減ずるが、其れに依つて決して其絶對量の增大を不可能ならしむるものではない。假りに一資本價値が最初は不變資本五〇パーセント、可變資本五〇パーセントに分割され、後には不變資本八〇パーセント、可變資本二〇パーセントに分割されるとせよ。其間、例へば六千磅の原資本が一萬八千磅に增大したとすれば、其可變部分も五分の一だけ增大したことになる。其れは三千磅てあつたが、今では三千六百磅である。但し以前には、勞働需要を二〇パーセントだけ增大するに二〇パーセントの資本追加で事足りた筈てあるが、今では其爲に原資本を三倍に增大せねばならぬ。

勞働の社會的生産力の發達が如何に大規模協業を前提とするか、如何に此前提の下にのみ勞働の分割及び結合が組織され、生産機關は大規模の集積に依つて節約され、其素材的性質上本來たゞ共同的にのみ使用され得る勞働要具、例へば機械

組織等が出現せしめられ、巨大なる自然力が生産に對する奉仕の地位に壓し縮められ、生産行程の、科學の技術的應用への轉化が全うされ得るかは、本書第四篇に示した通りである。生産機關が私人の所有に屬し、隨つて手工業者は相互孤立し獨立して商品を生産するか其勞働力を商品として販賣する——獨立經營の資力なきを以て——かの外なき商品生産の基礎上に於ては、右の前提はたゞ個々資本の增殖に依り、又は社會的生産機關並に生活資料が資本家の私有となる程度に比例してのみ實現さるゝに止まる。商品生産の地盤は大規模生産を、それが資本制的形態を取つた場合にのみ擔ひ得るのである。故に個々の商品生産者の手中に一定の資本が蓄積することは、特別資本制的なる生産方法の前提を成す。されば之を本來的蓄積（ursprüngliche Akkumulation）と呼び得る。此の蓄積自體それ我々は、手工業が資本制經營へ推移する場合斯る蓄積の行はるゝことを假定せねばならなかつたのである。此蓄積は、特別資本制的なる生産の歷史的結果でなく却つて歷史的基礎であるが故に、之を本來的蓄積と呼び得る。此の蓄積自體が如何にして生ずるかは、今の場合まだ穿鑿するに及ばない。其れが出發點を成すと云ふとだけで充分である。然るに勞働の社會的生産力（それは右の基礎上に發達する）を增進する一切の方法は、同時に、餘剩價値又は餘剩生産物（それは又蓄積の形成要素である）の生産を增進する方法である。隨て其れは、同時に資本に依て資本を生産する方法、又は資本の蓄積を促進する方法である。」餘剩價値の絶え間なき資本化は、生産行程に入る資本量の增大として現はれる。て、此增大は又生産規模の擴大、及び其れに伴ふ勞働生産力增進方法並に餘剩價値生産の促進に對する基礎となる。故に一定度の資本蓄積は特別資本制的なる生産方法の條件として現はれるが、後者は又反作用的に資本蓄積の促進を喚び起す。斯くて資本蓄積の增進すると共に特別資本制的なる生産方法は發達し、此生産方法の發達すると共に資本の蓄積は增進する。此二箇の經濟的因子は、其相互に附與し合ふ刺戟の複比を以て、資本の技術的組成に變化を生ぜしめ、此變化に依り資本の可變部分は不變部分に比べて絕えず益々縮小する。

總ての個々資本は、生産機關の或は大或は小なる集積であつて、其れに應じて或は大或は小なる勞働者軍に對する支配を伴ふものである。總ての蓄積は、新たなる蓄積の手段となる。其れは資本として作用する富の分量を增大すると共に、個

個資本家の掌中への其集積、隨つて又大規模生產並に特別資本制的なる生產方法の基礎を擴大する。社會的資本の增大は、多數個々資本の增大に依て行はれる。他の事情に變化なき限り、個々資本、及び其れと共に生產機關の集積は、之等の個々資本が社會的總資本の可除部分を成す程度に比例して增大する。それと同時に、原資本の嫩枝は親木から分立し、新たなる獨立の資本として作用する。此場合、殊に各資本家々族內に於ける財產分割は重要なる役割を演ずる。卽ち資本の蓄積增進すると共に又、多かれ少なかれ、資本家の數は增大するのである。直接蓄積に基く或は寧ろ蓄積と同一なる、斯種集積の特徵を示す二箇の點がある。

第一、個々資本家の手中への社會的生產機關集積の增進は、他の事情に變化なき限り、社會的富の增殖程度に依て制限されてゐる。第二、各特殊生產部面に定著する社會的資本の部分は、相互獨立し競爭する商品生產者として對立し合ふ、多數資本家間に分割されてゐる。されば蓄積及び夫に伴ふ集積は、啻に多くの點に分散されてゐるのみでなく、作用しつゝある各資本の增殖は、新資本の形成並に舊資本の分裂に依て妨げられる。故に蓄積は一方に於て、生產機關並に勞働支配の集積の增進として現れるが、他方に於ては多數個々資本の相互反撥として現れる。

社會的總資本の、多數個々資本への斯る分裂、又は社會的總資本の各斷片相互の反撥は、其相互の吸引に依つて對作用される。此吸引は最早、單純にして蓄積と同意義なる、生產機關並に勞働支配の集積ではない。其れは實に、既成諸資本の集積、其の個々獨立性の撤廢、資本家に依る資本家の收奪、多數小資本の少數大資本への轉化である。此行程は、作用中なる既存諸資本の分割に於ける變化を前提するものであり、隨つて其作用部面は社會的富の絕對的增殖又は蓄積の絕對的限界に依つて制限されないと云ふ點に依つて、曩の行程とは異なるものである。一方に於て多數の人々が資本を失ふ故に、他方に於て資本は一人の手中に大嵩に膨脹し來たるのである。是れ卽ち蓄積及集積と區別せる集中[16]である。

斯る資本集中換言すれば資本に依る資本吸引の法則は、今之を說明することは出來ぬ。簡單なる事實上の暗示で滿足せねばならぬ。競爭戰は、商品の安價は、他の事情に變化なき限り、勞働生產力に依つて爲される。商品の安價は、他の事情に變化なき限り、勞働生產力に依つて定まり、勞働生產力の大小は又生產規模に依つて定まる。斯くて大資本は小資本

を撲殺する。我々は更らに、資本制生産方法の發達するにつれて、一産業を其標準的條件の下に經營するに要する個々資本の最小限範圍が擴大するものなることを思ひ浮べる。故に小資本は、大産業がまだ漸く此處彼處に、又は不充分に、行はるるに至つたに過ぎぬ生産部面に我勝ちに集つてゆく。斯る生産部面に於ては、競爭は拮抗諸資本の數に正比例し、大小に逆比例して激烈を極める。其れはいつも幾多小資本家の壞滅を以て終る。彼等の資本は一部分は勝利者の手中に移轉し一部分は消滅してしまふのである。

此は暫く措き、資本制生産の成立と共に全く新たなる一勢力が形成されて來る。それは卽ち信用制度である。信用制度は其初め竊かに、蓄積の謙遜な助手として忍び來たり、大小様々な分量に於て社會の全面に分散せる資金をば、見えざる絲に依つて各個の又は聯合せる資本家の掌中に引き寄せる。が、軈て其れは競爭戰に於ける新たなる、恐るべき一武器となり、遂には資本集中の爲の巨大なる社會的一機構に轉化する。

集積の二個の最大槓杆たる競爭及び信用は、資本制的生産並に蓄積の發達に比例して發達する。同時に、蓄積の發達は集積すべき材料たる個々資本を增大し、又資本制生産の擴大は一方には社會的欲望、他方には、其遂行上資本の豫備集中を要する巨大なる産業的企業の技術的要件を造り出す。故に今日に在りては、個々資本の相互吸引力と集中の傾向とは、從來如何なる時に於けるよりも强大である。然し集中運動の相對的擴大並に能力は、或程度までは、資本的富の既得大小と經濟的機構の卓絶とに依つて定まるものであるが、集中の發達は決して社會的富の積極的增大に左右されるものではない。而して此は特に、集中をば擴大せる規模に於ける再生産の別名に過ぎぬ所の集積から區別するものである。單に既存諸資本の配分を變へるだけ、卽ち社會的資本の成分の量的配置を變へるだけで、集中は行はれ得るのである。此場合には、資本が或一人の手中に大嵩に增大するを得るは、他方に於て其れが多數個人の手中から取去らるゝからである。與へられたる一産業に於ては、其處に放下された一切の資本が合同して單一の資本となつた時、集中は其最極限に達したことになるであらう(七十七b)。與へられたる一社會に於ては、唯一人の資本家會社なりの手中に社會的資本の全部が

合一される瞬間に於て、始めて右の最極限に達することになるであらう。

（七十七b）〔第四版註――英吉利及び亞米利加に於ける最近の『トラスト』は既に、少なくとも一産業だけに屬する總ての大經營を合一して、事實上獨占權を有する一大株式會社たらしめんと努むることに依つて、此結果に達しやうとしてゐる。――D・H・〕

集中は、産業資本家をして其事業の規模を擴大するを得せしむることに依り蓄積の作用を補充する。事業の斯る規模擴大が蓄積の結果たると集中の結果たるとを問はず、また集中が併合てふ激烈手段に依つて行はれる――即ち或資本が他の諸資本に對する壓倒的引力中心となり、之等の諸資本各箇の獨立的凝集性を破壞し、次いで其分散せる斷片を吸引する場合――と、既成又は形成中なる多數資本の合同が株式會社設立てふより圓滑なる方法に依つて行はれるとを問はず、經濟上の效果は同一たるを失はぬ。産業設備の規模擴大は、何處に於ても、より包括的なる多數者協働組織、多數者の物質的動力のより廣大なる發展、換言すれば慣習に從つて經營せる孤立的生産行程の、社會的に結合され科學的に管理さるゝ生産行程への累進的轉化に對する、出發點を成すものである。

されど蓄積即ち環狀より螺旋形に推移する再生産に基く資本の漸進的增殖が、社會的資本の組成分の量的配置を變へさへすれば宜い集中に比べて、遙かに徐々たる行程であることは明かである。蓄積に依つて若干の個別的資本が鐵道の敷設をなし得るに至るまで待たねばならぬとしたならば、世界には今尙鐵道が無かつたかも知れぬ。然るに集中は、株式會社に依つて瞬く間に之れを成就した。而して集中は斯く蓄積の作用を增大促進しつゝ、同時に資本の技術的組成の革命――可變資本部分を犧牲として不變資本部分を增大し、それに依つて勞働の相對的需要を減少する所の――を擴大助長するものである。

集中に依り一夜にして合同した資本量は、他資本と同じく、自己を再生産し增殖し、斯くして社會的蓄積の新たなる大槓杆となる。只異なる所は、其れがより迅速に行はれるだけのことである。故に今日、我々が社會的蓄積の發達に就て語る時集中の作用は、暗に其中に包含されてゐるのである。

尋常な蓄積の進行中に形成せる追加資本（第二二章、第一節を見よ）は、主として新たなる發見及其利用、即ち一般に産業上の完成に對する媒具として役立つ。が舊資本も亦時いたれば、其頭から四肢に至るまで悉く一新し、即ち自から脫皮して

追加資本同樣より、多量の機械及び原料を運轉するにより、少量の勞働で充分なる完成された技術的形態に生れ換はるべき時期に到達する。之れが必然の結果たる勞働需要の絶對的減少は、右の更新行程を經過する諸資本が既に集中運動に依り大嵩に集積せること著しきに從つて、益々甚だしかるべきは自明である。

斯くて一方、蓄積の進行中形成せる追加資本は、其大さに比して益々僅少の勞働者を吸收し、他方に於て、周期的に新たなる組成を以て再生產される舊資本は、從前使用せる勞働者を益々多く驅逐する。

（三）相對的過剩人口換言すれば產業豫備軍の、累進的生產

本來自己の量的擴大に過ぎざりし資本の蓄積は、我々の既に見た如く、資本組成の不斷的分量變化、換言すれば可變資本部分を犧牲として行はるゝ不變資本部分の不斷的增大に於て遂行される（七十七。）。

（七十七。）第三版註――之に就て、マルクスの原稿には左の如き標註が施してある。『後に說く事の參考として玆に注意すべきは、資本の擴大が量的に止まるとすれば、同一產業の大小資本に於て、利潤の大小は前貸資本の大小に比例すること是れである。量的擴大が質的變化を伴ふ時は、大資本に對する利潤率はそれと同時に增進する。』ED.

特別資本制的なる生產方法、それに應當せる勞働生產力の發達、及びそれより生ずる、資本の有機的組成の變化は、啻に蓄積の進行即ち社會的富の增殖と步調を揃へるのみに止まらず、其進行は比較にならぬほど迅速である。なぜならば、單純なる蓄積即ち總資本の絶對的擴大は其の個々要素の集中を伴ひ、追加資本の技術的革命は原資本の技術的革命を伴ふからである。故に蓄積が進むに從つて、可變資本部分に對する不變資本部分の比例は變化する。其れは最初1:1であつたとすれば、2:1、3:1、4:1、5:1、7:1等に轉化する。斯くて資本が增大するに隨つて、其總價値の1/2の代りに、累進的に1/3、1/4、1/5、1/6、1/8だけしか勞働力に轉化せず之に反して2/3、3/4、4/5、5/6、7/8等は生產機關に轉化することになる。所て勞働の需要は總資本の大小に依つて定まるものであるから、それは曩に假定せる如く總資本に比例して增加するどころか、寧ろ總資本が增大するに隨つて累進的に減少してゆく。其れは總資本量に比べて相對的に、又此量が增大するに從つて加速度的に減少する。

總資本が增大するにつれて、其可變部分即ち其れに合體される勞働力も亦增大

するに相違ないが、然し其增大は絶えず遞減する比例に於て行はれるのである。蓄積が單に、與へられたる技術的基礎上に於ける生產の擴大として作用するに過ぎぬ中間期は縮小する。一定大の追加勞働者數を吸收し、甚だしきは——舊資本が絶えず轉形する結果——既に從業せる勞働者を引續き使用する爲には、總資本の蓄積が加速度的に增進するを要するは勿論であるが、更らに此蓄積並に集中の增進その者は又、資本の組成に於ける新たなる變化、卽ち不變資本部分に比較して の可變資本部分減少の再度の促進の一因となる。總資本が增大するに從つて、而もより急激に促進さるゝ可變資本部分の斯る相對的減少は、却つて反對に、可變資本換言すれば自己の雇傭手段よりも常に一層急激に進行する勞働者人口の絕對的增殖なるかの如く見える。(16)然るに事實は寧ろ、資本制蓄積なるものは、相對的に換言すれば資本の平均的價値增殖慾に比べて、多すぎる、隨つて餘分又は過剩の勞働者人口を、而も自己の能力及範圍に比例して絕えず生產して居るのである。

社會的總資本を觀察する時、其蓄積の運動は或は周期的變化を喚び起し、或は其要素を種々なる生產部面に對して同時に配分するとが知られる。甲の生產部面に於ては、單なる集積の結果資本は其絕對量を增大せずして其組成を變化し、乙の生產部面に於ては、資本の絕對的增大は其可變部分、卽ち其吸收する勞働力の絕對的減少を伴ひ、丙の生產部面に於ては、資本は或は其與へられたる技術的基礎上に增大を續け、夫に應じて追加勞働力を吸引し、或は其有機的組成に變化を生じて其可變部分を縮少する。何づれの生產部面に於ても、可變資本部分隨て使用勞働者數の增大は、常に激烈なる動搖と過剩人口の一時的生產——夫が、既に使用されてゐる勞働者を反撥すると云ふよりも、より際立つた形を取るにしろ、又は追加勞働者人口を其常例の排水溝に吸收し難くなると云ふ、右の場合ほど著しくはないが效果は劣らぬ形を取るにしろ——とを伴ふ者である(七十八)。既に作用せる社會資本量が增殖し、其增殖程度が上進すると共に、生產規模が擴大し運轉さるゝ勞働者數が增加すると共に、之等勞働者の勞働生產力が發達し、又富の有らゆる源泉が益々廣く充分に流出すると共に、資本に依る勞働者のより大なる吸引が其より大なる反撥を伴ふ規模も擴大し、資本の有機的組成及び其技術的形態に於ける變動も顯著となり、而して此變動を或は同時、或は交互に受くる生產部面の數も增大する事と

なる。卽ち勞働者人口は、其齎らす資本蓄積と同時に、自己を相對的に過剩ならしむる手段を、絕えず擴大しつゝある範圍に於て產出するのである(七十九)。總ての特殊歷史的生產方法が事實に於て歷史的に有效なる自己獨特の人口律を有する如く、右に述ぶるものは卽ち資本制生產方法特有の一人口律である。抽象的人口律は只、人類が歷史的に干涉せざる儘の動植物にのみ存するものである。

(七十八)英蘭及び威斯の國勢調査は、就中左の事實を示してゐる——農業に從事する總ての人々(地主、小作農業者、庭師、牧羊者等を含む)は一八五一年には二、〇一一、四四七人、一八六一年には一、九二四、一一〇人、卽ち八七、三三七人減である。毛絲製造業——一八五一年には一〇二、七一四人、一八六一年には七九、二四二人。絹製造業——一八五一年には一一一、九四〇人、一八六一年には一〇一、六七八人。キャラコ捺染業——一八五一年には一二、〇九八人、一八六一年には一二、五五六人(斯る僅少の增加は事業が非常に擴大せる結果であつて、使用勞働者數が相對的に著しく減少せることを意味する)。製帽業——一八五一年には一五、九五七人、一八六一年には一三、八一四人。麥藁帽及びボンネット製造業——一八五一年には二〇、三九三人、一八六一年には一八、一七六人。麥芽製造業——一八五一年には一〇、五六六人、一八六一年には一〇、六七七人。蠟燭製造業——一八五一年には四九四九人、一八六一年には四六八六人(此減少は主として、點燈用瓦斯の增加に基くものである)。製櫛業——一八五一年には二、〇三八人、一八六一年には一、四七八人。木挽業

——一八五一年には三〇、五五二人、一八六一年には二六、九四〇人、一八六一年には二六、一三〇人(此減少は機械の競爭に因る)。製釘業——一八五一年には二、〇四一人。他方に於て、木綿紡績及機織業——一八五一年には三七一、七七七人、一八六一年には四五六、六四六人。炭坑——一八五一年には一八三、三八九人、一八六一年には二四六、六一三人。『總じて一八五一年以降、勞働者增加の最大なりしは、機械が今日に至るまで好成績を以て使用せられざりし諸產業に於てゞある』(英蘭及び威斯の一八六二年國勢調査』第三卷、倫敦、一八六三年刊、第三六頁)(17)。

(七十九)可變資本の相對量の累進的減少に就ての法則、並びに貨銀勞働者階級の位置に及ぼす其影響は、既に若干の卓絕せる正統派經濟學者に依つて、理解と云ふよりも寧ろ直覺されてゐた。此點に於て最大功績を有するものはジョン・バルトンである——尤も彼れは他の總ての正統派經濟學者と同じく、不變資本を固定資本と混同し、可變資本を流通資本と混同してはゐるが。彼れは言ふ。『勞働の需要は、固定資本の增加ではなく流通資本の增加に左右される。此二種の資本間の比例が果して、如何なる時にも、如何なる事情の下にも、同一であるとすれば、使用勞働者の數は國家の富に比例するてふ結論が實際生ずることになる。されど斯る假定は確實のものとは見えぬ。技巧が涵養され、文明が普及するに從つて、流通資本に對する固定資本の割合は益々大となる。英國製モスリン一反の生產に使用される固定資本額は、印度製モスリン一反の生產に使

用される固定資本額に比し少なくとも百倍、恐らく千倍であらう。而して流通資本の割合は、百分の一又は千分の一であらう。年貯蓄の全部を固定資本に加へても、勞働需要の增加に對しては何等の影響もないであらう』（ジョン・バートン著『社會に於ける勞働階級の狀態に影響ある事情の觀察』倫敦、一八一七年刊、第一六及一七頁）[18]。『此國民の純收入を增加し得べき其同じ原因は、人口を過剩にし勞働者の狀態を惡化するであらう』（前揭リカルド著『經濟原論』第四六九頁）。資本の增大に比して、『勞働需要率は遞減するであらう』（前揭書第四八〇頁、註）。『勞働の維持に充てる資本額は、總資本額に於ける如何なる變化からも獨立して變化し得る。雇傭額の大動搖及び大窮乏は、資本その者が豐富なるに從つて益々頻繁となり得るであらう』（リチァード・ショーンズ著『經濟學序講』倫敦、一八三三年第一三頁）。『勞働需要は一般資本の蓄積に比例しては：增大しないであらう。故に、再生產に定められた國民的資本の總ての增殖が勞働者の位置に及ぼす影響は、社會の進むに從つて益々小となるであらう』（前揭ラムセー著『富の分配論』エヂンバラ、一八三六年刊、第九〇及九一頁）。

されど勞働者の過剩人口は、蓄積又は資本制的基礎上に於ける富の發達の必然的結果であるが、反對に此過剩人口は資本制蓄積の槓杆、否、資本制生產方法の一存在條件となる。其れは恰も、資本が自己の費用を以て養成したものであるかのやうに全く絕對に資本の有に屬する所の、自由に使用し得る產業豫備軍を成すのである。其れは資本の變動的價値增殖慾の爲に、何時でも使用できるやうに準備されてゐる搾取し得べき人間材料を、現實の人口增殖からは無關係に造り出す。蓄積が進み、其れに伴つて勞働生產力が發展すると共に、資本の突發的伸張力は增大するが、それは曾に作用資本の伸縮性が著しくなり、資本が僅かに伸縮自在なる一部を成すに止まる絕對的富が增殖するからのみでなく、特殊の刺戟を受くる毎に此富の異常なる部分を、即時、追加資本として生產の支配に任かすからのみではない。生產行程の技術的條件自體たる機械、運輸機關等は、餘剩生產物の追加生產機關への最急速なる轉化を此上なき大規模に於て可能ならしむるからである。蓄積の進むと共に充溢し來たり而して、追加資本に轉化し得る、社會的富の大嵩な部分は、市場の突然擴大せる舊生產部門、又は舊生產部門の發達せる結果必要となれる、鐵道の如き新たに開始された生產部門に、狂亂的に流れ込む。總て斯る場合に於ては、重要なる生產部面は突然、又他部面の生產規模を傷くることなしに、大嵩の人間供給を受け得ねばならぬ。×過剩人口は此供給を與へるのである。近世產業の特徵的經歷たる、平均的活氣、强壓的生產、恐慌、停滯等諸時期の、小動搖に依つて中

斷さるゝ十年毎の循環の形態は、產業豫備軍又は過剩人口の、絶え間なき形成、或は大或は小なる吸收及び再形成に基くものである。一方、產業循環の轉變は又、過剩人口を供給し、其の最强な再生產要因の一となる。

近世產業特有の斯る經歷は、近世以前の如何なる人類史時代にも存しなかつたものであるが、又た資本制生產の幼少期に於ても不可能のものであつた。資本組成の變化は極めて徐々たるものに過ぎなかつた。隨つて勞働需要の增大は、大體に於て、資本の蓄積に應當したのである。資本蓄積の進行は近世のに比し徐々たるものであつたに拘らず、搾取すべき勞働者人口の自然的諸制限に逢著した。之等の制限は、後に述ぶる如き强行手段に依つてのみ除去するを得たのである。生產規模の突發的にして急跳的なる伸張は、其突發的收縮の前提である。後者は又前者を喚び起す。されど前者は、何時でも使用し得る人間材料、即ち人口の絶對的增殖からは獨立せる勞働者の增殖なくしては不可能である。此增殖は、勞働者の一部を絶えず「遊離」せしむる單純行程、即ち增大せる生產に比較して使用勞働者數を減少せしむる方法に依つて達成される。されば近世產業の全運動形態は、勞働者人口の一部が絶えず失業者又は半就業者たることに胚胎するのである。經濟學の皮相的なるは、就中それが產業循環の諸轉變期の單なる徵候たるに過ぎぬ信用の伸縮を、却つて其原因にすると云ふ點に現はれてゐる。天體が一度び一定の運動を始めると常に其れを繰返すと丁度同じやうに、社會的生產は一度び此伸縮交代の運動を始めると常に其れを繰返すのである。結果は又原因となり、自己の條件を絶えず再生產する全行程の轉變は、周期性の形を採る。て、此周期性が一度び固定すると、經濟學でさへも、相對的に、換言すれば資本の平均的價值增殖慾に比較して過多なる人口を、近世產業の存在條件と解するやうになる。

曩に牛津大學の經濟學敎授たり、後ち英國植民省の吏僚となつたハーマン・メリヴェールは曰く、『斯くの如き恐慌の際に、國民が幾十萬の過剩人口を國外に移住せしむることに依つて急を逃れんと努力するに至つたと假定すれば、其結果は果して如何なるべきか？曰く、勞働需要の先づ復活せる際、勞働不足を見るべしてふこと是れである。生殖は如何に迅速なりとも、成年勞働の喪失を償ふには、何うしても一代の期間を要するであらう。扨て我が工場主等の利潤は主として、需要の

活潑なる好景氣機に乘じ、之に依つて需要緩漫期の補償をなす力に懸つてゐる。彼等は只機械及び手勞働を支配するとに依つてのみ、此力を確保するのである。彼等は、何時でも使用し得る勞働者を有さねばならぬ。彼等は市況に應じて、必要なる時には其操業の活動を高めたり弱めたりし得るものでなくてはならぬ。然らずんば、彼等は競爭戰に於て到底、我が國富の依つて立つ卓絶的位置を保持することは出來ぬ』(八十)。

(八十)ハーマン・メリヴェール著『植民及植民地に就ての講演』倫敦、一八四一及一八四二年刊、第一卷、第一四六頁(19)。

マルサスてさへも、過剩人口――彼れが其窮した遣方で、勞働者の相對的人口過剩からでなく絶對的人口過剩から說明した所の――に於て、近世產業の一必然を認めてゐる。彼れは言ふ。『結婚に就ての思慮ある習慣は、主として工業及商業に依つて支持せらるゝ一國の勞働階級に於て著しき程度に達する時、其國を害するに至るであらう。……人口の性質上、增大せる一定勞働者數を市場に供給するは、特別需要の結果、十六ヶ年又は十八ヶ年、を經過せる後までは不可能である。貯蓄に依る收入の資本化は、それよりも遙かに急速に行はれ得る。一國に於ける勞働の持基金額は常に兎もすれば、人口の增殖よりも尙急速に增大する傾きを有してゐる』(八十一)。

(八十一)マルサス著『經濟原論』第二五四、三一九、及三二〇頁。此書に於てマルサスは遙にシスモンヂの助に依つて資本制生產の美しき三位一體なる、餘剩生產と過剩人口と過剩消費――本當に、微妙なる三箇の怪物！――とを發見してゐる。前揭フリードリヒ・エンゲルス著『國民經濟批評要綱』第一〇七頁以下參照。

經濟學は斯樣に、相對的過剩勞働者人口の絶え間なき生產を資本制蓄積の一必然と宣言した後、極めて適當に、老處女の姿を以て、其資本家の『好典型』をして、自己の造出せる追加資本に依り職を逐はれた『過剩者』に對する左の言葉を語らしめてゐる。――『我等工場主は、諸君の依つて生活せねばならぬ資本を增大して以て、諸君の爲になし得る事をなしてゐる。而して諸君は、諸君の數を生活資料に適合せしむる事に依つて、自餘の事をなさねばならぬ』(八十二)。

(八十二)ハリエット・マルチノー著『マンチェスター罷工』一八四二年刊、第一〇一頁(21)。

資本制生產は決して、人口の自然的增殖が供給する所の自由に使用し得べき勞

働力分量を以て滿足するものではない。其れは自己の自由活動上此の自然的制限からは獨立せる產業豫備軍を要するのである。

上段に於ては、使用勞働者數の增減は精密に可變資本の增減に一致すると假定した。

去りながら、各個の勞働者がより多量の勞働を供給し隨つて其勞銀が增大する時は、たとひ勞働價格は變動せず甚しきは低落しても——此低落が勞働量の增大よりも緩慢でありさへすれば——、其支配する勞働者數が變化せず又は減少する場合と雖も、可變資本は增大するのである。斯る場合には、可變資本の增大は、より多くの勞働の指標とはなるが、より多くの使用勞働者の指標とはならぬ。一定の勞働量を、同費用甚しきはより小費用を以てより多數の勞働者から絞取する代りに、より小數の勞働者から絞取することは、總ての資本家に取つて絶對的利益問題である。より多數の勞働者を使用する場合には、不變資本の放下は發動勞働の分量に應じて增大し、より小數の勞働者を使用する場合には、發動勞働の分量よりも緩漫に增大するからである。生產の規模大となるに從つて、此動機は益々決定的となる。其重みは資本の蓄積が進むにつれて、增大し來たるのである。

同時に蓄積の因たり果たる、資本制生產及び勞働生產力の發展が、資本家をして個々勞働力の搾取を時間的又は能率的に增大することにより同一の可變資本放下を以てより多量の勞働を發動するを得せしむるものなるは、我々の既に見た通りである。我々は更に、資本家は益々不熟練工を以て熟練工を、未成熟工を以て成熟工を、女工を以て男工を、少年少女又は兒童勞働力を以て成年勞働力を驅逐するに依り、同一資本價値に依つてより多數の勞働力を購買するものなるを見た。

故に蓄積の進行中、一方に於てより大なる可變資本はより多數の勞働者を雇入るゝことなしにより多量の勞働を發動せしめ、他方に於て同一大の可變資本は同一量の勞働力を以てより多量の勞働を發動せしめ、而して最後に高級勞働力を驅逐することに依つて、より多數の下級勞働力を發動せしめる。

斯くて相對的過剩人口の生產、卽ち勞働者の遊離は、さらでだに蓄積の發達につれて促進さるゝ生產行程の技術的革命、及び其れに伴ふ不變資本部分に對する可變資本部分の比較的減少に比し一層迅速に進行するのである。生產機關の範圍

及び效力が增大する時、其勞働者雇傭手段たる程度は減少するものであるが、此事情その者は又、勞働生產力が增進するに應じて資本は其の勞働者需要よりも勞働供給を一層迅速に增大せしむるてふ事實に依つて變更を受ける。勞働者階級中の就業者部分が供給する過度勞働は、其の豫備軍の隊伍を膨大ならしめ、反對に此の豫備軍が其競爭に依つて右の就業者等に加ふる壓迫の增大は、彼等をして過度勞働をなし資本の支配に屈服するを餘儀なからしめる。勞働者階級の一部に過度勞働をなさしむることに依つて、其自餘部分を强いて遊惰に陷れてしまふことと及び其反對は、個々資本家の致富手段となり（八十三）、同時に社會的蓄積の進行に一致した規模に於ける產業豫備軍の產出を促進する。

（八十三）一八六三年の棉花窮乏當時にも、我々はブラックバーンに於ける綿紡工の一小册子中に、過度勞働――之れは工場法の結果、成年男工にのみ關はるものたるは言ふ迄もない――に對する猛烈なる雷擊を見出す。曰く『自己の家族を扶養し、自己の仲間が過度勞働に依つて早死に陷るを防がんが爲、部分時間勞働するを欲してゐる、遊情を餘儀なくされた幾百人が存する時に、此工場の成年工等は日に十二時間乃至十八時間勞働することを要求されてゐた』と。續いて曰く『我々は、斯く若干の勞働者に過度勞働をさせる常習が果して主從間に好感を造り得べきや、否やを問ひたい。過度勞働する者は、遊情を餘儀なくされた幾百人の人々に部分的就業をさせるに殆ど充分なる仕事が、此地方には存してゐる。我々は一部の勞働者が仕事の缺乏の爲め慈善に依つて生活するを餘儀なくされ居る時に當り他の勞働者等に過度勞働させるやうな事をするよりも、寧ろ、特に事態の良化するに至る迄、一般に短時間操業を實施せられたしと雇主に要望するものであるが、斯る要望に於て我々は單に正當なる事を要求して居るに過ぎぬのである。』（『工場監督官報告、一八六三年十月三十一日』第八頁）。『貿易及び商業論』の著者は、其例の的確なるブルヂョア本能を以て、使用勞働者に及ぼす相對的過剩人口の影響を會得してゐる。曰く『此國に於ける怠情の今一の原因は、充分なる勞働者數の缺如これである。……製造業者に對する非常なる需要に依り勞働が不充分になると、勞働者はいつも自己の重要を感じ、而して其雇主にも同樣に之れを感ぜしめやうとする。之れは驚くべきことである。されど之等の人々の性格は極めて墮落せるものであつて、斯る場合には一團の勞働者は結合して、終日遊情に送ることに依り雇主を困らせやうとした程である』（匿名者著『貿易及び商業論』第二七及二八頁）。此者どもは詰り貨銀增加を要求してゐたのである。

相對的過剩人口の形成に於ける此要因が如何に重要なるかは、例へば英吉利が之れを證明してゐる。勞働を『節約』するに就ての、英吉利に於ける技術的手段は素晴らしいものであつた。だが、明日にも勞働が一般に合理的程度に局限され、勞

働者階級の種々異なれる部類に對して再び年齡及び男女に從ひ適當に配付されるとすれば、現存勞働者人口を以てしては國民的生產を其現在の規模に於て繼續するには絕對に不充分であらう。現在に於て『不生產的』なる勞働者の大多數は『生產的』勞働者に轉化されねばならぬであらう。

概して勞銀の一般的運動は、產業循環の周期的轉變に應當する、產業豫備軍の伸縮に依て專ら調節される。隨つて其れは、勞働者の絕對的人口數の運動に依つてではなく、勞働者階級が現役軍と豫備軍とに分割される比例の變動、換言すれば過剩人口の相對的範圍の增減、卽ち過剩人口が或は吸收され或は又遊離される程度に依つて定まるものである。勞働市場は或は資本が伸張する故に相對的に不充分であり、或はまた資本が收縮する故に過充であると云ふやうに、勞働の需給を資本の伸縮に依り、隨つて其場合々々に於ける資本の價値發展慾に從つて調節せず、反對に資本の運動を人口數の絕對的運動に繫依せしめやうとすることは、十年毎の循環及び其の周期的諸段階——蓄積の進行中更らに、絕えず、より、迅速に續起する不規則的動搖に依つて交叉される所の——を有する近世產業に取つては、實際

美しき一法則であらう。去りながら斯くの如きは、經濟學の獨斷說である。之れに依れば、勞銀は資本蓄積に基き昻騰することになる。昻騰せる勞銀は、勞働者人口のより、急速なる增殖を刺戟し、此增殖は、勞働市場が過充となり、隨つて資本が勞働供給に對して相對的に不充分となるに至るまで繼續する。勞銀は下落し、今やメタルの裏が現はれる。勞銀の下落せる結果、勞働者人口は次第に大減少を告げ勞働者人口に對して資本は再び過剩となる、或はまた他の人々が言ふ如く、勞銀の下落並に其れに伴ふ勞働者搾取の增進は再び蓄積を促進し、同時に低賃銀は勞働者階級の增殖を阻止する。斯くて再び、勞働供給は勞働需要よりも低く、賃銀は增騰する等の事情が生ずる。之は發達せる資本制生產に取つては美しき一運動方法である！賃銀增騰の結果、實際に勞働能力ある人口の積極的增殖が生じ得る前に、產業戰が開始され、抗爭が闘はされ決定されねばならぬ期間を、幾度も幾度も經過することになるであらう。

一八四九年より一八五九年に至る間、穀物價格が下落すると同時に、實際の上から見て有名無實に止まる賃銀增騰が、英吉利の農業諸地方に起つた。例へば、ウ

ルトシーア州に於ては週賃銀は七志より八志に上り、ドーアセットシーア州に於ては七志又は八志より九志に上つた。以下之れに準ず。之れは戰爭需要、鐵道工事、工場、鑛山等の尨大なる擴張に基く過剩農民人口の非常なる流出の結果であつた。勞銀が低ければ低い程、其れが些かでも昂騰する都度表章さるゝ歩合は益々高いのである。例へば週賃銀を二十志とし、夫が二十二志に上つたとすれば、それは一〇パーセントの昂騰である。反對に週賃銀を僅々七志とし、夫が九志に上つたとすれば、それは二八パーセント七分の四の昂騰であつて、頗る結構な事のやうに聞こえる。到る所、小作農業者は咆吼し、加之『倫敦エコノミスト』誌(八十四)は、此の犬賃銀に關する『一般的にして顯著なる增騰』に就て全く眞劍に喋々した。所で小作農業者等は何をしたか？彼等は此見事なる支拂の結果農業勞働者が增殖して、其賃銀が——獨斷經濟學的な頭腦が考ふる如く——再び低落せざる事を得ざるに至る迄、待つたであらうか？彼等はより多くの機械を採用した。そして瞬く間に勞働者は再び、小作農業者をも滿足させる割合で『過多』となつた。今や從來に比し『より多くの資本』が、より生產的な形で、農業に放下される事となつた。

斯くて勞働需要は相對的にのみでなく、絶對的にも低落したのである。

(八十四)『エコノミスト』誌、一八六〇年一月十二日。

右の經濟學的假定は、勞働の一般運動、又は勞働者階級換言すれば總勞働力と社會的總資本とを調節する法則をば、勞働者人口を諸々の特殊生產部面に配分する法則と混同してゐる。例へば商況良好の結果、一定の生產部面に於て蓄積が特別活氣を呈し、利潤は平均利潤よりも大となり、爲に追加資本が此生產部面へ流入し來たる場合には、言ふ迄もなく勞働需要は增大し勞銀は昂騰する。勞銀が昂騰すれば、勞働者人口のより大なる部分は好況なる生產部面に吸收され、此生產部面は勞働力を以て飽滿し、永い間には勞銀は再び以前の平均水準へ低下するが、勞働者の流入が過大なる場合には其水準以下に低落するに至るであらう。此に於て右の產業部門への勞働者流入は停止するのみでなく、代つて其流出が行はれることゝなる。此場合、經濟學者は『何處に於て、又如何にして』賃銀の增大は勞働者の絶對的增大を伴ひ、勞働者の絶對的增大は賃銀の減少を伴ふかを見ると考へる。だが、實際彼れが見る所のものは、特殊の一生產部面に於ける勞働市場の局部的動

搖に過ぎず、資本の要求の變動に從つて、勞働者人口が種々異なれる放資部面に配分される現象に過ぎないのである。

産業豫備軍は、景況沈滯及び平均的好景氣の期間には、現役勞働軍を壓迫し、過剰生産及び發作的活氣の期間には現役勞働軍の要求を抑制する。故に相對的過剰人口は、勞働需給の法則が依つて運動する背景であつて、此法則の作用範圍をば資本の搾取熱及び支配慾に絶對的に適合した制限内に閉ぢ込める。

我々は此際、經濟學的辯護論の偉大なる一功績に目を轉ぜねばならぬ。新機械の採用又は舊機械の擴張に依つて、可變資本の一部が不變資本に轉化する時、經濟學的辯護論者は、資本を『拘束』し其れに依つて勞働者を『遊離』せしむる此作用を、反對に、其れが勞働者の爲に資本を遊離せしめると云ふ風に解釋するものなれば、我々は之等辯護論者の厚かましさを充分に評價することが出來る。遊離されるものは、啻に機械に依つて直接驅逐される勞働者のみでなく、其補充員、及び業務が其舊來の基礎上に通例の擴張を續くる場合吸收さるべき追加兵員も亦遊離されるのである。彼等は今や悉く『遊離』されてゐる。而して使用を求めつゝある總ての新資本は、彼等を自由に處分することが出來る。此資本が彼等を吸引するにしろ又は他の勞働者を吸引するにしろ、機械が市場に投じただけの勞働者を其處から取去るに右の資本が丁度充分である限りは、一般的勞働需要に及ぼす影響は絶無であらう。此資本が、より少數の者を使用する時は、過剰者の數は增大し、より多數の者を使用する時は、一般的勞働需要は『遊離者』に對する被傭者の過剰分だけ增大するに止まる。故に放下を求めつゝある追加資本が他の場合一般的勞働需要に與ふべき刺戟は、右いづれの場合にも、機械に依つて職を逐はれた勞働者を以ての範圍内までは中和される。

換言すれば、資本制生產の機構は、資本の絶對的增大が、其れに相應せる、一般的勞働需要の何等增進を伴はぬやうに處理するものである。而して辯護論者は之を名づけて、職を逐はれた勞働者等をば豫備軍に服從せしむる過渡期中に於ける彼等の窮乏、苦痛及び可能的死滅に對する一報償と呼ぶのだ！　勞働の需要が起ることは、資本が增大することゝ同じではなく、勞働の供給が起ることは、勞働者階級が

增大することゝ同じではない。隨つて相互獨立せる二箇の力が互ひに作用し合ふと云ふことにはならぬのである。骰子は僞造された！資本は雙方に對して同時に作用するのである。其蓄積は、一方に於て勞働需要を大ならしむる時、他方に於て勞働者を『遊離』せしむることに依り勞働者供給を大ならしめ、同時に、失業者の壓迫は就業者をしてより多量の勞働を發動するを餘儀なからしめ、隨つて或程度まで、勞働供給を勞働者供給から獨立のものとする。此基礎上に於ける勞働需給律の運動は、資本の壓制を完成するものである。

されば勞働者等が、みづからより多く勞働し、より多く他人の富を生產し、自己の勞働生產力が增進するに應じて、何ゆえ資本の價値發展要具としての自己の職分てさへも自己に取つて益々不確實たるに至るかの祕密を明かにするや否や、彼等自身間に於ける競爭の强度が全く相對的過剩人口の壓迫に依つて定まることを發見するや否や、斯くて勞働組合等に依り、就業者と失業者との間の計劃的協合を組織し以て資本制生產の上記自然律が彼等の階級に及ぼす破壞的影響を驅除し又は微弱にしやうとするや否や、資本及び其阿諛者たる經濟學者は、『永遠』にして『神聖』なる需給律の侵害に就て叱罵する。蓋し就業者と失業者との間の總ての結合は、右の需給律の『純粹』作用を攪亂するものである。他方、例へば植民地に於て、反對事情が產業豫備軍の造出及び其れと共に資本家階級に對する勞働者階級の絕對的隸屬を妨ぐるや否や、資本並びに其ザンホー・バンザ(2)は、需給の『神聖』律に叛逆し、强制手段に依つて之れを阻止しやうと努める。

（四）相對的過剩人口の種々なる形態。

資本制的蓄積の一般法則

相對的過剩人口は有らゆる可能なボカシに於て存在してゐる。各勞働者は、自己が半ば雇傭されるか又は全く雇傭されざる期間中、相對的過剩人口に屬してゐる。相對的過剩人口が或は恐慌期中には急性的に現はれ、或は業務緩漫期中には慢性的に現はれると云ふやうに、產業循環の段階轉變に依つてそれに刻印される所の、其の周期的に反復される諸々の大なる形態は暫く措き、相對的過剩人口は常に、流動的、潛伏的及び停滯的なる三箇の形態を有してゐる。

近世產業の諸中心——工場、マニュファクチューア場、鎔鑛所、鑛山等——に於て

は勞働者は或は反撥され、或はまた、より大嵩に吸引される。故に被傭者の數は、生産規模に對しては絕えず減少する比例を以てなりとは云へ概して增大する。此場合、過剩人口は流動的形態に於て存するものである。

眞の工場、並に機械が一因子として使用され又は單に近世的分業が實施さるゝに止まる總ての大作業場にては、少年期中の男工が澤山使用されてゐる。一度び此期を經過すると、同じ產業部門に引續き使用され得るものは、極めて少數であつて、大部分は型の如く解傭される。此解傭されるものは、流動的過剩人口の一要素を成し產業範圍の擴大すると共に增大する。其一部は外國に移住し、而して實際たゞ移住する資本の後を追ふに過ぎぬのである。其結果の一は、英吉利が證明する如く、女子人口が男子人口よりも急激に增殖すると云ふことと是れである。勞働者人口の自然的增殖が資本の蓄積慾を充たすに足らず、而も同時に其れを超過すると云ふとは、資本の運動その者の一矛盾である。資本は、より多數の若年工を要し、より少數の成年男工を要する。此矛盾は、幾千の勞働者が業を失つてゐる——分業が彼れ等を一定の職業部門に繫り付けるから——時に當り、それと同時に職工の缺乏が訴へられると云ふ矛盾以上に顯著なるものではない(八十五)。尙また、資本に依る勞働力の消費は極めて急激であつて、勞働者はすでに中年にして大抵多かれ少なかれ使ひ古るされてしまふ程である。彼れは過剩者の列に落ち込むか又は高級段階から下級段階に引下げられる。我々は正に大工業の勞働者に於て最短の壽命に逢著するのである。

(八十五) 一八六六年の後半年、倫敦に於て八萬乃至九萬の勞働者が業を失した時に當り同半年に對する工場報告中には次の如く書いてある。——『需要はいつも、丁度それを要する時に供給を造り出すと云ふは、全然當を得たものとは思はれぬ。勞働に於ては、其うではなかつた。なぜならば、幾多の機械は昨年職工缺乏の爲に休止されてあつたから』(『工場監督官報告』一八六六年十月三十一日、第八一頁)。

マンチェスター健康醫吏ドクトル・リー(2)は確證して曰く、『マンチェスターに於ける中流階級上の部の平均死亡年齡は三十八歲、勞働階級の平均死亡年齡は十七歲であり、リヴァープールに於ては前者は三十五歲、後者は十五歲であつた。斯くて富裕階級は自分以下の境遇にある市民等に比し二倍以上の生命權を有するやうに見えた』(八十五a)。

（八十五a）一八七五年一年十五日、バーミンガム市衛生會議に於ける、當時の同市々長、今（一八八三年）の商務大臣たるジョセフ・チァムバーレーンの開會の辭。

斯る事情の下に於ては、此プロレタリア部分の絕對的增殖は、其要素急激に磨滅するに拘らず其數を增大せしむる所の一形態を要する。斯くて勞働者の急速なる代替りが生ずる（此の法則は人口中の自餘階級には當嵌らぬ）。此の社會的要求は、大工業の勞働者等が依つて生活する事情の必然の結果なる早婚と、勞働者兒童等に對する搾取が彼等の生產に附するプレミアムとに依つて滿たされる。

資本制生產が農業を征服するや否や、又は征服するに應じて、農業に使用される資本の蓄積が增大すると共に農業勞働者人口に對する需要は絕對に減少し、而も此人口反撥は、非農業的產業に於けるが如く、より大なる人口吸引に依つて補充されることは無いのである。故に農業人口の一部は、都市又はマニュファクチューアのプロレタリアたらんものと絕えず待ち構へ、此推轉に好都合なる事情を窺つてゐる（玆でマニュファクチューアと云ふは、總ての非農業的產業を指す）（八十六）。されば相對的過剩人口の此源泉は絕えず流動してゐる。けれども其都市への不

斷的流動は、田舍その者に於ては絕えず潛在する一の過剩人口を前提する。而して此過剩人口の範圍は、其排出溝が特別廣大に開く場合にのみ目に見えるやうになるのである。故に農業勞働者は最小勞銀の位置に引下げられ、常に片足を被救恤的窮乏の泥濘中に入れて立つてゐる。

（八十六）一八六一年の英蘭及威斯國勢調査中に計算さるゝ所に依れば、『七百八十一箇の都市は一千九十六萬九百九十八人の住民を有してゐるが、村落及び地方教區は九十一萬五千二百二十六人を數ふるに過ぎぬ。……一八五一年には五百八十箇の都市が計上されたが、其人口は周圍諸地方の人口と略々同樣であつた。所が其後十年間に、村落及び田舍の人口は五十萬人增殖しただけであるのに、五百八十都市の人口は一百五十五萬四千六十七人の增殖を見た。即ち地方教區の人口增殖は六・五パーセント、都市の人口增殖は一七・三パーセントである。人口增殖能率に於ける斯くの如き差異は、田舍より都市への移住に基くものである。人口總增殖の四分の三は都市に屬する』（『英蘭及威斯國勢調査』第三卷、第一一及一二頁）。

相對的過剩人口の第三範疇たる停滯的のものは、現役勞働者軍中の、而も就業全く不規則なる一部を形成する。されば此種の相對的過剩人口は、自由に使用し得べき勞働力の竭くる所なき貯藏所を資本家に提供するものである。其生活狀態

は勞働者階級の平均水準以下に沈む。而して此事情こそ件の過剰人口をば、資本の特別搾取部門の廣大なる地盤たらしめるのである。此過剰人口を特徴付くるものは、最大の勞働時間と最小の勞銀とである。我々は既に、家内勞働なる表題の下に、其の主要形態を知るを得た。斯る相對的過剰人口は、大工業並に農業の過剰勞働者、特に又手工經營がマニュファクチューア經營に、マニュファクチューア經營が機械經營に屈服する所の亡び行く諸産業から、絶えず新兵を得るのである。其範圍は、蓄積の範圍及び勢力の增大につれて『過剰化』が進む時に擴大する。されど此の相對的過剰人口は同時に、勞働者階級の總增殖に對して他の諸要素より も相對的に著しく關與する所の、みづから自己を再生産し不滅ならしむる勞働者階級の一要素たるものである。實際の所、出産及び死亡件數のみでなく家族の絶對的大小も、勞銀の高低、隨つて種々なる範疇の勞働者に支配される生活資料の分量と反比例に立つ。資本制社會の斯る法則は、蒙昧人は固より文化せる植民者等の間にあつても、不條理に聽えるのである。此法則は、個體的には虚弱にして絶えず追ひ惱まされてゐる動物種類の、尨大なる生殖を想起せしめる(八十七)。

(八十七)『貧困は生殖に有利であるやうに見える』(アダム・スミス著『諸國民の富』第一部第八章)。加之、此事は、伊達者にして機智に富める法師ガリアニに依れば、神の特に巧みなる一配劑である。曰く『神は最有用なる職分を盡す人々は豐かに生れるやうに配劑した』と(ガリアニ著『貨幣論』クストヂ編伊太利經濟名著近世篇第三卷、ミラノ、一八〇一年、第七八頁)(23)。『飢餓及び惡疫てふ最極點に及ぶ窮乏も、人口の增殖を妨げずして寧ろ人口を增殖せしむる傾向を有してゐる』(サミュエル・レーング著『國民的窮乏』一八四四年、第六九頁)(24)。レーングは統計を以て之を例解せる後、續いて曰く『人々が悉く安樂な境遇に居るとすれば、世界は聽て人口稀薄となるであらう』と。

最後に相對的過剰人口の最低沈澱は、被救恤的窮乏の領域を宿らせてゐる。浮浪人、犯罪者、淫賣婦、約言すれば眞の極貧プロレタリア(25)は暫く措き、此の社會部層は三箇の範疇から成る。第一は勞働有能者。我々は英國に於ける被救恤的窮乏の統計を只だ皮相的に瞥見しただけでも、被救恤的窮民の數が恐慌毎に增大し、景況恢復の都度減少するものなるを見出すのである。第二は孤兒及び被救恤的窮乏兒。之等は産業豫備軍の候補者であつて、例へば一八六〇年の如き大好況期には、急激に大纏めに現役勞働者軍中に編入される。第三は墮落者、襤褸者、勞働無能者。之等は主として、分業に基く不融通性の犧牲となつた人々、勞働者の標準年齡

以上に生き延びた人々、最後に危險なる機械、鑛山、化學工場等の發達と共に其數を加へる產業の犧牲たる、不具者、疾病者、寡婦等である。被救恤的窮乏は現役勞働者軍の癈兵院、及び產業豫備軍の死重たるものであつて、其生產は相對的過剩人口の生產中に、其必然中に包含される被救恤的窮乏は、相對的過剩人口と共に、資本制生產發達の一存在條件を成す者である。其れは資本制生產の虛費(36)——とは云へ、資本は其大部分を自己の肩から勞働者階級及び小中等階級の肩に轉嫁するを心得てゐる所の——に屬する。

社會的富、作用しつゝある資本、其增大の範圍及び强度、隨つて又プロレタリアの絶對數並に其の勞働生產力等が大なれば大なる程、產業豫備軍は益々大である。自由に支配し得べき勞働力は、資本の伸張力を發展せしむるのと同じ原因に依て發展せしめられる。故に產業豫備軍の相對數は、富力の增進と共に增大する。されど現役勞働者軍に比べて此豫備軍が大なれば大なる程、其窮乏が其勞働苦に反比例する所の固定的過剩人口は益々大である。最後に、勞働者階級中の苦惱者部層、及び產業豫備軍が大なれば大なる程、官認の被救恤的窮乏は益々大である。之れは、資本制蓄積の絶對的、普遍的法則である。此法則は他の總ての法則と同じく其の實現上多樣なる事情——其分解は玆にそれを爲すべきにあらざる——に依つて變更を受ける。

勞働者に向つて其數を資本の價値增殖慾に適合せしめよと說法する、經濟學的智慧の迂愚なるを我々は知る。資本制的生產並に蓄積の機構は、絕えず此數を資本の價値增殖慾に適合せしめてゐるのである。此適合の初頭語は、相對的過剩人口即ち業產豫備軍の造出であり、結尾語は現役勞働者軍中絕えず增大する部層の窮困と被救恤窮乏の死重とである。

益々增大する生產機關量をば、社會的勞働の生產力の增進の結果、累進的に減少する人間勞働力支出を以て運轉するを得せしむる法則——此法則は、勞働者が勞働要具を使用するのでなく勞働要具が勞働者を使用する資本制的基礎上に於ては、勞働生產力が高ければ高き程、自己の雇傭手段に對する勞働者等の壓迫は益々大であり、隨つて彼等の生存條件たる、他人の富の增殖又は資本の自己增殖の爲にする彼等自身の勞働力の販賣は、益々不安定たるに至ると云ふ形に言ひ現はされ

る。故に生産機關及び勞働生産力が、生産的人口よりも急激に增大すると云ふ事は、資本制的には其反對に、勞働者人口は資本の價値增殖慾よりも常に急激に增大すると云ふ形に言ひ現はされる。

我々は第四篇に於て、相對的餘剩價値の生産を分解する際、資本制度內においては勞働の社會的生産力を增進すべき一切の方法は、個々勞働者を犧牲として遂行されること、生産發展の有らゆる手段は、生産者に對する支配並に搾取手段と化し勞働者を一の部分人に不具化してしまひ、之を機械の附屬物たる位置に貶下し、其勞働の苦痛を以て之れが內容を破壞し、科學が獨立の力として勞働行程に併合されると同じ比例で、勞働行程の靈性力を勞働者から奪離してしまふと、右の如き生産發展の有らゆる手段は、勞働者が依つて勞働する條件を歪め、勞働行程中彼れを卑陋極まりて惡むべき專制に服せしめ、其終生を勞働時間に轉化し、其妻子を資本の轢殺車下に投げ込むものなること等を見た。されど餘剩價値生産の有らゆる方法は、同時に蓄積の方法であり、蓄積の擴大は又すべて之等の方法を發展すべき手段となる。そこで斯う云ふ結論が生ずる。曰く、資本の蓄積が進むと同じ程度に於て、勞働者の位置は——其受くる支拂の如何を問はず、其れが高からうが安からうが——惡化せねばならぬ。最後に、相對的過剩人口卽ち産業豫備軍を蓄積の範圍及び强度と均衡せしむる法則は、火神ヘフェートスの楔が巨神プロメシュースを巖に打付けたよりも尙固く、勞働者を資本に打付ける。此法則は、資本の蓄積に應當せる窮乏の一蓄積を生ぜしめる。故に一極に於ける富の蓄積は、同時に其の對極、換言すれば自己の生産物を資本として造る階級側に於ける窮乏、勞働苦、奴隷狀態、無知、野獸化、道德的墮落等の蓄積である。

資本制蓄積の斯る矛盾的性質は(八十八)、經濟學者等に依つて種々なる形態に言ひ現はされた。——尤も彼等は之を、或程度までは其れと類似してはゐるが、然し本質的に異れる、資本制以前に於ける生産方法の諸現象と混同してはゐるが。

(八十八)『斯くて、プルヂォアが依つて運動する生産事情は、統一的な單純な性質でなくて矛盾せる性質を有すると、富が生産されると同じ比例で又窮乏が生産されること、生産力の發展が進むと同じ比例で一の抑壓力が發展すると、斯る事情がプルヂォア的富換言すればプルヂォア階級の富をば、此階級の個々成員の富を不斷に破壞して、絶えず增殖するプロレタリアを創造するとに依つてのみ造り出すものなること等が、日每に

益々明瞭となつて來る』(拙著『貧學の窮乏』第一一六頁)。

十八世紀に於ける偉大なる經濟學著述家の一人なる加特立僧オルテスは、資本制生產の矛盾を社會的富の普遍的自然律と解してゐる。曰く『經濟上の善き事と惡しき事とは、一國民に於ては常に平衡を保つてゐる。或人々に於ける財の充實は、常に他の人々に於ける財の不足に等しく、或人々の巨富は、常に他の遙か多數の人々に於ける必要品の絕對的缺乏を伴ふものである。一國民の富は其人口に一致し、其窮乏は其富に一致する。或人々の勤勉は、他の人々の懶惰を强要する。貧困者及び懶惰者は、富裕者及び活動者の必然的一結果である』云々(八十)。

(八十九)ジァムマリア・オルテス著『國民經濟論』第六部、一七七七年刊、クストヂ編伊太利經濟名著集近世篇第一一卷、第六、九、二一、二五頁等(27)。オルテスは同書第三二頁に曰く、『人民の幸福の爲めに無用の制度を計劃する代りに、予は人民の不幸の原因を究明するに止めたいと思ふ』と。

オルテスから約十年後に、英蘭國教會の新教僧タウンセンドは、全く粗暴な仕方で貧困を富の必然的條件として讃美した。曰く『法律的强制(勞働に對する)は餘りに多くの煩勞と、暴行と、騷擾とを伴ふ。……然るに飢餓は靜に平和靜溫にして間斷なき壓迫たるのみでなく、勤勉及び勞働に對する最も自然的なる動機として最强の努力を喚び起すものである』と。故に問題は、一に勞働者階級の間に飢餓を永久ならしむることに懸つてゐる。そしてタウンセンドに依れば、特に貧民間に作用しつゝある人口原理は、之れが處置をなすのである。『貧民が或程度まで輕卒であつて(卽ち黃金の匙を含まずして生れるほど輕卒であつて)、社會に於ける最も卑賤にして最も不潔劣等なる任務を盡すべき若干者が常に存することは、一の自然律であるやうに見える。之れに依つて人間幸福の貯えは非常に增加し、より優美なる人々は單に苦役から救はれるのみでなく、……彼等の樣々な性向に適した職務に、間斷なく從事すべき自由を有してゐる。……其れ(貧民救助法)は、神と自然とが世界に設けた制度の、調和と美、均齊と秩序とを破壞する傾きを有してゐる』(九十)。

(九十)人類の幸福を望む一人(牧師ジョセフ・タウンセンド君)著『貧民救助法論』一七八六年刊、倫敦、一八一七年再刊、第一五、三九、及四一頁(28)。タウンセンドの右に引用せる著書、並に同著者の『西班牙旅行』中から、マルサスは屢々數頁に亙つて寫し取つて居るが、此『優美なる』牧師自身は又其說の大部分をサー・ジェームス・スチュアートから借用した。

た者である。但し彼れはスチュアートを曲用してゐる。例へばスチュアートは『此奴隷制度に於ては、人間を勤勉ならしむべき〔非勞働者の爲に〕、强行的方法があつた。……人々は當時、他人の奴隷であつた故に、勞働〔卽ち他人の爲の無料勞働〕を强いられてゐた。人々は今や、其必要の奴隷なるが故に、勞働〔卽ち非勞働者の爲の無料勞働〕を强いられてゐる』と云つてゐるが、彼れは此事からして、かの肥滿せる終身受祿僧の如く、貧銀勞働者等は常に餓死に瀕すべきであるとは結論しない。彼れは寧ろ反對に、彼等の欲望を增大せしめ、其增大したる欲望を以て同時に『より優美なる人々』に對する彼等の勞働の刺戟たらしめやうとしてゐるのである。

加特立僧の方は、窮乏を不滅ならしむる運命の中に、基督教的慈善、獨身、修道院、寄捨等の存在權を見出したのであるが、反對に新教受祿僧の方は、此同じ點に、貧民を して貧弱なる公の救恤に與かるの權を有せしめた法律を難擊すべき口實を見出して ゐる。

ストルヒは言ふ。『社會的富の發達は、……最も退屈的にして最も下賤最も忌しき業務を營む所の、一言すれば人生に於ける不快劣等なる總ての事を自己の肩上に擔ひ、其に依つて他階級に閑暇と、心意の晴朗と、品性の因襲的（至言！）尊嚴[91]とを齎らす所の……社會に於ける有用階級を生ぜしめる』(九十一)。ストルヒは自ら問ふて曰く、衆民の窮乏と墮落とを伴ふ現資本制文明の、野蠻制度に優る所以は抑も如何？と。彼れは一箇の解答を見出して ゐる、曰く安固！

(九十一) 前揭ストルヒ著『經濟學教課』彼得堡版、一八一五年刊、第三卷、第二二三頁。

シスモンヂは曰く、『產業と科學との進步に依つて、各勞働者は每日、自己の消費に要するよりも遙か以上を生產することが出來る。然しながら、同時に、彼れの勞働は富を生產するが、若し彼れが自ら之れを消費せしめられるとすれば、此富は彼れを殆んど勞働に適せしめないであらう』と。彼れに依れば、『人々（卽ち非勞働者）が勞働者の勞働の如き不斷の勞働に依つて、產業が我々に齎らす一切の享樂を購ふを要すとせば、彼等は恐らく藝術上の總ての完成並に之等一切の享樂を斷念するであらう。……今日ては、努力は其報酬と分離されてゐる。同一人が初めに勞働し後に休息するのてはない。反對に、甲が勞働すればこそ、乙は休息せねばならぬのである。……故に勞働生產力の限りなき增大は、遊惰なる富者の奢澤及び享樂を增進すると云ふこと以外には何等の結果も有し得ないのである』(九十二)。

(九十二) 前揭シスモンヂ著『經濟學新原理』第一卷、第七篇第二十三章　資本制蓄積の一般法則　第一卷、第七九、八〇、及八五頁。

最後に、冷血なるブルヂョア的談理家なるデスチュト・ド・トレーシーは、殘酷に斯う言つてゐる。――『貧國に於ては、人民は安樂であり、富國に於ては、人民は常に貧乏である』(53)(九十三)。

(九十三) 前掲デスチュト・ド・トレーシー著『意志及び其效果論』巴里、一八二六年刊、第二三一頁。

(五) 資本制蓄積の一般的法則の例解

a 一八四六年より一八六六年に到る英吉利

資本制蓄積を研究するに就て、近世社會の如何なる時期も最近二十ヶ年期ほどに好都合てはない。此の期間は宛として、フォルトナトゥスの財布を見出せるが如くてある。然し總ての國々の中で又英吉利は典型的な實例を提供してゐる。なぜならば、英吉利は世界市場に於て第一位を確保して居り、而して資本制生產方法は單り同國に於てのみ、充分に發展し、最後に、一八四六年以後に於ける自由貿易一千太平年國の實現は、俗學的經濟學の最後の隱れ家を切斷したからてある。右二十ヶ年期の後半は又前半を遙かに凌ぐと云ふ有樣てあるが、此絶大なる生產の進步に就ては、既に第四篇に於て充分に暗示して置いた。

英國人口の絶對的增殖は、最近半世紀に於て極めて著しかつたが、其の相對的增殖卽ち增進率は、政府の國勢調査より借用せる左表が示す通り、絶えず低減してゐた。――

各十年間に於ける、英蘭及威斯の人口年增殖百分率	
一八一一――一八二一年	一·五三三%
一八二一――一八三一年	一·四四六%
一八三一――一八四一年	一·三二六%
一八四一――一八五一年	一·二一六%
一八五一――一八六一年	一·一四一%

そこで他方に、富の增殖を考察して見やう。之れに就ては、所得稅に屬すべき利潤、地代等の運動は、最も確實なる支點を與へる。一八五三年より一八六四年に到る間、大英國に於ける納稅義務ある利潤（小作農業者其他の若干項目は含まず）の增殖は五〇·四七パーセント（卽ち年平均四·五八パーセント）であつた(九十四)が、同

期間に於ける人口の增殖は約一二パーセントであつた。一八五三年乃至一八六四年に於ける、課稅し得べき土地（家屋、鐵道、鑛山、漁場等を含む）賃子の增殖は三八パーセント卽ち年に三パーセント十二分の五、うち左の諸項目は增殖もつとも著しきものであつた（九十五）。

	一八五三年より一八六四年に至る年收入の增加	年平均增加
家屋	三八・六〇％	三・五〇％
石坑	八四・七六％	七・五〇％
鑛山	六八・八五％	六・二六％
製鐵場	三九・九二％	三・六三％
漁場	五七・三七％	五・二一％
硝子製造所	一二六・〇二％	一一・四五％
鐵道	八三・二九％	七・五七％

（九十四）『英帝陛下內國收入委員第十報告、倫敦、一八六六年』第三八頁(51)。

（九十五）前揭報告。

一八五三年より一八六四年に至る期間中各四ヶ年を取て比較するならば、我々は收入の增殖程度が絕えず增進せるを見出すであらう。例へば利潤に基く收入の增殖程度は一八五三年より一八五七年に至る間は年に一・七三パーセント、一八五七年より一八六一年に至る間は年に二・七四パーセント、一八六一年より一八六四年に至る間は年に九・三〇パーセントであつた。英帝國に於ける所得稅に屬すべき收入の總額は、一八五六年には三億七百六萬八千八百九十八磅、一八五九年には三億二千八百十二萬七千四百十六磅、一八六二年には三億五千一百七十四萬五千二百四十一磅、一八六三年には三億五千九百十四萬二千八百九十七磅、一八六四年には三億六千二百四十六萬二千二百七十九磅、一八六五年には三億八千五百五十三萬二十磅であつた（九十六）。

（九十六）之等の數字は比較の爲には充分であるが、絕對的に觀る時は虛僞である。蓋し年々、恐らく一億萬磅の收入は『默祕』されるからである。就中商工業者側に依つて試みらるゝ組織的欺瞞に就いての、愛蘭收入委員等の不平は、其の各報告中に繰返されてゐる。例へば斯う書いてある。――『或株式會社は其の課稅さるべき利潤を六千磅と申

告せるが、課稅吏は之を八萬八千磅と計上し、而して結局此の額に對して納稅されたのである。他の一會社は、十九萬磅と申告せるが、遂に其眞の額は二十五萬磅なるべきを承認せざるを得なかつた』(前揭報告第四二頁)。

資本の蓄積は同時に、其の集積並に集中を伴つた。英蘭に對しては政府の何等の農業統計存せざりし(愛蘭には存してゐたが)も、十箇の州に依つて任意に供給された。此場合其結果が示す所に依ると、一八五一年より一八六一年に至る間、百エーカー以下の小作農地は三萬一千五百八十三箇から二萬六千五百六十七箇に減じた、卽ち五千十六箇は、より大なる小作農地に併合されたのである(九十七)。一八一五年より一八二五年に至る間、相續稅に屬する一百萬磅以上の動產は一もなかつた。然るに一八二五年より一八五五年に至る間には、夫が八件、一八五六年より一八五九年六月に至る四ヶ年半の間には四件あつた(九十八)。されど我々は、一八六四年より一八六五年に至るD種(小作農業者を除ける利潤、その他)に屬する所得稅を簡單に分解することに依つて、最も善く集中を見得るであらう。予は豫め此源泉に依る收入最低六十磅に至る迄は所得稅を納むるものなることを述べて置く。英蘭、威斯及び蘇格蘭に於ける斯くの如き課稅義務ある收入は、一八六四年には九千五百八十四萬四千二百二十二磅、一八六五年には一億五百四十三萬五千五百七十九磅(九十九)、而して負稅者の數は、一八六四年には人口總數二千三百八十九萬一千九に對し三十萬八千四百十六人、一八六五年には人口總數二千四百十二萬七千三に對し三十三萬二千四百三十一人であつた。右兩年に於ける之等收入の配分は、左表の示す通りである。——

一八六四年四月五日終了一ヶ年	利潤收入	人員
總收入	九五、八四四、二二二磅	三〇八、四一六
右の中	五七、〇二八、二八九磅	二三、三三四
	三六、四一五、二二五磅	三、六一九
	二二、八〇九、七八一磅	八三二
	八、七四四、七六二磅	九一

一八六五年四月五日終了一ヶ年	利潤收入	人員
	一〇五、四三五、七三八磅	三三二、四三一
	六四、五五四、二九七磅	二四、二六五
	四二、五三五、五七六磅	四、〇二一
	二七、五五五、三一三磅	九七三
	一一、〇七七、二三八磅	一〇七

（九十七）前掲『英蘭及威斯國勢調査』第三卷、第二九頁。百五十人の地主は英蘭に於ける土地の半ばを所有し、十二人の地主は蘇格蘭に於ける土地の半ばを所有してゐると云ふジョンブライトの主張は否定せられなかつた。

（九十八）『英帝陛下内國收入委員第四報告』倫敦、一八六〇年、第一七頁。

（九十九）之等は純收入、卽ち法律の認むる一定控除をなした殘額である。

英吉利聯合王國產出石炭額は、一八五五年には六千一百四十五萬三千七十九噸其價一千六百十一萬三千一百六十七磅、一八六四年には九千二百七十八萬七千八百七十三噸、其價二千三百十九萬七千九百六十八磅、產出銑鐵額は一八五五年には三百二十一萬八千一百五十四噸、其價八百四萬五千三百八十五磅、一八六四年には四百七十六萬七千九百五十一噸、其價一千一百九十一萬九千八百七十七磅であつた。同國の經營鐵道延長は一八五四年には八千五十四哩、其拂込資本二億八千六百六萬八千七百九十四磅、一八六四年には一萬二千七百八十九哩、其拂込資本四億二千五百七十一萬九千六百十三磅であつた。同國の輸出入總額は一八五四年には二億六千八百二十一萬一百四十五磅、一八六五年には四億八千九百九十二萬三千二百八十五磅に上つた。左表（百）は輸出の運動を示す。

一八四六年	五八、八四二、三七七磅
一八四九年	六三、五九六、〇五二磅
一八五六年	一一五、八二六、九四八磅
一八六〇年	一三五、八四二、八一七磅
一八六五年	一六五、八六二、四〇二磅
一八六六年	一八八、九一七、五六三磅

（百）此時（一八六七年三月）印度及支那市場は英國木綿工場主等の貨物輸送に依つて既に再び供給過充となつてゐた。一八六六年、木綿工等に對して五パーセントの賃銀低下が開始せられ、一八六七年には同樣な作用に基きプレストンに於て二萬人の罷工が起つた。〔之れは軈て勃發せる恐慌の前兆であつた。——D・H・〕

之等の僅少叙述に依つて、我々は英國民の戸籍署長が擧げた勝閧を尤もな事と思ふのである。曰く『人口の增殖は急激なりしも、產業及富の進行には及ばなかつた』と（百一）。

（百一）『英蘭及威斯國勢調査』第三卷、第一一頁。

我々は之より此產業の直接當事者卽ち斯る富の生產者たる、勞働階級に目を轉じやう。グラッドストーンは曰く『現下人民の消費力減損し、苦痛窮乏の壓迫增大すると同時に、上流階級の富は絶えず蓄積され、其習慣たる贅澤並に享樂資料增大するを明かに見るは、本邦社會狀態に於ける最も悲しむべき特色の一である』と(百二)。

(百二)一八四三年二月十三日の下院に於けるグラッドストーンの演說。(『タイムス』紙、一八四三年、二月十四日。『ハンサード』速記錄、同二月十三日)。

此の僞熱的なる大臣は、一八四三年二月十三日の下院に於て右の如く語つたのである。それから二十年後の一八六三年四月十六日、彼れは其の豫算提出演說中に述べて曰く、『一八四二年より一八五二年に至る間、我國の課稅すべき收入は六パーセントの增加を見た。……一八五三年より一八六一年に、至る八ヶ年に、夫は一八五三年の標準より計算して二〇パーセント增加した！此事實は殆んど信を置き難きほど驚くべき者である。……全く有產階級にのみ限らるゝ……富と權力との斯くの如き痲醉的增大は……勞働民に取つて間接に有利なる者であるに違ひない。なぜならば、それは一般消費品を安價ならしむるからである。富者は益々富み、而も貧者益々貧を、減じて來たのである。そは兎もかく、極端な貧困が減じたるや否やに就ては、予は敢て斷言しないのである』(百三)。

(百三)一八六三年四月十六日下院に於けるグラッドストーンの演說。『モーニング・スター』紙、同四月十七日。

何と云ふ跛な文意漸墜(注)だらう！勞働者階級が依然として貧乏であり、だゞ自己が有產階級の爲に『富と權力との痲醉的增大』を造り出すに比較して『貧を減じた』とすれば、勞働者階級は相對的には矢張り貧乏たるを失はなかつたのである。極端な貧困が減じなかつたとすれば、其れは增したのだ。なぜならば、富の極は增したからである。生活資料の低廉化に就ては、政府の統計、例へば倫敦孤兒院の報告は、一八五一年乃至一八五三年に比較して一八六〇年より一八六二年に至る三年間に平均二〇パーセントの生活要品價格騰貴を見たことを示してゐる。其後の三年間、卽ち一八六三年より一八六五年に至る間、食肉、バター、ミルク、砂糖、鹽、石炭、その他多數生活要品は、累進的に騰貴した(百四)。左記、一八六四年四月七日に

於けるグラッドストンの豫算演説は、利殖の進歩と『貧困』に依つて緩和された、人民の幸福とに對する、ピンダー式熱調頌歌である。彼れは衆民が『被救恤的窮乏の境界に』あることを語り、『賃銀增騰せざる』諸職業に就て云爲し、而して最後に勞働者階級の幸福を次の言葉に概括してゐる。曰く、『人生は十中九までは生存競爭たるにすぎぬ』と(百五)。

(百四)青表紙本中政府報告『英吉利聯合王國の雜統計』第四部、倫敦、一八六六年、第二六〇―二七三頁及隨所を見よ。孤兒院等の統計の代りに、王國の兒童に對して手當を附與すべきことを主張せる宣教師雜誌の記事も亦、之れが證左たり得るであらう。之等の雜誌に於ては、生活品の騰貴を忽諸にすることは決してないのである。

(百五)『右領域(被救恤的窮乏)の境界にある人々のことを思へ。』『他の人々に在つては：賃銀は增大しなかつた。……人生は十中九までは生存競爭たるにすぎぬ』(一八六四年四月七日下院に於けるグラッドストーンの演說)。『ハンサード』速記文に於ては斯うなつてゐる。『またも、而してより一般に、人生は十中九までは生存競爭たるにすぎぬ。』――グラッドストーンの豫算演說に於ける不斷の顯著なる矛盾に就て、英吉利の或著者はモリエールからの左記引抄を以て之れを特徵づけてゐる。

『見よ此人こそは、白にあると思へば黑にあり。
朝には夕の念を貴め、
他人を煩はし、自己をも惱まして、
絕ゆる間なく心も衣も變ゆるなり。』

(匿名者著『交換論』倫敦、一八六四年刊、第一三五頁)[33]。

敎授フォーセットは、グラッドストーンの如く官廳的考慮に拘束せらるゝことなく、卒直に斯う宣言してゐる。『予は固より、斯る資本增殖(最近十年間に於ける)に依つて貨幣賃銀の增騰せるを否認するものではない。さりながら生活要品の多くは益々價高くなる(彼れの信ずる所に依れば、貴金屬の價値低落に基き)を以て、斯くの如き表面の利益は又著しく失はれてしまふのである。……富者は益々急激に富裕となるも、勞働階級の享くる慰樂には何等知覺し得べき增進も生じない。……勞働者は殆んど、其債權者なる小賣商人の奴隸となる』(百六)。

(百六)前揭(ヘンリー・フォーセット著『英國勞働者の經濟的位置』倫敦、一八六五年、第六七及八二頁。勞働者等が益々小賣商人に支配さるゝは、彼等の就業の動搖及び間斷が增加せる結果である。

我々は勞働日及び機械に關する諸節に於て、英國勞働者階級が依つて有產階級の爲に『富と權力との痲醉的增大』を造り出す事情を暴露した。されど右の場合

に於ては主として、其社會的作用に從事中なる勞働者を考察したのであつた。蓄積法則の闡明を充分ならしむるには又、作業場外に於ける彼れの位置、卽ち其衣食狀態にも著目せねばならぬ。本書の紙數に限りある故、我々は玆では就中、産業プロレタリア及農業勞働者中の最低給部分、換言すれば勞働者階級の大多數者を考慮するに止める。

豫め尙、官認の被救恤的窮乏者、換言すれば自己の生存條件たる勞働力の販賣、不能となり、公の義捐に依つて露命を繋いでゐる勞働者部分に就て一言して置く。英吉利に於ける政府の被救恤的窮民表(百七)は、一八五五年には八十五萬一千三百六十九人、一八五六年には八十七萬七千七百六十七人、一八六五年には九十七萬一千四百三十三人を算した。木綿窮乏の結果、それは一八六三年と一八六四年とに於て夫々一百七萬九千三百八十二人及び百一萬四千九百七十八人に增大した。倫敦に於て最も激甚を極めた一八六六年の恐慌は、同年、蘇格蘭王國よりも人口多き此の世界市場中心地に於て一八六五年に比し一九パーセント半、一八六四年に比し二四・四パーセントの被救恤民增大を釀し、一八六四年初葉の數ヶ月に於ては一八六六年よりも尙著しき增大を釀したのである。被救恤民統計の分解に就て注目すべき點が二つある。一方に於て、被救恤的窮民の滿干運動は、産業循環の周期的轉變を反映し、他方に於て、資本の蓄積が進むにつれ階級鬪爭隨つて又勞働者の自覺が發達するに比例し、政府の統計は益々被救恤的窮乏の實範圍に就て欺瞞するやうになること、是れである。例へば、最近二年間英國諸新聞(『タイムス』紙、『ポール・モール・ギャゼット』紙等)に依つて斯くまで喧しく叫ばれた被救恤的窮民の虐待は、からの事である。フリードリヒ・エンゲルスは一八四四年、全く之れと同一な震駭事、並に全く之れと同一な、『人氣取り文章』に相應しい一時的の聖人振つた口吻を、確說してゐる。されど最近十年間に於ける餓死の驚くべき增大は窮乏の斯る懲治監たる勞役場(百八)の奴隷制度に對して、勞働者等の嫌惡が益々甚だしくなりつゝあるを、無條件に證明するものである。

(百七)英吉利と云ふ中には、いつも蘇斯が含まれ、大英國には英蘭、蘇斯、及び蘇格蘭、聯合王國には以上三國の外に愛蘭が含まれる。

(百八)アダム・スミスが往々尙、Workhouse(勞役場)てふ言葉を manufactory(マニュファクチュア場)と同意義に使用せる事實は、彼れ以後に於ける進步の上に特殊の光明を投ずるも

のである。例へば彼れが分業を取扱つた章の冒頭に曰く、『同じ仕事の各種異なれる部門に使用さるゝ人々は、屢々之れを同一 workhouse 内に集合し得るものである』と。

b 英國産業勞働者階級中の薄給部分

我々は之より産業勞働者階級中の薄給部分に目を轉じやう。一八六二年の木綿窮乏中、ドクトル・スミスは樞密院に依つて、ランカシーア及びチェシーア兩州に於ける窮迫せる木綿工等の榮養狀態に就ての調査を委ねられた。彼れは之れより曩、其多年に亙る觀察に依り次の結論に到達してゐたのであつた。曰く、『諸種の飢餓病を避くるには』、平均婦人の日々の榮養は、少なくとも三千九百グレーンの炭素と百八十グレーンの窒素とを含み、平均成年男子の日々の榮養は、少なくとも四千三百グレーンの炭素と二百グレーンの窒素とを含むを要し、婦人に對しては二斤の佳良なる小麥パンに含まるゝと略々同量の榮養素、成年男子に對しては其れよりも九分の一多くの榮養素を必要とし、而して成年男女の一週間に於ける平均榮養は、少なくとも二萬八千六百グレーンの炭素と一千三百三十グレーンの窒素とを含まねばならぬ。彼れの計算は、窮乏のため木綿工等の消費が切り縮められて行つた慘澹たる榮養と一致せることに依つて、事實上、驚くべき形に確證された。彼等の榮養量は一八六二年十二月には、一週に二萬九千二百十一グレーンの炭素と一千二百九十五グレーンの窒素とを含んでゐたのである。

一八六三年、樞密院は英國勞働者階級中、榮養最不良部分の窮乏狀態に關する調査を命じた。樞密院醫史ドクトル・サイモンは、上記ドクトル・スミスを此任に選んだ。彼れの調査は、一方に於ては農業勞働者に及び、他方に於ては絹織工、裁縫女、革手袋製造工、靴下編工、手袋織工、製靴工等にまで及んでゐる。此の諸部類に屬するものは、靴下編工を除いては悉く都市在住のものである。各部類中最も健全にして比較的好境遇なる家族を選擇するは、調査上の常則となつてゐた。

一般的結果として判明せる所は、『調査を受けた都市勞働者組中たゞ一組に於てのみ、平均窒素供給は假定の絶對的最低限度〔此を降る時は飢餓病を釀すべき〕を幾許か超過し、他の一組に於てはカツ〳〵此限度に達し、而して他の二組に於ては、窒素及び炭素の雙方に亙つて供給が不足――一方の組に於ては極て著しき――してゐた。又、調査を受けたる農業勞働者家族に就ては、其五分の一強は假定の含